

北進軍の  
前衛

衛先鋒は、九月十七日を以て平壤を出發し、第十旅團本隊も亦廿四日迄に悉く平壤を發す。平壤より義州に至る距離は、左の如し。

平壤より順安迄	(日本里程) 五里廿四丁
全 肅川迄	十一里廿八丁
全 安州迄	十七里〇四丁
全 嘉山迄	二十二里二十八丁
全 定州迄	二十八里二十八丁
全 宣川迄	三十六里二十五丁
全 義州迄	五十二里二十五丁

### 第十一

### 大本營の移轉

我皇軍大舉して一面は、鴨綠江を渡り盛京省に進入し遼陽奉天を略するの計畫他の一面には、同時に金州半岬に上陸し大連灣旅順港の要港を占領し渤海の咽喉を

扼するの計畫、交も熟したるを以て、陸海兩軍の統制操縦萬般の機宜に便ならしめ  
ひか爲我 天皇陛下は、八月下旬既に侍従を發遣して廣嶋行營の事を準備せしめ  
玉ひ、九月十三日、東京を發し、十五日を以て大瀛を廣嶋行營即ち大本營に駐められ  
たり、廣嶋大本營は第五師團司令部を以て之に充てられ、而かも大本營に附屬する  
所の各高等機關部は廣嶋市中及び近町村に分置せられたる左の如し。

- (一) 海軍參謀部 大手町三丁目 長沼 鷲藏 方
- (二) 海軍副官部 同 前 家
- (三) 陸軍參謀部 大手町三丁目 神保 啓方
- (四) 陸海恤兵 同 前 中野萬兵衛方
- (五) 陸軍副官部 同 前 百川金藏方
- (六) 陸海管理部 同 前 家
- (七) 兵站總監部 大手町三丁目 中野万兵衛方
- (八) 運輸通信部 鳥屋町 溝口善吉方
- (九) 野戰高等電信部 同 町 家

- (十) 野取高等郵便部
- (十一) 監督長官部
- (十二) 衛生長官部

同町 同家  
同町 同家  
吉島村 浅野哲吉方

所  
なる行在  
儉素粗末

廣島に於る我 天皇陛下の行在所は即ち第五師團司令部に設けられたる大本營の一部にして、畏くも 陛下の御座所は、僅かに御寢の間(一)御座の間(二)其外一室(三)各室の廣さは各十餘疊敷に過ぎず。建築は通常の木造にして、御室内には、臨時假設の垂帳帷等あるも極めて粗末なものにて窓扉の間より御座の室内も窺ひ奉らるべき程の儉素を極めたる也と云ふ。斯くの如き儉素粗末なる行在所に駐御し、在し々々て宵衣旰食の勤勞に服し躬親から軍國の萬機を統裁し玉へるは寔とに畏きとにぞありける。

大瀧廣嶋に進着せられたるの日は恰かも、平壤大勝の日なりしが、陛下は直ちに前記の如く勅語を賜ひ更に侍從武官中村中佐(覺)を勅使として之を平壤に差遣はされ、九月廿九日を以て平壤に到達して、山縣大將、野津桂兩中將に左の勅語を傳へられたり。

勅語

山縣軍司令官  
野津師團長  
桂師團長

勅使中村  
中佐

出征中異狀無きや』

而かも勅使中村中佐が奉命せる所の任務は更に左の諸件に在り。

- 一 御慰問トシテ陸軍將校下士卒一同ニ酒并ニ烟草下賜ハル
- 一 平壤戰爭ノ情况詳細ニ聽取ル
- 一 將校以下假説病院ニ於テノ負傷經過摸樣ヲ聽取ル
- 一 罹病患者ノ員數取調ノ
- 一 軍需品輸送ノ難易實況區分審察ノ
- 一 分捕品目取調ノ

是に於て山縣大將は、右勅使の任務に係る諸件の調査を取り纏め、直ちに電報を以て奉答すると左の如し。

山縣大將ノ奉答

曩キニ平壤ノ陷ルヤ陛下特ニ聖勅ヲ垂レ賜ヒ、今ヤ又勅使ヲシテ遠ク海ヲ渡リテ外征ノ將士ヲ慰諭シ、殊ニ臣有朋并ニ師團長ノ動靜ヲ諮詢セシメ賜フ、夫レ艱難ヲ排擠シ、敵兵ヲ制服スルハ固ヨリ臣等外征將士ノ本分ナリ、然ルチ陛下至仁爲ニ淑慮ヲ煩ハシ玉フ、恩遇ノ優渥ナル、臣等何ヲ以テ之ニ奉答スルコトヲ得ン、誠恐誠惶ノ至リニ堪ヘズ、

韓土ノ形勢ハ、臣己ニ之ヲ在廷ノ日ニ聞ケリ、今具サニ之ヲ實踐ニ見ルニ、山河ノ景趣、時象ノ來往、道途ノ經始、家屋ノ構築等往々軍ヲ行ルニ適セサル者、一ニシテ足ラズ、殊ニ平壤ノ如キハ、別紙戰圖詳報ニ載スル如ク、稀有ノ天險ニ據リ山河自然ノ城郭ヲ爲シ、而カモ堅壁ノ之ヲ繞ルアリテ守ルニ易ク攻ルニ難シ、聞ク清兵之ニ據リ以テ長ク我ニ抗セムトスルノ計ヲ爲シタリト、臣入城以來日々交戦ノ跡ヲ尋子攻守ノ勢ヲ較シ、清兵ガ持久ノ計ヲ爲シタルハ、定トニ偶然ニ非ルチ知レリ、然ルニ攻圍僅カニ兩日ニシテ旭旗忽チ城頭ヲ掩フニ至ル、是レ誠ニ聖威聖德ノ致ス所ニ外ナラズト雖野津中將ノ指揮計畫其宜シキヲ得タルト、第五師團

中將の功  
勞頗る大  
なり

并ニ第三師團ノ一部隊ガ精勇善ク戦ヒタルトハ、共ニ亦大ニ與カリテカアリシヲ信ス、而シテ中將ハ、戦後直チニ再戦ノ力ヲ修メ前軍已ニ遠ク北進ノ途ニ在リ、臣爲ニ此軍ヲ統御スルノ便ヲ得ルコト少カラズ、中將ノ功勞モ亦頗ル大ナリトス、平壤攻守ノ戦況ハ載セテ別紙戰圖詳報ニ在リ、幸ニ乙夜ノ覽ヲ賜ハ、獨リ交戦師團ノ榮ノミナラズ、臣ノ光榮之ニ過キササル也、陛下至仁賜フニ清酒并ニ烟艸ヲ以テシ在韓將士ヲシテ共ニ天恩ノ忝ナキヲ拜スルヲ得セシメ玉フ、臣等恐俱奉謝スル所也、將校以下ノ死傷員數ハ別紙所載ノ如シ、之ヲ彼ノ捕死傷凡ソ三千ナルニ比スレハ其差違鮮少ナラズ、又負傷者治療ノ景況ハ需用物品ノ缺乏セルニ拘ラズ、其經過頗ル佳良ニシテ輕創者ハ己ニ起チテ隊務ニ服セムトスル者アルニ至レリ、病者ノ員數ハ別冊ノ如ク懸軍異域ニ在ル者ニ於テハ蓋シ最少數ナリトス、沿道人烟稀少ニシテ、且ツ民人兵ヲ恐レ四方ニ離散シ爲ニ負擔ニ任スル者尠ク道途數少クシテ峻夷相錯綜シ、別冊記載ノ如ク大ニ人馬ノ跋涉ヲ困シメ頗ル運搬ノ便ヲ阻障セリ、捕獲ノ物品ハ別表ノ如ク其數極メテ多シ、而シテ其兵器ニ至リテハ銳鈍一ナラズ、歐西現用ノ火砲若クハ輓近其銳ヲ稱セラル、所ノ利

器モ少カラスト雖今回第五師團長ヨリ天覽ニ拱セル武器ノ如キ中古ノ兵仗モ亦頗ル多シ。

以上謹テ縷記スル所ノ如ク風土山川我兵ノ健康ニ宜シカラス。人馬道途我軍ヲ送致スルニ便ナラスト雖聖威聖恩ノ加ハル所三軍ノ志氣ハ艱難ニ逢フテ益々振ヒ幸ニ連勝ノ効ヲ收メタリ。臣等不肖固ヨリ聖恩ニ奉答スルノ資ニ乏シト雖上下益々協同奮勵敢テ陛下ノ威徳ヲ四瀛ニ發揚セムヲ期ス。伏シテ願ハクハ陛下復々闔外將士ノ動靜ヲ以テ宸襟ヲ勞シ玉フナカラムヲ臣有朋誠恐誠惶頓首

上下協同奮勵

明治廿七年九月廿九日

第一軍司令官陸軍大將伯爵 山 縣 有 朋

# 日清陸軍史卷四

## 鴨綠江の戰

### 第一

#### 鴨綠江附近に於ける清軍の狀勢及配備

初め野津師團長が未だ開城府に至らざるに先ちて平壤に在る清軍諸將は、日本軍が三萬以上の大兵を三道に分ち、一方は開城府本街道よりし、一方は北東元山街道より成川に出て他の一方は大同江下流の沿海安州定州海岸に上陸し、以て支那本國との通路を斷絶するの策に出るならむと恩料し、痛く之を恐れ、攻守共に兵數の不足なる所以を唱て、之を天津に電報し、援兵大數増加發遣を請ふと極めて切なりき。衛汝貴より八月廿日、八月廿七日、八月十六日、八月十八日、李鴻章并に李の幕僚樞要官に向て發遣せる所の電報、及び八月廿五日馬玉崑、左寶貴、豐陞阿、衛汝貴、四將連署を以て李鴻章に向て、援兵増遣を請求せる電報を參看すべし。

援兵大數増加の款

鳳城、九連城、大東、清國、兵站、部の

李鴻章は、清將の請求に依り、大連灣屯在の盛字軍、三營總兵劉盛休及び正定練軍馬隊二營徐邦道の率ゆる所、并に盛京、吉林、黑龍江、各省の兵をして、鳳凰城、九連城、大東溝に向て發せしめ、平壤、義州間五百清里を分ちて、四段と爲し、每段二百五十清里に官站一ヶ所を設け、哨兵隊長一員及び哨兵數十名を置き、以て糧食、柴艸一切の供給連絡に便にせしめ、米、糧は、間斷無く、義州より水路を經、平壤に向て之を送るの準備を爲さしめたり。

今、鴨綠江附近に於る、守備兵各營各隊の兵數如何と看れば、大槩左の如し

(一) 盛字軍

十八營 九千人

直隸省小站に從來屯在したる准勇の一部にして、支那兵隊々の聞へあり。而かも、李鴻章が誇れる所の精兵の一部たり。此年七月、衛汝貴總兵の指揮に屬し、平壤に出張したるも、平壤敗後、衛は其罪惡發覺し、朝廷の嚴譴を蒙り、ひりたるか故に、此軍は分ちて甲乙二部と爲し、甲は總兵呂本元之を統べ、乙は總兵孫顯寅之を指揮して、其六營は鴨綠江附近に備へたるも、其他は安東縣附近に在りしと云ふ。

銘字軍十

(二) 銘字軍

十二營 四千人

從來大連灣の守兵にして、總兵劉盛休の率ゆる所なり。九月中旬(十五日頃)運送汽船新裕、鎮東、圖南、海定、利運に載せられ、北洋艦隊の護送を受け、大連灣を發し、十六日より十七日に亘り、大東溝に上陸し、九連城に向ひ、其防禦の主力と爲りたる者にして、其大部分は鴨綠江附近に備へたり。

(三) 毅字軍

十營 四千人

從來旅順口の守兵にして、宋慶提督の統る所、曩きに、其一半二千人は、總兵馬玉崑に従ひ、平壤に赴ひ、八月四日、船橋里に於て力戰したるもの、他の一半は、旅順より後發して、九連城に來れるもの、十月廿二日、宋慶は、其三營を馬玉崑に授けて、虎山に分駐せしめ、翌日又一營を加へて、同山防禦に當らしむ。

(四) 蘆防准勇及古北口練軍

四營 二千人

元と提督葉志超の部下にして、後に總兵聶士成の指揮に屬せられたる者也。初め葉志超の牙山成歡に在るや、北塘、蘆臺及び古北口、山海關附近の精

蘆防准勇、古北口練軍、四營

毅字軍十

兵七營を率ゐしも、成歡の敗戦既に五百餘人を失ひ、平壤の大敗益す潰散して隊を成す能はざるに至れり。故に虎山の役に戦闘に與かりたるものは僅かに四營に過ぎず。然れども、聶士成新兵を増募し葉志超の部下敗兵を收拾するの任に當れり。

(五) 淮軍仁字虎勇

營口に於て新募せるものと云ふ。

五營 二千五百人

右五部合計

四十九營 二萬四千五百人

然れども此内虎山の戦争に參與したるものは、盛字軍の六營、銘軍の大部分、毅軍の十營、聶子成の四營等にして大約廿五營内外なるべしと云ふ。又安東縣大孤山海岸に向て日本軍の上陸を防ぐが爲に、各處に配置せられたる守兵の區別大概左の如し。

地名	軍隊營の名	隊長氏名	將官の姓名
大孤山	盛軍廂紅旗部隊	廣恩	總兵 豐陞阿
青堆子	同正紅旗部隊		

小次山	同正黃旗部隊	魁	
小柞木山	吉字左翼馬隊	慶	慶祥
榆樹房	同右翼馬隊	慶	
大東溝	奉軍後營	林	
大東溝	同歩隊左營	李	
北井子	同右營	金	
大柞木山	同新歩隊右營	胡	
大東溝	同靖邊馬隊中營	吳	
窟窿山	同靖邊歩隊前營	齊	
大東溝北砲臺	同靖邊歩隊左營	王	
大東溝西南砲臺	同新練軍砲隊	周	
計 十三隊		三千七百人	

總兵 聶桂林

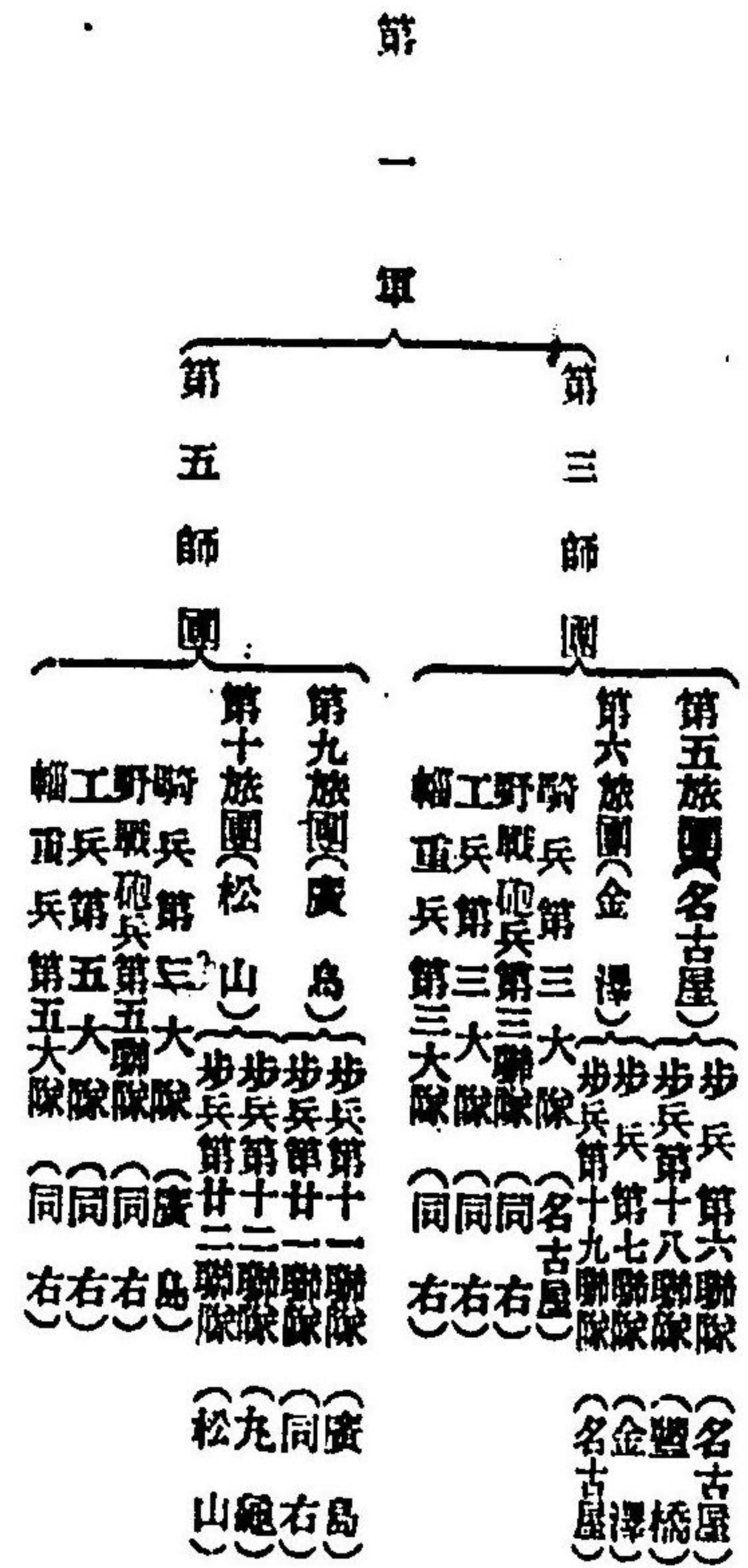
又黑龍江將軍依克唐阿は、九月十二日上諭を奉し、馬歩十二營(四千人)を發し、其部隊副都統倭克津泰なるもの之を率ひ、十月十二三日頃より水口鎮附近に至りしも、其

後長甸寬甸附近に移駐せり。

### 第二

## 征清第一軍の部署

我征清軍進攻の廟算は、夙に決定せられ、第一軍司令官の重任を山縣陸軍大將に命ぜられたり、而して其所謂第一軍なる者は、第五師團全部と第三師團全部(後備軍若干部分を除く外)を以て編製せられたるものにして、之を系示すれば左の如し。



各旅團長並に參謀長以上の將官

進攻の目的は北京に在り

右第一軍各旅團長并に參謀長以上將官の姓名左の如し。

第一軍司令官	陸軍大將	伯爵	山縣有朋
第五師團長	陸軍中將	子爵	野津道貫
第三師團長	同		桂太郎
第九旅團長	陸軍少將		大島義昌
第十旅團長	同		立見尚文
第五旅團長	同		大迫尚敏
第六旅團長	同		大島久直
第一軍野戰砲兵監	同		黒田久孝
第一軍參謀長	同		小川又次

我征清軍進攻の目的は北京に在ると言ふを俟ず、而かも北京は彼四十年前に於る英佛連合軍に侵略せられたる時の北京に非ずして、渤海直隸の海岸海上共に儼然たる防備の既に整完を告げたる者あり、海には北洋水師裝甲鋼鐵艦隊あり、陸には旅順港、大連灣、威海衛の諸要塞砲台あり、太沽北塘の堅堡あり、而して是等の防禦

線以外に於て滿洲國境には九連城の要害あり、摩天嶺の險阨あり、遼河の要衝あり、山海關の堅塞あり、今我軍が北京に入るに先ちて、須らく先づ九連城を陥れ、右翼軍隊は滿州南方の要衝各城鎮を陥領すると同時に、我左翼軍第二軍は金州半島に上陸し、背面より旅順の大堅要塞を陥領して、以て我か北征全軍の一大根據地と爲さざるべからず。

故を以て、我大本營は、夙に第二軍編製出師準備を整へ、第一師團(東京全部及び第六師團の一部)并に臨時攻城廠を以て、征清第二軍を組織し、第一師團兵は、九月廿二日より、既に續々東京を發して、廣島附近に集合し、第六師團の一部第六旅團は、長谷川少將好道之を率ゐて、仁川港に進發せり。而して、大山陸軍大將は、九月廿六日を以て、第二軍司令官に親補せられ、左翼軍を統督して、金州半島に上陸占領するの任務を擔當せり。

是に於て、我第一軍の前衛たる第十旅團長立見少將は、九月廿三日を以て、其先頭部隊を肅川に發達せしめ、同旅團本隊は廿四日を以て平壤を發し、廿六日安州に入る、安州は平壤を距る十八里、南に丘陵を帯ひ、北に清川江を控へ、川幅稍や闊く、海潮來

征清第二軍

大山第二軍司令官

安州の位置

安州の戦利品

往し、時としては徒涉し難きとあり、城の周圍約一里半、戸數凡そ千二百、市街井然東西八丁南北四丁、古來朝鮮北西の一鎮、將府として、滿州胡軍の來侵に備へたる處たり。平壤の未だ陥らざる以前、清軍兵站部を此地に設け、清川江涯に於て二三堡壘を築きたりと雖、平壤陥没するを聞くや、守兵皆潰へ走り、其遺棄する所の諸品、我第十旅團の獲る所と爲れる者、左の如し

「グルツ」野砲四門 ○砲彈千五百發 ○小銃彈藥二函、每函千發入 ○銃劍四百本  
○天幕四百張 ○電信線硬線三條、組貳萬メートル ○電線被覆ゴム線五千メートル  
○電槽廿五個 ○其他電信線用材料若干 ○粟六十餘苞

平壤の敗走兵一萬餘人は、此地を過ぎ、沿道民家を奪掠すると至らざる所無く、且つ最後放火し、城外民家は擧げて灰燼と爲りたるか故に、我軍微發を行ふに由し無し。而かも、後方輜重縱列未だ至らざるを以て、旅團は、其前哨騎兵を發して、遠く義州街道を偵察せしめ、本隊は、安州に在ると數日。

先鋒騎兵は十月一日を以て、鴨綠江左岸に至りしに、清國騎兵江を越へ、義州に在る者凡そ四十騎亦來り、我軍情を偵察しつゝあるに會す。我騎兵之を擊退し、容易に南

先鋒騎兵



耳湖浦

岸要地を占領す。十月五日、第十旅團本隊は安州を發し、嘉山に宿す。此地も亦平壤敗兵の焚掠に罹れり。此日第五師團本隊も亦進みて肅川に至る。十月六日第十旅團は定州に入る。初め我軍は北進兵站大線路を大同江口より海に沿ひ定州に達せしめむと企てしも、定州老江水淺くして、船舶の出入に適せず、故に鐵島より此方面に向ひし運送船信濃川丸は空しく大同江に返り、海軍の偵察艦は更に各地沿海を探測し、定州の北方なる鐵山龍川二府の間に於る耳湖浦を以て集積地と定むると爲れり。然れども、十月十五日以前に在りては、此耳湖浦兵站陸海の連絡は未だ通せるか故に上陸我第十旅團及び先發諸團の行軍は其輜重の缺乏を極め、其兵站の困難は殊とに太甚だしかりき。

行軍困難  
稍減退

平壤と義州との間は、曾て清軍の大兵站線たり。故に曩に清軍入韓の際、勞費を惜まず、大舉して、其險阻峻阪を削り、或は別路を開通し、以て運搬車馬の便に供したるか故に、之を平壤以南に比すれば、道路平夷にして、幅も亦廣濶なるを以て、行軍の困難稍減せるか如し。然れども、兵站の困難にして、輜重缺乏淹滞に悩むとは、依然たり。他無し。沿道韓人は清軍前日通行の際に於る奪掠の慘酷なりし先例に痛懲したるを

清軍の防  
備

以て皆遠く遁逃し、人夫の雇役に就く者無きは勿論、隨て其運送に供すべき牛馬の極めて缺乏なる且つ道路粗にして、日本製造の荷車を用うるを得ざるか故なり。故を以て、我第一軍三萬餘の大兵は、其輜重不便の爲に、其進行頗る艱難にして、平壤義州僅かに六十餘里の處に廿餘日を費やし、稍やく義州附近に集合したるは十月廿日にてありき。

是より先き、我先鋒騎兵の偵察する所によれば、敵軍は鴨綠江右岸の虎山の險要に據り、其右翼を安東縣沙河子河海子附近に張り、左翼を義州街道の上流に展はし、其兩翼の距離大約八千米突、凡そ我一里八合餘正面には連系堡八箇所を幕營十八團を設け、鴨綠江水を利用して防禦に努むるもの、如し。而かも虎山より九連城安東縣各所に屯營せる清兵總數は二萬餘人に降らざるべしと云ふ。

初め清國は平壤の守禦十分ならざるを患ひ、殊に一方には、日本陸軍の朝鮮に入るもの三萬に超へ、而かも平壤城守の清將よりは、清軍後路の危虞あらむとを頻りに

老將宋慶  
李鴻章の  
戒告

李鴻章に電照せるか故に、李鴻章は援軍を増發し、四川提督にして老練名將の評ある宋慶を擧げて征討總帥に任じたり。是れ實に九月中也。旬既にして、平壤大敗、清軍潰走の報、天津に達するや、李鴻章は急電を葉志超及び馬玉崑に發し、之を戒めて曰く、「爾將は宜しく義州に駐まりて敵軍を防ぐべし。義州には兵糧軍器共に夥しく積集しあるか故に、之を便宜に充用して、以て平壤の潰卒を收集せよ。義州全きを得ば、我進軍の根基茲に定立すべく、且つ奉天省の門戸を保つに利あり」と。當時清將にして、普通文明國第十九世紀末の用兵術と戦略とに通達する者あらしめたらむには、此李鴻章の訓電命令に従ひ、義州の險要を占め、假備築城を以て之を嚴守するとを能くすへしと雖、是れ彼怯懦無能なる老衰將軍葉志超輩の能くする所に非るか故に、葉志超等は、李鴻章の命令に従はずして、倉皇急速に義州を棄るのみならず、鴨綠江を渡りて遠く北西に逃走したるなり。宋慶の九連城に来るや、恰かも平壤陥落し、其敗走大兵狼狽して、鴨綠江を渡り、九連城に投ずる者、大東溝、大孤山地方に逃走する者陸續たり。宋慶は劉盛休と共に躬ら部下を督勵し、江岸防禦工事に勤め、上流水口鎮より下流安東縣に至る迄、各處要地

虎山梨子  
園の防備

堡壘四十  
餘箇

各隊の陣  
營

多數優勢  
の兵力を  
要す

に守備を配設し、虎山(或は虎兒山とも云ふ)より梨子園に至る一帶の險要には、配するに銘字軍及び蘆台親兵、李鴻章部下淮勇及び練軍中の精兵と稱せらるるものを以てし、九連城外附近には、連珠的堡壘を設け、城中には守兵十營を備へたり。九連城及虎山、梨子園附近要地に新築せる堡壘は、大小合計四十餘にして、其壘の高さ三四米突、堡壘の厚さ一米突以上、砲彈と雖も、我日本軍山砲にては之を貫く能はず。外壕も亦深廣にして、之に接近踰越すると易からず。加ふるに主要なる堡壘背後の高地には亦又堅固なる砲台を設け、瞰射以て敵を殲くすとを得べし。蓋し鴨綠江岸九連の地は、之を平壤に比すれば、彼れか如き特殊著明なる險城なし。と雖前に數百米突の江流と曠淵なる流域を控へ、而かも其右岸要地をして、機に先だちて防守の準備を固むるの餘日あらしめたるか故に、之に築くに假備築城を以てし、掩体堅牢なる堡壘を以てせると此くの如くなるときは、其防禦力の堅實を加ふるは、勿論にして、守兵に倍せる多數優勢の兵力を用うるに非れば、僅々に五日七日の攻撃を以て之を援き得べきに非ると知るべし。十月廿一日に於る、我第一軍各隊の陣營は左の如し。

作戰計畫の指定

(イ) 義州 第十旅團立見少將所率  
 (ロ) 鐵山及び宣川口 第五師團司令部  
 (ハ) 同右 第九旅團  
 (ニ) 所申鎭附近 第三師團司令部  
 (ホ) 同右 第五旅團大迫少將所率  
 (ヘ) 同右 第五旅團第十八聯隊  
 (ト) 同右 騎兵第三大隊  
 (チ) 定州 砲兵豫備  
 (リ) 義州附近 騎兵第五大隊

廿二日總軍悉く義州に集まり進軍の部署并に作戰計畫を指定せらるゝと左の如し。

佐藤枝隊

一 佐藤大佐は廿四日拂曉を以て一部枝隊騎兵及び歩兵若干を率ひ鴨綠江上流水口鎭より徒歩渡江して敵壘を攻陥し直ちに左方に迂回して梨子園の敵

陣を衝き第三師團桂中將の本隊に合するを目的とす

桂本隊

一 桂中將は第三師團の歩兵若干山砲隊若干を率ひて廿五日曉軍橋鴨綠江の本道を渡り虎山に向ひ敵の正面を攻撃すべし

大迫枝隊

一 大迫少將は第三師團歩兵若干山砲隊一部を率ひ右翼隊と爲り軍橋の上流を渡り虎山東方高地を攀り敵の側面を攻撃すべし

立見枝隊

一 立見少將は第五師團の歩兵若干及び山砲隊一部を率ひ左翼隊と爲り虎山の左方を廻る

右翼隊は虎山東方高地より伏撃して敵壘を瞰射し以て桂中將の正面攻撃を援くべし。

左翼隊は虎山左方に廻り梨子園と九連城との間に出て其中間を遮きり兼て桂中將の前進を援くべし。

奥山少佐枝隊

一 歩兵一部を以て左翼枝隊と爲り、下流野一浦に屯す

佐藤大佐枝隊

一 右翼枝隊と爲る豫め前岸に在り。

黒田少將砲隊

一 黒田少將は野砲門及び臼砲門を以て義州東方の高地に砲列を布く

左翼枝隊は安東縣の敵兵に備へ、黒田少將の砲隊は専ら前岸虎山を射撃し我正面なる桂中將の前進を容易ならしむ

(按するに)第三師團の第六旅團(大島少將は、此役際尙ほ朝鮮宣川附近に在りて、九連城の進撃には預からざりしと云ふ。

第三

九連城の占略——虎山附近の戦

鴨綠江

鴨綠江は其水深は大同江に及はずと雖亦朝鮮五大江の一つに列せられ、今や天氣

清將實料の外に出

佐藤大佐枝隊

杜毛里渡河點に漕行集合

既に寒く、江水氷凍の候にして之を徒涉せんと頗る難し。又船舶は悉く之を奪ひたれは、急に之を辨すると難し。軍橋急架の事業の如きは、清軍將帥宋慶始め、誰れありて其成し得べからざる企たるとを信せせる者無し。故に日本軍が之を徒涉し來らむとは、清國將帥の夢にも想はざりし所也。何ぞ料らん、日本軍の畫策舉動は着々彼れ、清國將帥の意料外に出てんとは、

十二月廿三日、朝鮮國北邊杜毛里水口鎮より上流約一里半許鴨綠江岸の一邑里に在る所の佐藤大佐の支隊(歩兵第十八聯隊の第二大隊及び第三大隊、一中隊を缺く)并に騎兵四騎山砲二門には、其日後七時を以て左の命令を受取りたり。

(一) 軍は廿五日拂曉虎山の方向より安東縣附近に向て攻撃す。

(二) 其支隊は明廿四日午前二時を以て渡河し、梨子園に向て進み軍の攻撃を援くべし。但し單獨なる激戦は可成之を避くべし。第三師團渡河の後には之と合すべし。

此命令に従て、佐藤大佐は、十月廿四日午前二時迄に渡河を始めんとを期せしも、後方より送るべき糧食縦列の延滞して豫期の如く杜毛里に達せざりしか爲に、渡河

の時期を延引し、廿四日午前十一時を以て、始めて杜毛里渡河點に、潜行集合せしめ、大佐は即ち左の命令を下たし、逐次に渡涉せしめたり。

(一) 第五、第七、第八、第十、第九、第六、中隊順次に渡涉すべし。

第五中隊は前岸敵陣の中央なる(ハ)山を第一目標として進み、前岸に達せば、一時後續各隊の徒涉を進護すべし。

(二) 砲兵小塙渡河點の西方高地に布列せる山砲二門及ひ其掩護小隊は、敵の支障を見は猛烈に之を射撃し以て之を撲滅せしむべし

午前十一時六分より渡涉を始む。其先頭第一の水流入るを見るや、前岸の敵兵は之を覺知し、諸隊に警報を傳ふるもの如く、徒歩傳令使が疾驅して東西に奔走するを見る。我先鋒第五中隊が中流に達したる頃、前岸(イ)印獨立家屋内より敵の歩兵約廿名許、現出し、堤塘上より射撃を以て我か渡涉を妨ぐ是に於て、我山砲小隊は射撃を開始し、僅かに一二發の落着するや、敵の哨兵は忽ち奔竄し去れり。此時前岸東方(ニ)印堡壘より及び安平河右岸(ホ)印堡壘より、十字火線を以て頻りに我五中隊に向て砲撃を始め、我山砲も亦之に應射せり。

我渡河を妨ぐ

前岸に達す

敵騎支よる能はず

安平河口の砲壘

午前十一時四十七分、第五中隊は、全く前岸に達し(ロ)印地點に散開前進す。此時敵騎約二百許突出し、我第五中隊に向て猛烈に射撃を爲せり。第五中隊は直ちに應戦し、次て第七中隊及び第八中隊も亦徒涉し終り第七は第五中隊の右方に散開し、第八は右翼後方に位して前進射撃を逞うせしに、敵騎は遂に支ゆる能はずして、潰走せり。我兵逃くるを逐て進撃し、(ハ)印高地を占領し、更に左に向て安平河口の西方なる敵の幕營中に在る騎兵を射撃し之を散亂せしめたり。

第十中隊が前岸に達するに際し、前に鴨綠江上流に逃走せし所の敵騎約二三十再ひ返し來りて我第八中隊の後方を進撃せんとす。故に大佐は令して第十中隊をして一齊射撃を爲なさせしめたるに、敵騎忽ち退走せり。此に至りて、敵騎の我後背を窺ふ者無きのみならず、(ニ)印敵堡も亦其砲撃を沈黙して我前進隊後顧の患ひ無きに至れり。

敵の左翼砲壘は先づ屈せりと雖其右翼たる安平河口の砲壘(ホ)印は、我第九中隊第六中隊の全く江を渡り終る頃迄、尙ほ能く其砲撃を續けたり。然れども、我二大隊第五、第七、第八中隊が(シ)印高地に達するに及びて、該壘の敵も亦衰へ、春字の旗旗を建

一時行進を停止す

優勢は彼に在らず

てたる儘其堡壘を棄て、退走せり。時に午後一時半頃なり。午後一時大隊(一中隊欠)は平安河口西方高地に達す、尙前進を繼續し、西方約二千米突の高地に達す。佐藤大佐の本隊は第六中隊を前衛とし、鴨緑江右岸に沿て西方に下りつゝ、敗兵を驅逐し、午後三時安平江口より西方約四千米突に於る高地を占む。此谿谷に敵の幕營ありしも、皆已に空虚にして一兵無し。時に第二大隊が未だ本隊に連絡せざるを以て、本隊は一時其行進を停止すると、二時間、午後五時大佐本隊は再び前進し、安平河口六十米突高地に達するも、第二大隊は尙未だ到らず。時に日將に暮れむとし、且つ前方八百米突の高地に敵の標旗四本の植立せしを望み見る。故に佐藤大佐支隊は此夜は斯に停止して露營せり。

此水口鎮附近渡河の一段なるものは、固より是れ一小鬪に過ぎずと雖敵は逸を以て勞を待ち、颯強なる天險要地の利益を占むるもの、我は氷凍を冒かし、江水を涉り敵前砲火射程内に於る掩蔽絶無の地位に前進せざるを得ず。加ふるに彼には『グリップ』砲四門ありて、我は則ち砲僅に二門あるのみ、優勢は彼に在りて、我に在らざる也。然るに咄嗟の間一兵をも損せずして、此江流を越へ敵壘を陥れ、獲る所の戦利

戦術に暗き可驚

架橋點の探究

品は、『グリップ』二門、小銃十五六挺、防塞用具多數、敵兵死者廿人、傷者之に稱ふ、亦以て九連城敵兵をして、其心を搖かさしむるに足る者あり。

支那軍隊の迂濶なる、其將帥の徒に小勇を恃み、淺薄なる小經驗に狂れて而かも、第十九世紀末文明邦國の軍事戰術如何に暗きと寔に驚くへし。鴨緑江本道江流敵前に於る我日本兵の架橋工事を妨くるとを知らざるが如きは、則ち其一例の著るしき者に非ずして何そや。

夫れ遠征軍の深く敵地に進入するや、河川我前に横はるも、舟無く橋無く、之を渡るの極めて難きに困むとあるは、珍らしからず。此の如き困難は我第一軍が、夙に豫期して、之を制するの方略を蓄へたる所なるは、勿論なり。故に第五師團の先鋒偵察騎兵は十月一日以來、鴨緑江南東岸に達し、江流の深淺に注意し、其渡軍に適すへき地點を探究するも、江上の船隻は悉く皆敵の奪ふ所と爲りたる後なれば、之を採るの難きに苦しむたり。既にして我工兵第五大隊も亦十二日を以て江岸に達し、直ちに架橋點を探究せり。時に敵の大軍は既に江流の對岸に充滿し、江流は其一目の下に在るか故に、白晝之を測量すると能はず。亦水音を禁せざるを得ず。馬場工兵少佐(正)

雄は部下工兵に命じて先づ十八隻の扁底舟を造らしめ、義州附近山林及び民家に就きて架橋に用うべき柱桁及び橋柱橋板の材料を集めしめ、而かも一面は測量に従事し、義州街道の上流なる虎山の前面に於て一橋を架すべきとに決したり。

鴨綠江は九連城と義州との中間に於て其流れ岐分して甲、乙、丙、三道たり。甲流は幅六十米突、水深八十珊米突、我曲尺凡二尺六寸強以て徒渉すべし。丙流も亦大約甲と同じと雖、乙流則ち中江は幅百五十七米突、凡そ我八十二間、水深三米突、我凡そ壹丈にして此中江と甲流との間に横はれる沙洲は、南北狹長にして、民家各處に點在し、其東邊岸頭には一税關あり。九連城督征局の出張處にして、江上輸出入貿易を監理するものなり。此沙洲を稱して支那人朝鮮人共に中江臺と云ふ。我軍の架橋を要するは此中江臺と其對岸西北方沙洲との間に於る中江也。此中江の流れ百五十七米突を暗夜に乗して洄渡し、一線の繩を前岸に張らざる可らず。此危險なる任務に當らむとを自ら奮て願ひ出たるものは第五大隊工兵豫備一等卒阿波人三原國太郎にして、氏は元來游泳術の達人なれども、此夜嚴寒酷烈にして江水凜冽たるか故に、手足麻痺し、終に中流に溺死し、岸上工兵百萬之を救はむと欲せしと雖、敵前咫尺なるを以て如何ともする能はず。工兵一等軍曹三宅兵吉は之を見て切齒奮激、直ちに身を跳らし、水に投じ、部下の一本をして繩を腰にし、已れと共に敵岸に洄行せしむ。二人共に勇健、彼岸に達し、遂に其任務を完うして返れり。是に於て水深の實測既に遂げ、小架橋縱列も亦到着したるを以て、廿四日午後九時より暗夜に乗し、富岡少佐(春壁)は歩兵一大隊を率ゐて架橋掩護隊として、架橋點上流に於て甲派の流を渡り、中江臺の右岸に掩堡を急造し、以て敵の來襲に備へ、而かも、工兵は其掩護に依りて、終夜架橋の工事に従事し、第一江則ち甲流は淺きが故に架柱橋を以て、之を辨し、第二江則ち中江は急造船橋を架し、廿五日曉に至る迄に之を成功せり。

中江臺

三原國太郎

工兵不朽の名譽

此夜敵前寒水深き處に於る架橋の工事を成し、遂げたる我工兵の勇猛沈毅堅忍は寔に彼れ歐洲強國精銳の工兵と雖も亦能くし難しとす。所の大苦界逆境たり。然るに、我工兵は之に堪へ之を能くせるは、不朽の名譽と謂はざるべからず。

### 第四

#### 鳴緑江渡河本隊の戦畧及び其戦況

鳴緑江岸の戦は、單に其渡河橋梁架設の効にのみ依りたるか如く、世人は推想して今日に至るもの多しと雖、其實は然らず。此日我進攻軍の先鋒第六聯隊千餘人は、架橋の遲きを待つに迫あらずして、船隻を以て辛うじて江流を渡り、廿四日夜十一時半より翌廿四日曉五時迄に、以て我進攻戦畧の目的を達するを得たる者なり。今先づ當時第三師團の命令を左に擧げん。

○第三師團命令 (十月廿四日午後八時四十分)  
(於義州府第三師團司令部)

- (一) 敵は九連城附近より老龍頭を経て安東縣に亘る線に於て防禦工事を施し又虎山附近に防禦工事を施し漸次其兵力の増加するを見る。
- 佐藤枝隊は今廿四日午前十一時半水口鎮上流に於て渡河し、其後梨子園に向て進み軍の右翼を援助する筈なり。
- (二) 軍は明廿五日拂曉より敵を攻撃す

先鋒第六聯隊

此第六聯隊の渡河は即ち既を以て渡河したるものなり

軍の豫備砲兵は鳴江廟、鳴緑江の中江台州上に在りの高地に放列を敷き師團の攻撃を援助す。

混成旅團の立見隊一部は師團に繼ぎて中江臺に渡り師團の左翼を掩護し、其殘部は義州南端に在り。

(三) 第五師團は義州の西南隅に在り。

(四) 歩兵第六聯隊(一大隊缺)騎兵六騎は午前四時半迄は鳴江廟の北方に於て渡河を終る如く出發して敵の左側を攻撃すべし。但し師團の他の部隊は連絡を爲すべし、孤立して前進すべからず。

(五) 歩兵第六聯隊の一大隊(第一大隊及び第十八聯隊の一大隊、第三大隊、一中隊缺)は大迫旅團長之を指揮し午前四時半に架橋點より渡河を始め歩兵第六聯隊(第一大隊、第二大隊)と連絡を爲し、虎山東北高地の敵を攻撃すべし。

(六) 野戰砲兵第三聯隊第一隊缺は架橋點より渡河し、右折して虎山東北高地に面して砲列を布き、鳴江廟高地の砲列と互に共同して師團の攻撃を準備すべし。



(七) 騎兵第三大隊は四騎を明廿五日午前四時半迄に余の許に出し、他は架橋點より渡河し、架橋點の地方中洲に隠蔽して位置すべし。

(八) 衛生隊半部は騎兵隊の傍に隠蔽して位置すべし。

(九) 野戰病院は義州に開設すべし。

(十) 大行李及び彈藥大隊は略圖の如く位置し行進の準備を爲しあるべし。第一略圖省く。

(十一) 糧食縱列は宿營地に在りて駄載の準備を爲すべし。

(十二) 架橋渡河の順序左の如し。

歩兵第六聯隊の一大隊、第三大隊、野戰砲兵第三大隊、歩兵第十八聯隊の一大隊、騎兵第三大隊、衛生隊半部。

(十三) 余は先づ孔子廟北方の高地に在り、其後砲兵陣地の近傍に至る。

歩兵第六聯隊は廿四日夜九時三十分義州を發し、十一時半渡河點に達し、直ちに三隻の河船を以て鴨綠江を渡河し、始め廿五日午前五時四十分全く渡河を終り、虎山の東方約二千米突の地に集合し、第一大隊は山下に、第二大隊は山を攀りて虎山に

大進少將

向て進み六時五十分敵の前哨を攻撃して之を走らし、七時廿分大進旅團長の部隊橋架點より渡河し來れるものと連絡し旅團長の直轄に屬せり。

十月廿五日午前四時大進少將は右翼隊を率ゐ、軍橋を渡りて直ちに迂回し虎山東方の高山に攀ち登る間に、桂中將は六時過ぎ本隊を以て軍橋を渡り、敵壘の表面に向て展開前進攻撃を始めた。

敵亦能く

敵兵は前夜來江流に於る我軍橋架設急成工事の此くの如く成功したるとを夢に、だも知らず、今や突然大軍の江を渡り來るに逢ひ、争でか一驚を喫せざらんや、然れども敵軍は、九月中旬以來充分餘裕を以て堡壘を建築し、彈藥兵糧を積み蓄へ、以て充分防守を完整し、天然の要害に加ふるに人力人工を以てしたる以上の事なれば、敢て狼狽の色を現はさず、頗る能く應戦せり。

我鴨江廟砲臺の山砲は六時四十五分より射撃を始め、次て此砲隊は更に前岸歩兵第六聯隊の戰線に進み歩兵を援助し、虎山の敵壘を攻撃せり、而かも、我砲兵本隊、黒田少將指揮は鴨綠江の左岸高地統軍臺に砲列を布き、野砲「クルップ」榴霰彈の敵壘に連射し、以て桂中將の本隊兵勢を援くと雖、敵の蘆臺兵は自若として善く防ぎ、戦

銃聲の如き

空虚側面より射撃せらるる清兵動揺

新手段然鋭氣

ひ、且つ、梨子園、後方、幕營、よりは、陸續として、援兵を、前面、堡壘に、發遣し、其、射撃、頗る、猛烈にして、當り、易からず、江東岸より、江流を、隔て、之を、望めば、晨霧、硝煙と、相混和し、江岸、敵壘は、一團の、白雲、深く、鎖さし、其中に、轟々たる、爆發の、響きを、聞くのみ、之に、頃らくありて、虎山、京方、高處、中腹より、迸り、起れる、幾團の、硝煙、霧の如き、銃聲、進みて、敵壘に、向ふものあり、是れこそ、我右翼、大迫、枝隊が、今や、其、目的、地たる、高峰に、攀ち、敵壘、虎山の、側面、瞰射し、始めたる者なれ、

敵は是れ迄、正面、攻撃、桂中將の、軍隊を、のみ、視認めて、此を、専途と、力戰、防禦し、居たる際なるに、思ひも、設けぬ、東方の、空虚、側面なる、高峯上より、其、堡壘、中を、猛烈に、瞰射せられしかば、虎山、堡壘、中、俄かに、亂れ、騒ぎ、清將は、之を、制すれども、從はず、殆んど、堡外に、退かむとする者多し、時に、恰かも、午前七時、過ぎきなりき、然るに、九連城に、在る、敵將、蓋し、宋慶若くは、盛休は、虎山の、堡壘、苦戰の、狀を、聞くや、直ちに、城中の、歩騎兵、二千餘人を、發し、急驅して、赴ひ、き、援けしむ、此、二千餘人は、新手段の、鋭氣、颯然として、直ちに、城を出て、虎山に、赴ひ、かむとす、此時に至る迄、江の、左岸に、屯して、時機を、待ちたる、我が、左翼隊、立見、少將は、『今こそ、好し』と、軍橋を、渡り、七時頃、直ちに、虎山の、西方、即ち、左方

敵の地利宜きを

急撃之を陥る

虎山堡壘

立見枝隊

に、廻り、今や、九連城、中より、繰出し、來れる、所の、敵軍、新手段の、援兵なる、四縱隊に、出逢はたれば、敵の、新手段は、旗を、駢へて、猛進し、之れに、加ふるに、前面、九連城の、突角部より、野砲を、射撃すると、頗る、猛烈なり、我兵力、戰すと、雖、敵の、地利、頗る、宜しきを得て、敢て、沮む色無し、立見、少將は、此機を見るや、急に、其隊を、指麾し、虎山の、西方、即ち、左方に、旋轉して、敵の、背後に、出て、猛烈射撃を、逞しう、ければ、敵支ふる能はず、退きて、梨子園を、保つ、立見、少將、急撃之を、陥る、故に、九連城より、來援の、新手段、敵兵、二千餘人なる者は、終に、虎山に入るを得ずして、皆、奔て、九連城に、返れり、左翼隊は、此勢に、乘して、進みて、虎山、敵壘の、側背面を、衝く、敵之を、顧みて、動搖す、我正面の、桂中將及、右翼、大迫、枝隊共に、此に、乘し、突撃して、敵壘に、迫る、敵終に、虎山、堡壘を、棄て、潰へて、九連城、方面に、走る、而かも、我軍の、尾撃、究追する所と、爲り、九連城に入るを得ずして、間道に、投し、安東縣、或は、鳳凰城、方面に、逃走せり、此、虎山附近の、戰を終りたるは、午前、十時半頃なりき、既に、して、虎山の、敵壘既に、陥るや、立見、枝隊は、曩きの、敗敵を、究進し、鑿河に、沿ひ、梨子園の上流、廿餘町の、敵營に至り、大砲「グループ」十門、天幕、四百餘張を、捕獲し、乃ち、其地に、露營せり、大迫、枝隊は、九連城附近に、駐りたり、

軍司令部

第三師團長桂中將は、其司令部本部を率ゐて、九連城背後梨子園附近要地に陣し、第五師團本部も亦其附近に陣せり。軍司令部は、此日拂曉より、義州高地統軍臺上に陣し、以て全軍を指揮したりしが、午後一時過に及び、第五師團司令部と共に鴨綠江を渡り、虎山近傍高地に移り、明廿六日九連城を攻陥するの作戰計畫を定め、之を各隊に授命したる後、夜に入りて、軍司令部は、近傍民家に舎營せり。

九連城

九連城は、別に從來建設せられたる堅城あるに非ず。今回築造せる所の假備城堡あるのみ。然れども、其地形の要害を制するに適當なる加ふるに、人工、人力新堡の建築周密堅固なるを以てするが故に、何等大兵を以て之に迫るとも、之を急激にせば、徒らに我兵を損するの不利ならむとを、我第一軍司令部は、深く之を慮はかり、乃ち此日は九連城の攻撃を猶豫して、明廿六日を期し、之を攻撃すべきとに決し、其方略を各隊に指令すると左の如し。

○九連城攻撃方略

- 一 桂中將は第三師團を率ゐて、梨子園の上流、緩河より通天溝に至る街道を進み、城の背後を襲ふべし

- 一 野津中將は第五師團を率ゐて、梨子園より通天溝に至る街道と第三江との中間に出て、敵の左翼を衝くべし

- 一 明廿六日午前三時を以て二面攻撃の期と定む

此の如く指定せられたるを以て、我軍は皆銳を蓄へ氣を養ひ明朝を俟ちたりしが、此夜廿五日夜九連城の敵壘よりは、我陣地に向て、頻りに大砲を亂射したれども、其彈着の怖るゝに足らざるが故に、我軍は敢て之に應せず。其翌廿六日拂曉、第九旅團は先づ進みて敵壘に砲撃したるに、城中寂然として之に應ずる者無し。第十一聯隊は西島中佐の部兵は直ちに城壁に攀ちて其中に入り、周ねく之を偵察するに、全城一空にして、復た隻影をだも見ず。是に於て敵軍が前夜夜半暗黒に乗じ、陰曆九月廿七日城を棄て逃走したる者なるとを知りたるが故に、第五師團は直ちに騎兵第三大隊の全力を舉げて之を追跡せしめたりと雖終に及ぶ無かりき。

午前十時に及びて山縣軍司令官は、進みて九連城に入り、舊税關局を以て軍司令部と爲し、而して各師團旅團司令部も亦相次て城中に入り、旭旗は高く九連城頭に翻へり。是に於て、鴨綠江右岸の要地は、我か全く占據する所と爲りぬ。

加旗九連城頭に翻へる

全城一空敵の隻影を見ず

我軍の死傷

虎山梨子園の戦に於て此日我軍の死傷は左の如し。

○戦死

第三師團歩兵第六聯隊

大尉 青川 崎四郎  
少尉 下士 十忠次  
卒 名

第五師團

中尉 船橋 芳藏  
少尉 矢山 榮太郎  
下士 三名

○負傷者

第三師團歩兵第六聯隊

中尉 口羽 清之助  
少尉 佐藤 彌太郎  
少尉 泉 鶴太郎  
下士 六十五名

第五師團第九旅團第十旅團

下士 卒 三十名

此他に鴨緑江架橋工事の際、嚴寒水中に於て凍死せる者、工兵豫備一等卒三原國太郎一名并に戦中生死未詳なる者一名あり

又敵の死屍は凡そ五百餘名なり其傷者は未だ詳かならずと云ふ。

弾利品は梨子園及び九連城に於るものを合算すれば左の如し

戦利品

一 大砲『ケルツプ』閉鎖器并に彈藥共附添

三十四門

一 小銃彈藥

貳百六十萬發

一 天幕

四百餘張

但し八千人を宿營せしむるに足る

一 米穀

若干

一 麥

數百石

一 馬糧

數千斤

奥山少佐

敵軍の右翼なる安東縣方面に向て派遣せられたる奥山少佐は、部下歩兵三中隊及び山砲一分隊を率ひ、廿五日の早晨義州を發し、其午後四時頃安東縣の對岸麻田浦に達し、其中隊をして戰闘線を警戒せし、他の二中隊は、麻田浦村落に露營せり。此夜右岸の敵兵は、頻に小銃を發射し、頗る喧擾の状況ありしと雖、敢て江を渡り、來襲するにも非ず、夜暗くして彼我互に其形勢を辨識する能はざりし。我兵は江岸に於て、敵毅字軍の糧船一隻を捕獲したるのみ。別に敵と相撃つと無くして其夜を徹せり。

安東縣の  
占領

廿六日未明江岸に我山砲二門を列し、對岸敵營を攻撃したるに、敵は絶へて之に應ずる者無し。故に我歩兵三中隊は午前九時より渡江を始め、無難に安東縣を占領するを得たり。敵兵は前日九連附近の大敗に懲りて、辟易狼狽したるか故に前夜夜半迄に悉く逃れて大東溝及び大孤山方面に走れるなり。

安東縣の  
位置

安東縣は北緯三十九度五十七分東經百廿四度三十五分に位す。此地は舊名を沙河子と稱し、明治九年支那の光緒二年丙子始めて新縣を置かれたる所なり。九連城を距ると五十清里、我日本大約二百五十五丁即ち凡そ七里。

市街は人口凡そ四千人、街の南端は鴨綠江に臨み、江上二三十里乃至十里の地より流に浮ひて下る所の木材輸出の税金を徵收する爲に、税關の設置あり、奉天府の戶部官吏常に此に派駐し以て稅務を管理せり。

宋慶の宿  
處

九連城陥没前十數日、清將宋慶は江岸各地防備を巡視し、安東縣市中の官舎に駐宿するに數日なりしが、我軍此を占領するに及び、宋慶の宿處には猶ほ慶の携へたる地圖若くは兵書等其儘委棄しありしか故に、後に桂中將の手に收得せられたりと云ふ。

鳳凰城の  
位置

安東縣は運漕の便あるを以て、敵の儲へたる儘に委棄せし所の糧穀若干千石并に大砲廿一門小銃若干挺小銃彈藥萬發電信器械等あり、皆我戰利に歸せり。

### 第五

### 鳳凰城の占領

鳳凰城は奉天府より朝鮮に通ずる街道中、東方の一小要鎮たり。北緯四十度廿五分東經百廿四度、九連城を距る十五里、奉天府を距る五十二里、山海關を距る百五十二里。朝鮮使節か従前毎年北京に參朝するとき經由する處にして、奉天省より派出せる高官東邊道台なる者正二品位の官員常に此城に駐在し、東邊道台の職務は此方面一軀の民政租稅訴訟裁判等の事を司とり、且つ戍衛兵若干あり、其地勢は平坦にして防守に適せざる處なりと雖、平時商業頗る繁盛にして、東邊の一小市邑たり。人口は貳萬内外、釀造家燒酎豪富なる者數家あり、其大なる者は毎家に僮僕數十人、馬及び騾五六十頭、大荷車廿輛を蓄用す。其他質店、布帛店、雜貨舖にも亦富家あり、多く山東より來住せる者也。

城の周圍凡そ拾町位、城の南十丁餘に鳳凰山あり、高さ二三百米、突是より先き我第二軍第五師團の騎兵第五大隊は、十月廿六日、九連城陥落と同時に、其方面を二分し、左は大東溝に向て敗兵を追撃し、右は奉天街道に前進して鳳凰城の敵狀を捜察し、廿八日鳳凰山の麓に至る。時に敵の敗將元帥宋慶は一營餘の殘兵を率ゐ尙ほ駐まりて、鳳凰城中孔子廟に在り。

初め宋慶が元帥の命を受けるや、左右に語りて曰く、「此行若し倭を攘ふの功を奏せずんば、一死以て國に報せむのみ」と。意氣頗る勵し、然るに、虎山の戦四十餘の堡壘、忽ちにして日本軍の陥る所と爲り、鴨綠江の險要終に守りを失し、全軍潰散、宋慶孤軍僅かに殿後たり、慶長嘆して曰く、「料らざりき、事の此に至らむとは、老臣何の面目ありてか復た去りて天子に答へんや、我齡八十餘、生何ぞ惜むに足らん、今唯鳳凰城を枕らんとして死せむのみ」と。然れども、此時部下の將校皆慶を諫めて奉天府に退かむとを懇勸す、慶も亦終に共に走りて奉天府に赴く。去るに臨みて、清兵は火を城外處々に放つ、烟燄天を焦かす者一晝夜、城南千餘戸灰燼と爲る、然れども、敵兵此猛火燄々の中に留まり立ちて死守力戰する者廿餘人ありしか、我騎兵は進撃して之を走ら

一死大に國に報せむのみ

餘生何ぞ惜むに足らん

宋慶奉天府に走る

死守力戰するもの廿餘人

袁世凱

し、全く城を占領したるは二十九日なりき。捕虜及び市民の言ふ所によれば、廿五日前袁世凱は此地に在りしが、九連城の敗報を聞くや、城を出て北方に走れり。元帥宋慶は、虎山の敗將馬玉崑等と共に廿六日來りて此城に入りしも、其後二十八日奉天府に走り、其部下の各隊兵は四散せり。黒龍江の騎兵歩兵は長甸城に赴ひきたり、と云ふ。

立見部隊

最初第五師團は、十一月三日を以て鳳凰城攻撃を豫期したるか故に、其先鋒として、第十旅團立見部隊は、前進して三十日湯山城(九連城より十里)に至りし時、鳳凰城陥落の報あり。立見旅團は乃ち急行して鳳凰城に入り、道臺衙門を以て其司令部と爲し、直ちに一面は騎兵をして敗敵を追蹙せしめ、一面は善後の事に着手す。時に十月三十一日也。

敵軍が城中に遺棄せる者にして、我が戦利に歸したる物件は、山砲「グループ」二門、臼砲三門、其他小銃并に天幕夥多なりき。

斯くて鴨綠江上連勝の報、大本營に達せしかば、我 聖上陛下は畏こくも十一月十日を以て鴨勞の勅語を第一軍に賜はりたること左の如し、

勅語

勅語

卿等ノ忠勇ナル百難ヲ排シテ進ミ敵ヲ朝鮮國境外ニ擊退シ遂ニ敵國ニ入り要衝ノ地ヲ占領ス。朕深ク之ヲ嘉賞ス。時方サニ互塞ニ向フ卿等其レ自愛シテ將來ノ成功ヲ期セヨ。

尋て同月廿八日に至り皇后陛下より亦令旨を第一軍に賜はり其戰捷奏功を賞せられ且寒氣に向ひ軍隊將士の艱難御躰察被遊の仁旨を懇篤に御傳達あり。三軍益す感奮せざる莫し。山縣軍司令官は乃ち十一月十一日を以て謹みて前件勅語に奉答せると左の如し。

奉答

第一軍司令官の奉答

鴨綠江畔ノ一戰、遠ク敵兵ヲ滿州ノ野ニ擊退シ、軍ヲ清國ノ境域ニ進ムルヲ得。是レ偏ニ聖德ノ致ス所ノミ。然ルニ陛下優渥ナル寵詞ヲ垂レ、功ヲ我軍ニ頒チ給フ。巨等不肖何ゾ敢テ之ニ當ルヲ得ン。只益々奮勵前途ノ成功ヲ期スルノミ。聖澤ノ及フ所、全軍健全、伏シテ願ハクハ爲ニ。宸襟ヲ勞シ給フヲ勿ラムヲ。願ふに、我皇國古來武威を海外に輝かせると、往古に在りては神后征韓、中古元寇、

規模尙偏

滅近古に在りては文祿征韓ありと云ふと雖、之を要するに、其規模尙ほ偏小にして、皇軍の旭旗高く鴨綠江外に輝やきたることは未だ曾て之れ有らざる所謂「飲馬鴨綠江」の一句は徒らに古來英雄の夢魂を勞せるに過ぎざりしも、今や一舉して鴨綠江水を渡り、遠く滿州の野に入り、其要地を占領するもの、是れ豈皇威國光遠く前古に超越する者に非ずや。

# 日本陸戰史卷五

## 金州半島占領の企畫

### 第一

#### 金州半島占領の企畫

今○の○北○京○は○三○十○年○前○の○北○京○に○非○ず○  
 我○征○清○軍○の○目○的○は○北○京○を○占○領○し○城○下○の○盟○を○爲○さ○し○む○る○に○在○り○と○雖○今○の○北○京○は○三○  
 十○餘○年○前○の○北○京○に○非○ず○三○十○餘○年○前○英○佛○連○合○同○盟○が○北○京○を○侵○略○せ○し○當○時○に○在○り○て○  
 は○旅○順○威○海○衛○共○に○寂○寞○荒○涼○た○る○一○海○濱○の○み○に○し○て○別○に○儼○乎○た○る○守○備○無○か○り○し○也○  
 何○予○况○ん○や○軍○港○あ○ら○ん○や○今○や○然○ら○ず○旅○順○威○海○衛○の○兩○軍○港○は○其○天○險○に○加○ふ○る○に○洪○  
 大○な○る○人○力○人○工○を○以○て○し○清○廷○勞○費○を○吝○ま○ず○非○常○の○防○護○方○法○を○施○し○堅○固○無○双○な○る○  
 堡○寨○を○連○築○し○之○に○備○ふ○る○に○最○新○式○製○の○重○大○な○る○利○砲○數○十○百○門○を○以○て○し○之○に○策○應○  
 す○る○に○大○艦○堅○艦○十○數○隻○を○以○て○す○故○に○旅○順○口○と○威○海○衛○と○は○海○を○夾○み○て○南○北○相○對○し○  
 正○に○是○れ○北○京○に○入○る○へ○き○直○隸○灣○渤海○の○門○戸○た○り○關○柵○た○り○此○關○柵○此○門○戸○に○し○て○儼○

旅順口と威海衛と

天險に加ふるに洪大なる人力を以てす

今北京は三十年前北京に非ず



強力の海軍と形勝

存する以上は敵國艦隊は其門内に敢て横行する能はず焉んや之を冒かして深く山海關に太沽に侵入するを得んや。然るに此旅順口と云ひ威海衛と云ふもの其真正に渤海の門戸たり關鍵たる所以の者は之が強力なる海軍の以て互に相策應するあるに由るのみ若し夫れ然らずして海軍の以て軍港要塞と互に相策應する者無くんば此兩堡塞なる者其背面上り之を攻むるときは以て陥るべきの途無きに非ず是れ我大本營が夙に之を籌畫せる所なりし也。

北洋艦隊の大部分を失つ

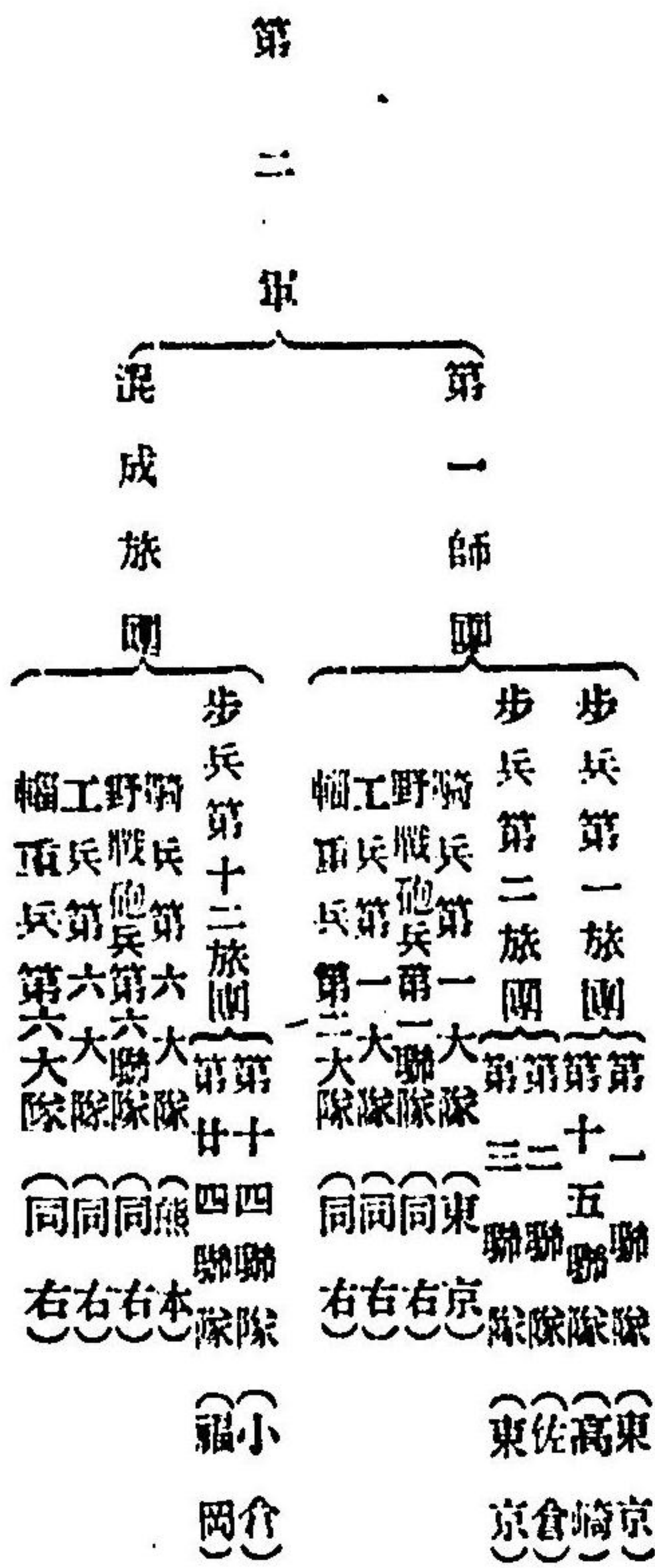
彼黃海海洋島外大海戰九月十七日勝利の結果として我日本海軍は黃海海上主權の大半を占領し之に反して支那海軍は其從來著名なる鎮遠定遠二隻は著大なる損傷を被ひ其戰鬥力を回復する迄には若干日數を要すると疑ひ無く其他致遠來遠經遠超勇揚威廣甲等有力なる諸艦或は轟沈せられ或は破壊せられ要するに北洋艦隊の戰鬥力は今や其大部分を亡失滅殺せること明白にして疑を容れざる也。

是に於て我海軍は千代田八重山磐城島海等を派し密に金州半島東岸に於る我陸

上陸地點の偵察

兵上陸地點を精究偵察せしむると十數日を累ね日夜苦心百方盡力して始めて従前歐洲人も亦未だ曾て知らず支那艦隊も亦未だ曾て知らざる所の良好なる上陸地點を發見せり。

我第二軍は第一師團は九月下旬を以て夙日に廣島に集合し渡海の時を待望すると一日千秋の思に堪へざりしが今や金州上陸地點の畧は決定したるか故に我大本營は第二軍進發の期日を命令せり第二軍の編成并に其重要なる將官は左の如し。



第一師團

是より先き第一師團は八月下旬より夙日に既に充員出師の準備に従事し五日を

陪食の便

出てすして、其準備既に整ひ、九月廿二日より廿五日迄四日間晝夜間斷無く、東京青山練兵場内臨時軍用鐵道此役出兵軍用の爲に特に之を敷設し以て品川線鐵道に連絡せしめたるもの也。汽車に駕して之を廣島に進發せしめたり。  
第六師團の混成旅團は長谷川少將之を率ゐ、門司より運送船に乗込み、先づ發して仁川港に達せり。第一師團は廣島に駐まると二週餘にして十月十五日出發の命あり。發するに先だつ數日、大元帥陛下は第二軍司令官大山大將を召し、寶刀及び駿馬を賜はり、同十四日は大山司令官、山地第一師團長、乃木、西、兩旅團長、井上參謀長以下出征將校數十名を大本營に召され、陪食の榮を賜はりたり。

第一師團各隊并に附屬軍夫等の乗船を大別して甲、乙、丙、三回に分ち、乃ち

- (甲)は 十月十五日十六日
- (乙)は 同 十七日十八日
- (丙)は 同 十九日二十日

を以て各豫定の運送船に乗込み、順次拔錨して宇品軍港を出發せり。此の如き大數(三十餘隻)運送漁船の集合すべき到達點は皆朝鮮大同江口なる漁隱洞に在り、漁隱

漁隱洞

洞は馬鬮を距ると海上五百餘哩、若し敵の艦隊が儼然として之を中途に窺伺し而かも不意に來襲するの實力を有する者ならしめむには、此航行は頗る危険を免かれざるべしと雖、今や然らず、支那海軍なる者、其南洋艦隊、廣東水師等は共に北方海上に來るべき實力を缺乏すると疑を容れず、而かも其北洋艦隊すらも痛く亦前月十七日の敗衄に懲り、深く旅順威海衛の奥に潛匿して、敢て黃海上に出て來らざると明かなるか故に、我運送船は別に護衛船の直接掩護を仰く無くとも安全無難に大同江口の目的地に達するとを得たり。

十月十七日は玄海灘上風浪頗る激し、我運送汽船は頗る其行進に艱み、不得止各船の序列を解きて、随意進航を許せしかば、航程自ら其遲速を齊うせず、横濱丸は、獨り他船に先たち、十九日午後四時廿分を以て大同江口に到達し、其他の諸船も亦此夕に及びて陸續として到着し、其集合の目的を完うせり。

當時海上敵艦我運送船の中途に突入來襲すべきの虞無きとは、明かなりしと雖、我聯合艦隊司令官伊東中將は豫め十分の慎重注意を加へ、大同江口より黃海并に全羅方面に到る海上に於て、終始我報知艦及び巡洋艦を發し、之を游弋し以て我第

海軍當局者第二軍司令部との意見

二軍の運送船を間接に護衛せしめたりき。初め金州東岸上陸地點の撰定に關し、海軍當局者と第二軍司令部とは自から、其所見を殊どにし、陸軍將官は上陸後、咄嗟に金州城大連灣の背面を攻撃するか爲に、其上陸地の金州城に近らむとを欲せり。是れ敵軍をして、我上陸後防備を嚴にするの暇ま無らしめむか爲也。然れども上陸の事たる極めて難事たり。況んや風波激怒の際に當りては咫尺陸岸も之に上るを得ず。金州附近は海岸遠淺五裡以上なるか故に大軍の上陸には極めて不便且つ危険なりとす。故に海軍當局者は金州を距る少しく遠きに過るとも、寧ろ我大軍の上陸に適すると確實なる地點を選定するに如かず、と思認せり。而して、大本營の議は忽ち一決し、花園河口に上陸するとと確定せられたり。

花園口

此花園河口上陸に就き當時推定せられたる形勢方略を略記すれば、左の如し、

- 一 花園河口は、盛京省金州の南岸に在り、
- 一 花園河口は、金州廳を距ると日本里程廿一里〇旅順口を距ると日本里程三十五里

一 花園河口は、遠淺にして、沿岸凡そ一里半程を徒涉せざるべからず、水深脈を没する處あるへし、

一 花園河口は、寂寞たる無住の地なり、

一 花園河口の西十餘里に貔子窩港あり。港は北緯三十九度十八分東經百十二度十八分、終歲不凍氷の故を以て頗る出入に便なり。人家凡そ八百戸倉庫若干あり、初め我陸軍は上陸地點を此港に於てせむと欲したれども、此港は沿岸三里の干潟ありて極めて上陸に困難なるへきと我海軍に於て偵知し得たるか故に、之を捨てて、花園河口を取れり。

- 一 花園河口より金州を経て、旅順口に至るの道路は、平坦に非ず、凹凸狹隘あるへしと雖軍馬通行に妨げ無し
- 一 金州には、兵營あり、敵兵屯在する者凡そ一萬二三千人なりと云ふ。故に一會戦は、必ず此地に於て開かるるならむ、
- 一 旅順には、要塞砲兵三千五百以上在衛する見込なり、
- 一 花園河口に於る我軍の上陸は、敵前上陸の方略を取るべし、

右の方略は我軍よりも劣等なる敵國に對する場合に限りて之を行ひ得らるべき危険なる方法の一に屬す。廿餘年前我國戊辰前後に在りて、歐洲船艦が、日本海岸に跳梁したるものは皆此方略を應用したる也。

### 第二

### 我軍の金州半島上陸

上陸の準備日に際す

上陸の準備既に整ひ、先發軍艦八重山千代田、鳥海、筑紫、磐城の五艦は、十月廿二日午後四時鐘を抜き、漁隱洞を發し、目的地花園河口に向ひ、汽笛の聲をも揚げずして、肅然大速力を以て前進し、翌廿三日夕、既に上陸地海岸に近づき、各艦の周圍ニ『ゲープル』の間は四尋以上の水深ある錨地を選て陣形を造りたり。  
廿二日の夕、金剛は、我運送船隊の哨艦と爲り、夜七時根據地(漁隱洞)を發し、大同江下流四漚の處に碇泊し終宵警戒を嚴にせしが、忽ち暗夜に乗して黒烟を吐きつゝ、遙かに來る一艦あり、乃ち遙かに信號を沖間に碇泊せる高雄に發し、『外國軍艦見ゆ』と報ず、高雄は直ちに之を旗艦に傳ふ。既にして、其一艦は金剛に信號し、避島の西方に

外國軍艦見ゆ

碇泊するを審かに視れば則ち露國の一艦也。然れども、敵艦は終に見ゆるべき。是に於て、我第二軍第一師團を載せたる運送汽船十餘隻は、廿三日午前九時半を以て、大同江口漁隱洞の集合地を發して、黄海を横絶し花園河口に向へり。我艦隊千代田、吉野、高千穂、嚴島、扶桑、其他十餘隻の軍艦は、之が前頭并に左右を掩護し、各船各五十間以上を隔て、舳艫相應し、序列整然、黒烟天を掩て海上數里の間に連亘せり。運送汽船の第一列には

名古屋丸	(二千八百卅五噸)	豊島丸	(千百十噸)
和泉丸	(三千二百噸)	三汕丸	(三千三百十二噸)
釜山丸	( )	海洋丸	( )
宇品丸	( )		
先づ進み、横濱丸三千三百〇五噸は、其中央に立ち師團司令部を載せ、第二列には、			
舞津丸	( )	南越丸	( )
松島丸	( )	福岡丸	( )
廣島丸	(三千二百七十五噸)	新發田丸	( )

之に次ぐ、其軍容の堂々正々たるは、蓋し三百年前豊公征韓の大軍渡海の狀と雖、遠く及ばざる所なるべし。

軍容正々堂々

軍艦陸兵の上陸を警戒す

既にして船隊は進みて海洋島を過ぎ夜に入りて各船室には皆其點燈を禁じ、滿船暗黒唯舷燈あるのみ幸に海上平穩にして船行くに意の如く、翌廿四日午前六時廿五分を以て目的地花園河口に達すれば、是より前日既に此河口に着せる所の我軍艦十餘隻は、各恰好の錨地に泊し、部署整々として、各其戦闘準備を整ひつつ我陸軍の上陸を警衛せり。此際我第一師團上陸の順序は左の如し。

千代田艦の海軍少尉淺野氏及び藤村氏は海軍陸戰隊一小隊を率ゐて廿四日未明に先づ端艇に駕し、花園河口の北隣なる一小部落の海岸に上陸し、各處を搜索したりと雖も敵兵一人も在るもの無し。同六時部落の一端丘陵上に我旭章の國旗を樹てたりければ、我陸軍の海上に在るもの之を望み見て大に喜び第一聯隊第一中隊は直ちに解艇を馳せて上陸し、海兵に代りて其國旗を守護し、且つ四隣に哨兵線を張りて嚴に警戒を加へたり。之を第一師團先登の第一とす。

第二上陸は第十五聯隊にして、第三團は第二聯隊中二個中隊を除くの外の一部隊之れに當れり、而して野戰病院及び衛生隊の一部并に工兵一中隊も亦此

日を以て上陸せり。

師團司令部と軍司令部の一部とは先登第一の陸兵と相前後して、横濱丸より解艇に乗り、上陸點に向ひしが其陸岸に達したるは殆んど第一聯隊第一中隊と同時なり。

三島海面端艇を以て蔽はる

此花園河口の海底は遠淺にして泥床なるか故に、干潮の時は、一里以上を徒涉せざるは、陸兵人馬を上陸せしむるを得ず。然るに、此日は滿潮に際せしが故に、二里間の海上なる軍艦并に各運送船錨泊地より海岸に至る迄は、海水漫々として深碧を浮べ、上陸用解艇を挽かしむるが爲に豫め我が軍艦か用意し來れる小汽船は幾十隻あり、各石炭の烟を揚げて各運送船の梯下に密繫し、此小汽船は各端艇三四隻つを率挽して之を岸邊に送る。毎端艇には大凡四十乃至五十人を載せたるもの、幾百隻にして、三里間海面は殆んど端舟を以て之を蔽はれたるか如き有様なり。

既に上陸せる我第一師團は、此夜前衛を北西數里の地に發し、其他は花園河口に露營せり。第二軍司令部及第一師團部は、花園河口の一民家に舍營したりしが、此家主人は、午前夙に其重寶財物を抱き遠く亂を避けて遁逃し、其跡に殘留せる者は店番

雞豚到處  
放飼す

三人と下僕四五人とあるのみ。其他此邊の民家は僅かに四十戸許りなるも、家人は皆逃走して其迹を留むる者無し。然れども、各戸に蓄ふる所の大豆及び高粱は山の如く、又雞豚は到る處畑地、原野に放飼群養せるもの有るか故に、我糧餉部隊は、近村に人を馳せ代價を拂渡して、雞豚を徵發し、全軍共に之に飽くとを得たり。

農産の富  
公侯に讓  
らす

此地方は丘陵起伏し、渺々空濶なる高原連綿として、滿目の畑地には、蜀黍の刈取枯株を殘せるのみ。たゞ幼稚未開の新地域なるが故に、居民は極めて稀疎なり。雖山東省地方より來住せる、漢族富豪の徒にして、一戸所有の開拓畑地數千町乃至數百歩の廣きを有し、其農産の富は殆んど無爵の公侯に擬すべきもの少からず。故に我軍第一師團の始めて此に上陸せしとき、其糧餉副食物、雞豚の徵發に於て、頗る其裕かなるを獲たるは、偶然に非ずとす。然るに、其土民に至りては、概して無教不文、目に一丁字無き、偷父のみ。我第二軍安撫の檄文、告示(漢文)を掲ぐるも、誰れありて之を解得するもの無し。大日本の何物たる、日清韓の交渉何事たるを解する者極めて稀れなりき。

無教不文  
の土民

我軍は、上陸に先ち、通譯官數名をして最初上陸して、村落各戸に就き温言を以て我

韓子窩

か出師上陸の理由大要を諭示し、我軍紀の嚴明仁慈にして、秋毫も犯かさざるとを明示せしめたり。雖、彼等居民は、從來支那軍兵の暴横侵掠に懲り居るか故に、日本軍隊も亦之に均しき者ならむと豫想し、表面に於ては、我通譯官の言に従ふか如きも、通譯官の其家を出て去るや、直ちに負擔して後門より逃れ出て、遠く内部山野の奥に向て奔竄するもの、比々として相繼げり。

廿五日前衛は、花園河口を距ると北方數里李家屯附近より承利河邊に進み、司令部以下は、蕭家堡子附近に宿し。廿六日廿七日司令部は依然駐屯し、前營は、魏子窩に向て發す。

廿九日、我第一師團魏子窩に入る。此地は金州廳の所管水陸交通の便を占むるが故に、騎兵營あり、捷勝營と云ふ。土民の言によれば、從來一營兵五百人此に駐屯せしと云ふも、廿七日我第一師團前哨騎兵の此地に進入せし前に、敵兵は其營を棄て、金州方面に向て逃走し、營中に遺せる所の軍旗、小銃、劍槍、彈藥、其他の武器狼藉たるあるのみ。一人も抗敵するものあらざりき。

初め第二軍の將に宇品を發せむとするに臨み、大山司令官は豫め全軍に向て、軍紀

軍紀の嚴  
戒民の嚴

を嚴肅戒諭し、以て敵國良民の綏撫に注意せしめたり。其戒諭大要左の如し。

我軍ハ仁義ヲ以テ動キ、文明ニ依リテ戰フ者也。故ニ我軍ノ敵トスル所ハ、唯敵國ノ軍隊ニシテ其一個人ニ非ズ。然レハ敵軍ニ當リテハ勇猛ナルベシト雖降人俘虜傷者ノ如キ我ニ抗敵セサルモノニ對シテハ之ヲ愛撫スベキト曩キニ陸軍大臣ヨリ訓示セラレタルカ如シ。況シテ敵國一般人民ニ對シテハ、最モ此意ヲ躰シ、我妨害ヲ爲ササル限リハ之ヲ遇スルニ仁愛ノ心ヲ以テスベシ。秋毫ノ微ト雖決シテ掠奪スルコトアルベカラズ。若シ其服食器具ノ類ニ於テ緊急要用ノ場合ニ當リテハ相當代價ヲ以テ之ヲ購買スベシ。到ル處勉メテ人民ヲ綏撫シ之ヲ安堵セシメ、以テ我恩德ニ懷カシムベシ。思フニ我輩軍人ハ平素是等ノ教訓ヲ會得セルコトナレハ、固トヨリ不法非義ノ舉動無カルベシト雖人夫等ニ至リテハ、豫メ教養ヲ經タル者ニ非ルカ故ニ、特別ニ能ク之ニ注意シテ能ク規律ニ服從セシムルヲ要ス。若シ違ヒ犯スモノアラハ嚴科ニ處シ、決シテ之ヲ容捨スル勿レ。

明治廿七年十月十五日

第二軍司令官

士民荷擔  
して去る

既にして、第二軍の花園河口に上陸するや、一つも抵抗を受くる無く、魏子窟に達するを得たりと雖、到る處の居民は皆荷擔して遠く奔竄せるか故に、大山司令官は、此等の士民を安撫せむか爲に篤く軍隊に戒示を重ねたり。其戒示に曰く

陸軍大將伯爵 大山 巖

敵國に於て軍隊必需の物件を徵發するは、列國公認の權利なりと雖も此權利は軍隊に屬するものにして一個人の私すべき所に非ず。軍隊の徵發は自ら規定の在るあり、且つ、軍隊の威嚴を損ふものは、其不法掠奪より甚だしきは莫し。故に規定に由るの外は何人たりとも妄りに敵地住民の物件を押収するとを嚴禁す。若し夫軍隊必需以外に於て一個人單獨に物件を要求する所あらば、其所有者又は保管人と協議を以て之を買取すべし。決して強迫を行ふべからず。犯かす者は必ず罰あり。

右軍人軍屬は勿論、各從軍者軍夫に至る迄嚴に遵守すべし。

魏子窟附近に於て

明治廿七年十月廿八日

第二軍司令官伯爵 大山 巖

剽掠を嚴禁す

其翌廿九日、更に我軍の剽掠を未然に嚴禁し、徵發心得書十ヶ條を全軍に發布したり、其條項左の如し。

敵地ニ於テ物件徵發ヲ要スルトキハ左ノ方法ニ則トリ實施スベシ

明治廿七年十月廿九日

第二軍司令官伯爵 大山 巖

第一條 凡リ徵發ハ野外要務令ノ規定ニ依リ之ヲ行フノ外ハ、軍人軍屬各自單獨ノ用ニ供スル爲ニ取テ之ヲ行フベキ者ニ非ズ。但シ自由賣買ニ依リ物件ヲ收得スルハ妨ケ無シト雖決シテ脅迫ヲ行フコトヲ得ズ

第二條 徵發ヲ行フハ、軍隊生活上、必要ノ物品、宿舍勞役及ヒ運輸通信ノ要具ニ限ルベシ。特別ノ必要ニ依リ、前項外ノ物件ヲ徵發セシトキハ其理由ヲ具シ軍司令官ニ具申スベシ、

第三條 現金ヲ徵發スルハ、徵發ヲ行ハムトスル場合ニ於テ所用ノ物件缺乏スル爲、之ヲ他方ニ於テ購買スル場合又ハ特別ノ事情ニ依リ、直ニ代價ヲ支拂フニ非レハ速カニ物品徵發ヲ執行スルノ道無シト認ムル場合ニ限ル、

凡テ現金ヲ徵發スルハ、軍司令官ノ許可ヲ經ルヲ要ス、

第四條 敵地占領民政ノ費用ニ充ル爲ニ、租稅ヲ課シ并ニ敵地住民ノ違令ヲ罰スル爲ニ、罰金ヲ課スルハ、此法則ニ依ルノ限ニ在ラズ、

第五條 敵地住民ニ課スルニ、運搬、築城、嚮導及ヒ其他ノ勞役ヲ以テスルハ妨ケ無シト雖、服勞ニ直接干預アル作業ニ使役スベカラズ、

第六條 發ニ對シテハ、相當代價貨銀ヲ拂フベシ、但シ其金額ハ、我カ相當ト認ムル所ニ從ヒ、之ヲ定メ、取テ應徵者ノ同意ヲ得ルヲ要セズ、

土地ノ通貨缺乏スルトキハ、一兩ヲ日本銀貨一圓四十錢ニ換フルノ割合ニ依リ、之ヲ拂フベシ

第七條 直チニ代銀ヲ拂フ能ハサル場合ニハ、必ス正式徵發法證票ヲ與フベシ、

徵發證票ニハ、徵發命令官ノ官職氏名ヲ詳記シテ、之ニ押印シ、徵發物件ノ品目數量、通貨ニ視價リタル代價及ヒ徵發ノ年月日ヲ記入シ番號ヲ附スベシ、

第八條 前條證票ノ謄本ヲ調製シ、後ニ之ヲ一括シテ之ヲ軍司令官部ニ提出スベシ、

第九條 徵發義務ヲ割付クルニハ、可成住民ノ貧富ノ度ニ比例スベク、此目的ニ應スル爲ニ其地方ニ於テ收稅事務ニ從事シタル敵國官吏ヲ使役スルヲ善トス、

第十條 軍隊必要ノ爲ニ徵發ヲ行ハムトスルモ、其住民逃走シ代價若クハ徵發證票ノ受取人アラサル場合ニ於テハ、假リニ其物件ヲ收用シ、後ニ其地ノ官吏ヲ經テ代金或ハ證票ヲ請求スルモノアル時ハ、眞偽ヲ調査シタル上、相當代金若クハ證票ヲ交付スル旨ヲ適宜ノ場合ニ揭示スベシ

以上

此の如く、一面に向ては我軍隊軍屬一同を戒むると同時に他の一面には、敵國人民を撫綏する爲に告諭漢文を榜示せしむ其文左の如し。



欽命大日本帝國陸軍大帥伯爵大 爲剴切曉諭事。照得本大帥奉欽  
大皇帝簡派督馬步槍砲大軍前來。問

清國擅渝盟破隣交之罪。事固屬邦交。與爾等民衆無涉。是以不抗我軍者。加意庇護。  
各宜稟遵安堵。免恐懼遁逃。合行出示。諸邑民衆等。知悉本大帥一視同仁。無敢害不  
辜。倘兵勇從軍者。拋棄兵器來營自投。亦不誅戮。之以昭天意好生之道。爾等切勿迷  
而不悟。甘陷法網。本大帥規律嚴明。言出法隨。勿謂言之不早也。稟之慎之。毋違特示。  
右諭通悉

明治廿七年九月 日

右の榜示及び左の告諭條目五條を以て司令部舎營の前面なる民家の壁に貼付し  
て、之を一般土民に示知せしめたり。

大日本帝國軍本營示

- 一 帝國軍意存問罪、而事關隣交、非以掠殺起見。凡民人不抗拒我軍者、在交戰之地不  
用恐懼一遁逃、其各守分安業。
- 一 我軍嚴禁掠奪、秋毫無侵。若我兵違者、隨者稟究是爲至要。

一 諸邑民人申同敵軍、若損壞橋梁、電信線、障塞道路、溝渠、燒燬軍需兵房、一經查出、或  
被告發、從嚴究辦、決不寬貸。爾等其各稟遵、勿致貽悔。

一 凡醫院所在、掛紅色十字旗章爲標、敵兵或負傷、或罹病、不能出戰者、投院請治、各任  
其便。

一 兵勇從軍者、拋棄兵械赴營投誠、決不加誅戮、以彰慎重而副衆心。

右諭知悉

明治二十七年九月 日

是より先きに我大本營は、夙に深慮する所あり。清國內地に向て、我軍を進入せしむ  
ると同時に、敵地占領其民人を綏撫する方法を講究せるが故に、大山第二軍司令  
官の出發前より、豫め支那語通譯官十餘名を召募して各隊に屬從せしめ、又萬國國  
際法に明なる學士數人を選て之を軍司令部幕僚附屬員として隨從せしめたり。然  
るに、今や金州上陸以來到る處敵國の良民は皆風を聞て逃竄し、敵狀を探るに其便  
利を缺くか故に、通譯官中機敏なる者を選て、我第二軍前衛に先たち、深く敵地に進  
入し、其事情を探究せしめたり。此撰に當れる者は通譯官、向野堅一、山崎羔三郎、藤崎

支那通譯官

修、鐘崎三郎の四氏にして、皆從來鬪髮殊に支那語を能くする者而かも支那服帽を  
装ひ、一見純然支那人の如し。

藤少佐

我軍事探偵として金州城に向て先發せる通譯官四名中其三名(山崎、藤崎、藤崎)は、踪  
跡音信を獲ざるも、向野氏は、敵情を探知して返り、金州守備の虛實を偵ふを獲たり。  
是に於て、進撃の部署を定められ、先登大哨隊司令官齋藤少佐は第十五聯隊第一大  
隊工兵第一大隊騎兵第一中隊を率ゐ、十一月二日拂曉を以て、魏子窩を發す。此日、乃  
木旅團は紅水城(魏子窩)を距る廿丁餘に在り、大山司令官は、花園村を發し、山地師團  
長は、翌三日曉魏子窩を發す。第一師團と第二軍との兩司令部は金州に至りて會合  
し、六日を以て、金州城攻撃を決行すべき豫定なり。花園河口より金州に至る沿道の  
村落地名及び里程左の如し

- 一 花園河口より (日本里) 二里半
- 一 後蕭家堡子 一里餘
- 一 坎子底下 三里
- 一 東登 三里

- 一 藍家店 三里
- 一 大高家屯 二里
- 一 魏子窩 十四里半餘

- 一 小計花園河口より魏子窩迄 廿丁半
- 一 魏子窩より紅水城まで 四里十二丁
- 一 紅水城より窪子店まで 七里十丁
- 一 窪子店より黃家屯まで 六里廿丁半
- 一 黃家屯より關家店まで 二里廿丁半
- 一 關家店より金州まで 廿一里餘
- 一 小計魏子窩より金州迄

(按するに魏子窩と金州との間里程を記せるもの區々にして相合はざ  
る處多し。甲)は廿一里餘と云ひ、乙)は之を拾七里強と云ふ。未だ孰れか當  
れるを知らず。尙ほ後考を俟つ。

第三

金州攻撃

山地中將

山秋少佐

砲の股々たるを聞

十月三日午前六時山路中將は本隊として貔子窩を發し西旅團之か後軍たり乃木旅團は歩兵第一聯隊騎兵一小隊山砲一中隊衛生隊半部を率ひて之か前衛たり騎兵第一大隊長秋山少佐(好古)は騎兵一中隊歩兵一中隊を携へ復州街道五十里堡に向ひ以て普蘭店方面の敵に備くて我か本隊の右側を掩護し此夕第一師團王家店に舍營す(行程五里)四日王家店を發し黃家店に次す(亦五里)五日午前七時師團は黃家店を發し行くに里餘にして始めて砲聲の股々たるを聞く衆勇氣忽ち加はり進みて石拉子附近太子山麓に至れば砲聲彌よ近し十一時山地中將大寺參謀長等將校參謀皆太子山の嶺に上れば敵壘は大和尚山麓北方に於金州街道を夾みて左右の高地に各要害を占め頗る堅固に之を築きたるもの二箇處あり連りに我前衛に向て發砲す太子山嶺より敵壘迄約六千米突凡我五十五丁此時我前衛乃木隊は本隊を距る千五百米突(凡我十三丁)敵壘の東方に在り敵は

師團本隊

頻りに「クルツ」野砲を發射したれども照準の拙なるか爲に我前衛に達する者無し師團は専ら敵軍の情形を搜索するに金州街道の防禦嚴なりと雖其北方復州街道は空虚なるか如し故に師團は敵の背面に出るの策を定め乃ち團隊を分ちて本枝兩隊とし第十五聯隊長河野大佐(通好)を以て其枝隊長と爲し是迄前衛に屬せし諸兵騎砲工を以て河野枝隊に屬せしめ之をして金州城の東面即ち本道の敵を牽制せしむ而かも其本隊は中將自から之を率ひ途を轉して右に入り險路を迂回する數里にして復州街道(即ち金州城の北方)に出て三十里堡を経て韓家子或は乾家屯に作る後考を要すに露營せり此日師團本隊は石拉子附近太子山東より右に轉し迂回したるか爲に行軍里程は朝來通計十餘里に及び道路險惡人馬共に頗る艱み其韓家子に達し露營したるは日没後殆んど二時間後なりき其行軍の艱苦推して想ふべし

初め我第一師團の大哨隊司令官齋藤少佐(德明)は二日先發行く行く一面は敵情を偵察し一面は其工兵を督して道路を修理せしめつつ進みて劉家店に至る(四日)遙かに敵の騎兵黄色軍旗を提くるもの五十騎許り及歩兵二百人許り來り邀ふ我兵

哨兵

之を銃撃せしに、彼亦應戦すると暫時にして、敵は其馬糧及「モーゼル」銃弾を委棄して遁逃せり。蓋し敵の哨兵なり。此日齋藤少佐は騎兵一部隊を復州道路に分遣し、敵の電信線を切斷せしむ。途偶々敵騎一名に逢ひ、乃ち之を捕へ返りて之を訊問するに、旅順敵將より復州敵將に贈る書翰を携帶せり。記して曰く「倭兵一千許來襲す。縛して陣中に置く、彼れ我衛兵の隙を伺ひ、頭を以て石角に觸れ以て自殺せむと謀る齋藤少佐之を見て、其意氣を憐み、懇諭して、其殺を止め、且つ之に諭して曰く「我は大日本帝國の軍也。豈濫りに敵の俘虜を殺すものならんや。戦罷むの後は速かに罪を免し之を放還せむのみ。汝年少、想ふに、父母尙ほ在るべし。宜しく謹慎命を俟ち、以て他日無事、汝の家に返るとを思ふべし。汝の父母豈に汝の生還を願はざるあらんや。」と彼れ之を聞きて、忽ち潜然として曰く「小人唯一母あり、日夜小人の歸るを待たざる莫し。」と、大に少佐の慈仁に感し、其實狀を白す。少佐爲に獲る所あり。山路中將が、太子山嶺より忽ち其途を一轉し、十餘里を迂回して韓家子に出でたる所以は他無し。金州の敵軍が、徒に其東面東方本街道の守備のみを嚴にし、而かも、其北方復州街道の防禦を忽かせにするの情勢を看破したるが故也。

倭兵一千來襲

俘虜慈仁に感ず

金州背面に出づ

故に中將は、右方に迂回し、險惡なる山陵を越ると十餘里にして、復州街道即ち金州背面に出で、以て敵の虛を衝くの策を取りたる者にして、是れより金州を攻撃すべき一般方略は左の如し

○左翼隊

司令官 河野 大佐 (通好)

一 第十五聯隊及ひ其先發第一大隊齋藤少佐の隊を率ゐる金州魏子窟の本街道(即東方)より敵の前面に迫り之を牽制すべし

○師團の左側隊

司令官 乃木 少將

山路師團本隊の左側衛を兼ねて、直進し、敵壘の正面に向ふ

○師團本隊即ち右翼隊

中將自から西少將と共に、第二聯隊第三聯隊を率ゐる復州街道より敵の背面即ち北面を衝く

初め十一月五日午前八時、齋藤少佐は、其部下騎兵一中隊を率ゐる劉家店を過ぎ大和尚山麓の敵壘を距ると三百米突許の處に近づき、之を偵察せしに、敵は壘中より大砲小銃を亂發するも、我れは偵察の目的を達して、退却したるに、敵は之れを見て我

大和尚山麓の敵壘

敵險壘に  
據りて用  
せず

が敗走するとや思料しけむ、益す猛烈に砲撃せり。時に乃木部隊は金州街道なる太子山を降り進みて劉家店に至る。前面砲聲の急なるを聞き、十一時午餐を全隊に傳へたり、其終るを待ちて進撃し、第一聯隊第一第二兩大隊は、敵の騎兵五十騎許りを夾み撃ちて忽ち之を走らし、敵壘に近前せしかば敵は兩壘より銃砲を亂射すると雨の如く、第一聯隊の第七中隊兵卒二名負傷し、其第二大隊の副官大野中尉(尙義)も亦負傷せり。我軍之と抗戦すると三時間餘、午後二時休息し、午後四時重ねて開戦し互に猛烈射撃すると一時間、然れども敵は險壘に據り、俯瞰して我を射撃し、我陣地は甚だ不利なるを以て、乃木少將は令して其兵を收め、金州街道と復州街道との中間に入りて茲に露營す。時に午後八時也。此夜敵壘より我か露營地に向て發砲すると終夜斷へず。砲彈飛下すると屢はなりしも、乃木少將は自若として動かざりき。

按するに、此日、齋藤少佐は大哨隊たるを以て、金州城東面なる本街道劉家店を過ぎ、大和尚山の麓なる敵壘に近づきたるは、其任務の當然なるべし。然れども、其日午後乃木部隊が、此敵壘を攻撃したるは、一時止むを得ざる偶然の小關なるべし。左翼枝隊長河野大佐の任務は専ら金州城の敵軍を其東方に牽制するに在りと雖

河野大佐

敵壘咫尺に迫るか故に之を攻陥するの機あらむと必せり。故を以て河野大佐は、石拉子附近に於て五日午後山地師團長と別るゝに臨み、中將に向て曰く、『前面(大和尚山北麓)の敵壘、抜くべくんば之を抜かむと。』中將莞爾として之を頷つけり。是に於て、河野大佐は十一月五日午後劉家店に陣地を占めて露營するや、直ちに該枝隊各部の方略を定め之を全隊に命令すると左の如し

- (一) 諸兵連合の敵軍は貔子窩より金州城に通ずる本街道を挟みたる(一帶高地大和尚山の北麓)に於て今夕迄守備を爲せり。
- (二) 我枝隊は明朝六時より此敵を攻撃せむとす。
- (三) 歩兵第一大隊(少佐齋藤徳明の率ゆる所)は右翼第一線とす、明朝前進し午前六時を期し敵の左側に向ふべし。
- (四) 歩兵第二大隊(大隊長齋藤太郎)は左翼第一線と爲り、明朝前進し六時を期し敵の右側に向ふべし。
- (五) 砲兵中隊は第一線大隊の後尾より行進すべし。
- (六) 工兵中隊は砲兵中隊に續進すべし。

(七)騎兵中隊は左右翼と同時に當地を發し我枝隊の右翼を警戒すべし。  
(八)本官は右翼第一線と共に行進す。

明治廿七年十一月五日劉家店に於て河野大佐

十一月六日午前四時我左翼枝隊の各隊悉しく發し砲兵中隊は先づ敵壘を距る三  
千米突の高地を占めて砲列を布き歩兵第一大隊は肅々聲を潜めて金州街道を進  
み道の北方なる敵壘の側面に近接するや時方に五時半頃なり砲兵は敵の第一壘  
(即ち街道の北方)に向て砲撃を始め轟々たる雷響は山谷に震動す我歩兵は之に乗  
し山を越へ谷を涉り敵壘を攻撃せしに敵壘旗色漸く動く然れども其二百人位は  
壁に據り力戦し敢て退かず既にして敵壘の砲聲漸く衰へ錯愕の狀あり我第一中  
隊は突貫を以て之に迫る敵兵支へずして逃走し終に第一壘を奪ふ第一壘と第二  
壘街道の南方との間峻阪あり攀るに難し我兵屈せず第一中隊附粟屋中尉衆に先  
だち兵を墜き進撃して第二壘に突入す他の一中隊第二中隊亦側面より之を挾撃  
せしかば敵終に支ふる能はず先を争て潰走す時に午前六時四十分敵の委棄した  
る者第一壘には『クルツフ』野砲三門山砲一門其他彈藥山の如くあり第二壘にも亦

敵壘旗色  
漸く動く

齋藤少佐

『クルツフ』野砲一門山砲三門彈藥夥多あり。  
我第一大隊は敵の逃くるを追撃して餘力を遺さず大和尚山の麓を繞り金州城外  
東に進撃せり。

殿井少佐

第二大隊齋藤少佐太郎之を指揮し午前五時頃和尚山の北麓を繞り第一大隊の左  
側に出て前進するや敵の歩兵二百人許り早くも我第一大隊の砲撃に辟易し其陣  
地を棄て、金州街道に走るものあるを見る我兵乃ち之を追撃しつゝ前進せしに  
敵の騎兵六十餘騎殿後に留まり敗兵を收容するを認め我第五中隊兵一齊射撃を  
以て之を走らす此時本街道左右の兩壘共に陥る故に第二大隊は進みて金州城東  
方高地大約城を距る一千米突を占領す時に午前七時四十分なり第三大隊は殿井  
少佐之を指揮し豫備隊たりしが敵の兩壘共に陥るを見るや騎砲工各中隊を高地  
の東麓に集合せしめたるは午前八時三十分なりき。

河野大佐

是に於て河野大佐は高地に登りて敵狀を瞰視すれば金州城内外の形勢は瞭然と  
して眼底に在り敵は尙ほ城に據り防戦を勉む故に大佐は山砲を高地に上せて砲  
列を布かしめ城中を射撃す。

敵兵城を  
走す・敗

河野枝隊  
の成功

師團本隊

敵砲照準  
の粗拙

九時十分城兵も亦之に應戦し、砲聲は再び轟として城東に起れり。此の時我師團本隊は復州街道より既に進みて城壁に迫り、城の北面は正に危ふし、數十分を経て、城東の敵砲は沈黙し、敵の歩兵凡そ三百名、我か枝隊に向て射撃せりと雖、其彈丸は達せず。我枝隊の砲撃彌よ烈し、敵は終に城を棄て、旅順街道に敗走せり。九時三十七分、我枝隊は第三大隊殿井少佐の所率を遣はし、金州城の南東凡そ千米突を距る高地を占領せしめ、以て我軍をして、南顧の患無からしめたり。

十時枝隊は又第二大隊を城の南東角に進め、敵の背後に向はしむ。敵兵退却しつつ尙ほ射撃すると頃らくす。我兵之を究追し、城南貳千米突の一高地を占領せり。此日河野枝隊の任務は此に至りて完く其功を奏したり。

師團本隊は、曉第七時復州街道八里莊附近に達するや、其先頭歩兵第二聯隊は開展して城外に迫り、敵は城中より頻りに大砲を連發して之を防ぐも、其照準の粗拙なるや、命中すると極めて稀なり。午前八時我砲兵第一聯隊は進みて三里店に在り。聯隊(砲兵)副官櫻井砲兵大尉(庫五郎)は馬を馳せて城中を砲撃するの令を、永嶺大隊長(源吉)松本大隊長に傳へ、砲列を三里店の閘門に進めしむ。永嶺大隊長は戸張副官及

好陣地好  
地位

百雷一時  
に發す

ひ第一中隊長白石大尉(長治)第三中隊長山岡大尉(重壽)を従ひ、松本大隊長は西山副官(龜吉)及び長井第二中隊長(長黙)藤室中隊長(松次郎)を従ひ、城を距る千六百米突の處迄敵の砲彈猛烈破裂の中心を冒かして疾驅進せり。

是に於て砲隊將校聯隊長(今津)大佐(大隊長)永嶺少佐及び松本少佐(中隊長)白石、山岡、長井、藤室は復州本道より西方高地に、木村中隊長(砲兵)大尉(木村丑徳)は本道の東方高地に進み、極めて凹凸なる險惡の地にして、馬匹の困難極めて太甚しきをも顧みず、各將校(砲)隊は身を挺して縦横馳驅し、實に砲門排列の位地、附屬車馬の隠蔽地等を視察撰定し終り、各中隊長は各其部下を率ゐて陣地に進めり。此陣地は、金州城を距る東北千六百乃至二千米突許の高地に在り、一目の下、滿城を瞰視し、一物も之か形を逃るゝ無く、亦我展望を遮るもの無し。此くの如き好地位を占め、之に排列するに、廿四門の野砲と十二門の山砲と合せて三十六門の大砲を以てし、(野)砲中隊の砲は五十米突乃至百米突の間隔を以て之を配置せらる。而かも此砲車一齊に轟發せる瞬間、金州城頭榴霰彈の破裂するもの、正に是れ百雷一時に震ふか如し。敵軍も亦始めは之に屈せずして、『グループ』野砲を城上に列し、暫時應戦したりと雖、我か砲力

全軍總攻

鐵扉深く

一團の地雷

の猛烈なる砲烟天に漲り山谷爲に震ひ而かも命中の精密なるか故に城中の敵軍は忽ち屈伏し我砲撃三十分餘にして敵の發火は沈黙せり此時機を看破したる山地中將は忽ち馬を驅りて戰鬪線に臨み全軍總進撃の喇叭を吹かしひるや各隊一齊之に和し進撃喇叭の涼々たる響きと共に我か歩兵は吶喊して城の北面及び東面に肉薄せりと雖城壁の高さ三丈餘甘メートル直立して攀るべからず四方の城門は鐵扉堅く鎖し之を推開破毀すると極めて難し壁上の銃眼よりは敵兵銃砲を發して我を射る彈丸紛々として霰の如し。

城中の敵將は豫め此事を期したりけむ城の北門(永安門)外百二三十米突なる廣場に一團の地雷(凡そ百餘人以上を一時に爆殺すべきの装置を埋設し以て我軍を陥れむと謀れり然れども我工兵第一大隊長田村少佐(義一)之を率ゆは豫め師團長の命を受け地雷火の除去に注意し且つ城門開通の任務を擔當せしか故に午前九時三十分田村大隊長は第一工兵中隊長中島大尉(久敬)をして北門壁下を偵察せしめ地雷の敷設を發見し其電線を切斷せり而かも部下工兵を二分し一部は爆裂城門を破壊するの作業に従事せしめ他の一部は爆藥無効なる時は長桿に攀りて

爆裂手段  
其功を奏す

小野口徳次

高壁を超えるの作業に従はしむ然れども爆裂手段は忽ち其功を奏し北門の兩扉は轟壞したるか故に我工兵は烟焰を冒かして門内に進入し第二門の破壊を成功せり此爆裂作業の初めに城中の敵兵は亂射狙撃交も我作業に抵抗したるか故に我工兵第一中隊上等兵一名は負傷せり此上等兵は當時敵の彈丸亂飛の衝に當りて蕩然綿火藥を携抱し敵彈の爲に片臂を貫傷せられ鮮血淋漓たるも毫も屈撓せず泰然自若として城門中央兩扉の脚部に爆藥を堆裝し以て見事に其爆壞の功を遂けたる者にして其姓名を小野口徳次と曰ひ栃木縣下野國黒羽の人年甫めて廿三歳也城北鐵門玆に破るゝや我歩兵は潮の湧くか如く先を争て進入し幾ばくも無く東門も亦我兵の開破する所と爲り敵は狼狽其砲銃彈藥夥多を棄て城の西門を開きて旅順方面に逃走せり我全軍直ちに城内に進入したるは午前十時半頃なりき。

山地中將は豫備隊たりし歩兵第三聯隊及び砲兵一中隊をして敗兵を南方に追撃せしめ大連灣街道の一村蘇家屯の南に到りしが日既に暮れたるを以て追撃を中止せられたり是れ山地中將が明日更に大連灣進撃の心算あるを以て也。



金州の敵軍

金州の敵軍は大約左の如し、

(一) 懷字軍 總兵 趙懷業の統率する所

正副營

左右營 合計貳千人(但し大牛本年九月新募の生兵丁にして未だ訓練を経ざる人夫に均しき勢也と云ふ)

(二) 徐軍歩哨隊一哨

二百人

同 騎哨隊一哨

百騎

同 後營歩隊一營

五百人

同 砲隊一營

五百人

同 馬隊一營

二百五十人

(三) 金州旗練軍歩隊

五百人

同 馬隊

二百人

楚軍歩隊

若干

同 馬隊

若干

徐軍ハ新募の生兵に率邦道兵に率おたるものと云ふ

以上通計四千餘人

但し此内三分の壹以上金州城外并に城中を戍衛し、其他は大連灣を守りたるものゝ如し。

又金州兵を率ゐたる者は總兵趙懷業及び總兵徐邦道なるか如し。

敵の死者は僅かに數十名、傷者は蓋し百餘名に下らざるべしと云ふ。我兵は十一月五日、六日兩日の戰に於て一人も戰死者無し、負傷者僅かに數名のみ。(其中士官は僅中尉大野尙義一人、輕傷あるのみ)

### 第四

## 大連灣の陥落

第二軍の目的は、旅順港の占領を以て最も急要とす。而かも金州城及び大連灣を先づ占むるに非れば、旅順攻撃の便を獲るに難し。他無し、後方の連絡完からざるを以て也。

大連灣は、旅順以東の沿岸に於て、最も深廣出入葉泊に便なる良灣たり。金州半島に

後方の連絡完からず

大連灣の位置

上陸するに大軍を以てするの門戸と爲るべきものは、此灣に如くは莫し。今を距る三十年前英佛連合軍が北清北京に侵入するに當り、英軍が豫め據りて以て其策源地と爲したる處は實に此灣頭也。

清國政府は、近十餘年來始めて斯に反省し、敵艦隊の此地に上陸するを防かむが爲に、砲台建築を企て、獨逸砲兵大尉ホン、ハンネツケンを聘し、其設計に従ひ、歐洲最近の式に據り、勞費を惜まず旅順港及び大連灣堡壘を築造せしめたるが故に、今や此灣は三十年前の大連灣と全く雲泥の懸隔を呈せり。加ふるに此地砲台に備へたる所の要塞重砲は、其大なるもの口徑廿四。珊。サンチメートル。小なるもの十五。珊。に降らず。若し精練勇敢なる我日本兵の如き者、二中隊を以て之を守らしめむには何等敵艦と雖海門より突入するを得ざるは勿論、背後陸上よりするとも、亦敵軍一師團以下を以てして之を侵略し難き程の堅壘利砲を完備したるものなりと云ふ。我山地師團長は、金州城占領の即夜、更に大連灣背面攻撃の方略を授けると左の如し。

大連灣背面攻撃

一 西少將は、歩兵第三聯隊騎兵一小隊砲兵二中隊を率ゐる旅順街道を扼し、以て

旅順半島の守備に任すべし。

一 乃木少將は、歩兵第一聯隊騎兵一小隊工兵一中隊衛生隊半部を率ゐ、和尚島砲台を攻撃すべし。

一 河野大佐は、歩兵第十五聯隊騎兵一小隊工兵一中隊衛生隊半部を率ゐ、徐家山及び老龍島砲台を攻撃すべし。

一 其他の諸隊は、豫備として、金州城南に屯すべし。

七日拂曉、我が各隊其部署の方面に向て發す。我將校は心中に以爲らく、大連灣は、敵軍の雄鎮として、恃む所、其砲壘の堅固なる、其砲力の銳利なる、蓋し金州城の比に非るべし。故に我兵猛勇と雖、之を抜くは容易に非ず。一場の苦戰激闘あるは必然ならむと。豈料らんや、此日黎明我が兵之れに近前すれば、敵の殘兵は僅かに若干人留まりて發砲する數發にして、忽ち竄奔し去り、其餘の敵軍は前夜に於て、業に已に守を棄て、夜暗に乗じて旅順其他に逃走したるものならむとは、是に於て各砲臺は、我兵銃劍の未だ其壘壁に迫らざるに先ち皆戰はずして我有に歸し、我兵之に入りて高く旭旗を掲げたるは正に午十二時なりき。

無双の利器

敵軍逃走

防禦方等に關する圖書

各砲臺の大砲は、皆精銳なる新式にして、就中和尙島の中央及び東西諸堡の『クルツ  
 プ』四珊、十五珊、各砲の如きは、自動的轉回射擊砲にして、砲臺の前後左右八面に向  
 て自在自由に之を發射し得らるゝ所の無双の利器なりしも、敵兵は彈藥裝填した  
 る儘にて、之を發射するに遑なく、忽ち遁逃せるは、其狼狽の太甚たしきを知るべし。  
 此時近く海灣を望めば、和尙島の前面に儼乎として列を爲したる十五隻の我が帝  
 國軍艦各旻旗を朔風に翻へせるを見る。蓋し、敵軍は背面に於て金州城沒落し、前面  
 は、日本艦隊の來迫するを以て狼狽を極め戦はずして逃走せるものなるべし。  
 我工兵中隊は、此日早朝和尙島に進みしに、到る處寂然として敵の隻影無きか故に、  
 直ちに進みて、火藥庫に入りて之を點檢し、又水雷營に進入し、大連灣内各處に沈設  
 せる敵の水雷圖を押收し、併せて必要なる防禦方等に關する圖書を收め得て之を  
 神尾參謀少佐に獻す。故を以て我海軍は敵の水雷に關する秘密を悉く知るとを得  
 たるは、勿論。又敵の水雷を引き揚げて之を我か利用に供するとを得たり。  
 初め我軍は大連灣の敵兵が此の如く怯弱を極めたる者とは想はずして、少くとも、  
 一日以上の抗戰防禦を爲すならんむと豫期したり。故に陸兵背面攻撃と同時に海

艦隊無双の手筈

本艦隊は、旗  
 千代田、旗  
 比叻、旗  
 第一遊撃隊  
 高千穂、旗  
 津州、旗  
 遊撃隊  
 扶桑、旗  
 第四遊撃隊  
 金州、旗  
 第一遊撃隊  
 赤城、旗  
 大連灣、旗

上。より。は。艦。隊。を。以。て。之。に。應。援。す。る。の。手。筈。を。豫。定。し。十一月六日味爽を以て、我艦隊  
 は、花園河口を抜錨し、西南に向て進航するもの、大小合せて十七隻、第三遊撃艦隊を  
 除く外、各隊皆之に赴く。  
 我旗艦橋立以下本艦隊之か先驅たり、第一遊撃隊之に次ぎ、第二、第四遊撃隊又之に  
 次ぐ、午前十時頃水雷艇二隻西方より來り、報して曰く、旅順口には敵艦二隻あるを  
 認む。我水雷艇の其港外を過ぐるや砲台より四五發を發射せり。大連灣には敵艦無  
 しと。  
 同十二時、敵艦廣甲の淺瀬に乘上げ、壞破委棄せる處を認む。其橋頭尙ほ明かに辨ず  
 べし。此處は、一岬を隔て大連灣に近し。午後零時、旗艦より命あり、第一遊撃隊は列を  
 脱し、本隊の左側に出て進めと曰ふ。蓋し敵地の既に近きを以てなり。既にして三山  
 島大連灣外に在る島の東二三海裡の處に到れば、轟然たる砲響は遠く雷聲を聞く  
 か如し。是れ金州城外我か第二軍の砲撃なるか如し。  
 此時我本艦隊は進行を中止し北三山島の東に在り。旗艦は令して曰く『小汽船を送  
 れ』と是れ阿丁灣對北三山島間の沈設海底水雷を探掃せしむるか爲也。小汽船の直

小艦。

ちに旗艦に赴き集まるもの六隻。速かに其探掃作業の準備を整へて直ちに灣内に進む。之を掩護せむが爲に第四遊撃隊中の小艦、筑紫、愛宕、摩耶、赤城、大島は後方より旗艦の側を通過して、小瀛船を追て灣内に進入し、沈設水雷の探掃に従事すると、四時間の久しきに亘りしも、敵の砲台は、之に對して抗抵砲撃を爲すと無し。日暮れ艦隊は路を東南に取り、エンター灣に泊す。翌七日、未明艦隊は同灣を發し、大連灣口に到る。午前八時、筑紫、赤城、摩耶の三小艦は三山島の右方を横きり灣内に進み、烏海大島の二隻はケル灣内に進む。八時四十分、筑紫は砲門を開き、阿丁山は大連灣の東濱澳角に在る錨地の岸頭にして信號台あり。の信號台に向て第一發を放ちしに、彈は山頂に落て破裂せり、赤城、摩耶も亦續きて數發を放つも、敵兵應せず。是に於て本隊第一遊撃隊及び第二遊撃隊も亦順次進入し、九時四十分、旗艦橋立が、阿丁澳口に來りし時、右舷より數發を放つも、敵は依然として應せず。我艦暫く砲撃を止む。十時廿分、尙島砲台の間に白旗の風に翻へるを認め、旗下に一團の兵士整列する者の如し。雖、其服裝の何兵たるを辨し難し、吉野艦に信號して、旗艦は報問して曰く『砲台上の兵は、我陸軍に非すや』と。

ケル灣

敵兵應せず

是より先きに、徐家山砲臺、大連灣の西方を撃たむが爲にケル灣に向ひし、我烏海大島二小艦も亦敵が應砲せざる故を以て返り、大連灣に來る。午前十一時、旗艦は、小瀛船六隻に命し列を正して、和尙島に進ましむ。既にして始めて信號あり曰く『陸砲臺に在る者は皆我陸軍にして、和尙島東部砲臺は今朝六時既に先づ之を陥れ、直ちに其砲臺砲を利用して敵兵及び鄰砲臺を射撃し、各砲臺相繼ぎ皆我手に歸せり』と。旗艦の水雷長及び吉野艦より小瀛船に乗りて先づ進行上陸せし、關少尉は、直ちに水雷營所に入りて着々緊要なる取調を爲せり。

午後四時、各小瀛船は各艦に返り報す。艦隊は即日、明石丸を大同江に發遣して、金州及び大連灣共に占領の戦捷を大本營に報し。一面は直ちに敵の沈設せる所の灣内水雷を掃除する處分に着手せり。此日は、第四遊撃隊の各小艦及び水雷艇の幾部分を阿丁澳に錨泊せしめて、灣内を警戒し、其他艦隊は沖上に出て、八日午前二時頃より、吉野、高千穂は、抜錨して、旅順口方面に向ひ、港外を往復すると、數次以て敵狀を搜索したるに、米國軍艦「バルチモール」が同港外に寄泊しあるを見るのみ。八日、我艦隊は一同ケル灣に投錨し、其翌九日より、我運送船、大同江、若しくは花園江口、貔子窩

等より續々來りて大連灣に入港し西砲臺下なる棧橋に直接して其荷揚を始めた  
り而かも水雷の位置判明したるを以て艦隊も亦深く灣内に進入錨泊するを得  
たり

英國海軍其他専門家の實驗によれば大連灣内は東北東より東南東に至る方位  
を除けば其餘各方の風を遮隔し得べし。

冬期此風多からず故に我運送船は大連灣棧橋に直接着船して積荷を卸揚する  
の便利を得るのみならず又花園河或は貔子河の如く一里半乃至數里沖に碇泊  
するの危険無きを得。第二軍兵站作業の之を第一軍に比すれば遙かに暢達利便  
を得たる所以の原因は實に此大連灣占領の効果に在り。

抑も大連灣が金州半島最要の關門たるとは支那人と雖夙に之を熟知し其海底水  
雷の敷設は極めて周密嚴重なりしが故に我軍にして其水雷營所を無難に押收し  
水雷敷設方略圖面を採收し得るの幸運に逢はさらしめむには該灣内水雷を掃除  
すると此くの如く迅速容易なるを得ざるべし。然るに彼れ支那將帥の無職怯懦な  
る狼狽を極め其水雷營所緊要秘密の圖書一切を委棄し去りたるか故に七日午前

の水雷掃除の功程

十一時過最初上陸せる我吉野艦關少尉の爲に是等水雷秘密圖面悉皆收拾せられ  
且つ精密調査を遂げられたるを以て其結果として水雷掃除の功程を速かならし  
むるを得たる也。

凡う敵國の樞要港灣には必ず其要處毎に密かに設けたる防禦的水雷あるを常とするが、  
故に攻撃艦隊は十分周密なる探掃の手段を施用し以て水雷を掃除するを必要とす。此掃  
除を完了したる後に非れば敢て輕易に敵地要港灣に進入すべからず。是れ海軍戰術に  
在りて極めて緊要任務にして殊に危険なる作業たり。局外者此作業の苦心困難を知らざ  
る所以は他無し。今世最新海軍戰術の通則に暗きを以て也。

(甲) 沈設水雷(グラウンド、マイン)海底に沈設せるもの。

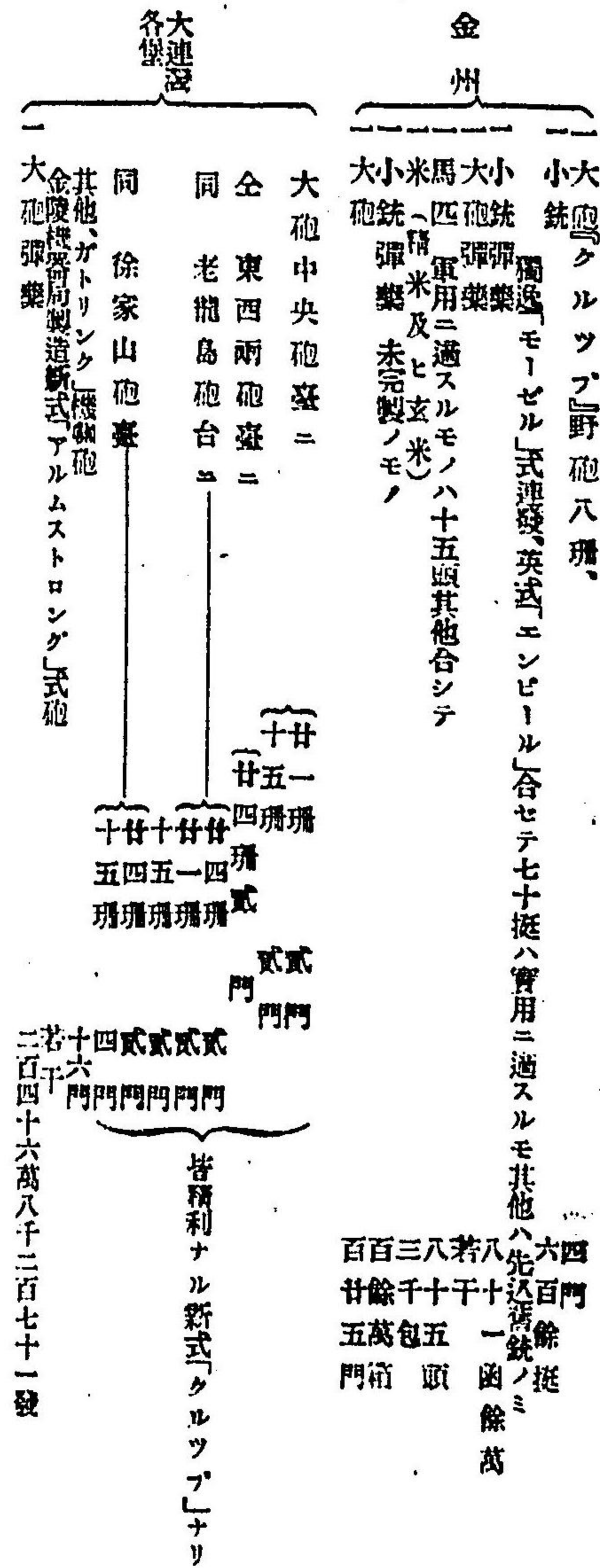
(乙) 浮設水雷(ブイアント、マイン)海水深きに過るときは其水中半間に潛伏設置せるもの。

(丙) 觸發水雷(コンタクト、マイン)

此三種は皆其起點本源を陸上に設置し電線の作用に依りて之を發火爆發せしむるも  
のなるか故に最初其電線を切斷すれば發火する能はさらしむるを得べし。  
或は掃海方法を以て錐形的釣を付したる網索を小汽船より海底に卸し之を縱横に曳  
張りて海底を搜索すれば電線を釣掛し以て沈設水雷を引揚ぐるを得べし

(丁) 機發水雷(メカニカル・マイン)  
 此種は、別に陸上に電線を通せず、單に其機關作用に依り敵艦來り觸るれば、自發爆製を起すものなるか故に之を除くと最も難し。掃海法(クリーピング)を施し、機軸水雷の發火性機關部分と、其爆發包莖部とを分離せしむるに在り。  
 十一月六日七日の兩日共に我兵一人も戦死無く、七日大連灣の如きは一人も戦傷者無し

戦利品は金州及び大連灣各處に於るもの、左の如し。



戦利品

### 第五

## 金州行政廳の設置

此他金州大連灣共に敵の遺棄せる大小軍旗及び兵卒制服の類は、殆ど枚舉に遑ま  
 あらざりき。

旅順口の  
 旅順口  
 旅順口  
 旅順口  
 旅順口  
 旅順口  
 旅順口  
 旅順口  
 旅順口  
 旅順口

金州城大連灣共に咄嗟にして、我第二軍の占奪する所と爲る。旅順口の腹背共に我  
 陸海兩軍の封鎖に陥り孤城落日の姿を爲せるや知るべし。然れども其海岸砲臺の  
 絶險なる東洋無双と稱せらるるの實あり。其背面陸上と雖亦極めて險隘。之に加ふ  
 るに十分の人工を以てし、堅固堡寨の備あるか故に、我攻撃軍は豫め周密なる勝算  
 を確定して而後之を決行せさるべからず。故を以て、第二軍は一面專はら兵力を休  
 養し、且つ攻城砲廠及び第十二旅團の到着を待ち、他の一面は、紀律を嚴明にし、恩威  
 並ひ、施し以て金州城下其他占領地の人民を招諭安撫するとを勉めたり故に、土民  
 漸く我軍律の嚴肅なると其撫民の寛仁なるとを覺るものあり。曩きに兵來を聞  
 きて其狼藉を怖れ先つ逃竄せるものも亦漸々歸り來るに至れり

軍紀嚴肅

旅順口  
腹背共に  
危急なり

占領地行政

第二軍參謀長は十一月十一日を以て各部隊司令官に向て軍司令官の命令を通知し、同日軍司令官は第四十三號命令を發布して軍人の従者馬丁軍夫の輩か戎器(劍刀仕込杖)を携帯するとを禁止し、以て是等雜人が軍威を藉りて跋扈し、土地の人民を侵凌脅示するの弊害を制止せしめ、同十二日金州城内占領地行政廳を置き、一等領事荒川已次氏を以て知廳事に任じ、專はら州民を撫綏せしむ。其告示及び行政規則左の如し

○告示

金州城ニ行政廳ヲ置キ其行政規則左ノ通り相定メ一等領事荒川已次ヲシテ知事ノ職務ヲ取扱ハシム。

明治廿七年十一月十二日

第二軍司令官伯爵 大山 巖

○金州廳行政規則

- 第一條 金州城ニ行政廳ヲ置キ城內及ヒ城外附近各村落ヲ以テ管轄區域トス
- 第二條 行政廳ノ職權ハ現ニ金州城近ヲ占領スル日帝國軍隊ノ交戰權ニ基ツク者ニシテ第二軍司令官職權內ニ於テ之ヲ定ム
- 第三條 金州城行政廳知事一員屬員若干名ヲ置キ知事ノ官氏名ハ軍司令部ヨリ管内一般ニ之ヲ公告ス

- 第四條 行政廳ノ守衛及ヒ巡邏ノ爲ニ憲兵若干ヲ同廳ニ附屬セシム
  - 第五條 知事ハ日本軍隊ノ利益ヲ計ル爲ニ必要ナル行政事務ヲ執行シ其重大ナルモノハ軍司令官ノ指揮ヲ請ヒ其兵站勤務ト交渉スルモノハ兵站監ト協議シテ之ヲ執行ス
  - 第六條 知事ハ日本軍隊ノ利益ヲ計ル爲ニ管内清國民及ヒ內國人民ニ對シテ万国公法ノ範圍內ニ於テ刑罰ヲ行ヒ其死刑ニ該ルモノハ軍司令官ノ許可ヲ得テ之ヲ執行ス
  - 第七條 知事ハ日本帝國軍隊ヲシテ占領地内ニ於テ總テ非違不法無カラシムル爲ニ在管内日本帝國臣民ヲ管理シ陸軍刑法治罪法懲罰令ニ依リ處分スベキ事件ハ師團又ハ兵站部理事ニ移牒シテ適宜ノ處置ヲ促カシ其他ノ事件ハ豫メ軍司令官ニ經伺シテ定メタル軍律ニ依リ處分スヘシ
  - 第八條 知事ハ管内人民ノ財産及ヒ營業ヲ監査シ其實況ヲ軍司令部ニ報告シ總テ軍司令部及ヒ師團旅團司令部若クハ兵站部ヨリ行政廳管内ニ在ル清國民ニ向テ發セムトスル命令及ヒ處分ニ就キ通知ヲ受ケ意見ヲ述フヘシ
  - 第九條 知事ハ其職權ニ屬スル行政及ヒ司法事務ヲ補助セシムル爲清國臣民ヲ使用シ必要ノ場合ニ於テ之ヲ給料及ヒ褒賞ヲ與フル權ヲ有ス
  - 第十條 金州城行政廳ノ經費ハ軍監督部ヨリ之ヲ支辨ス
- 之と同時に漢文を以て清民に告諭すると左の如し

○大日本帝國軍本營示

欽命大日本帝國陸軍大將伯爵大山示。

現開政廳於金州廳衙門厚。施仁政。公平施政。務存舊制。一從習俗。以便爾等有業。應務一切事宜。飭大日本帝國領事官荒川已次辦理。爾等有業速來瞻仰。不狎不恐。須浴德澤。爲此特示。右諭通悉。

明治二十七年十一月十二日

# 日本陸戰史卷六

## 旅順口の激戰

### 第一

#### 旅順口の形勝及地勢

今世に於て東洋第一の堅塞。壘を語る者は必ず先づ指を旅順口要塞に屈せざる。莫し他無し。旅順口の地勢たる其天然既に險隘にして守るに易く支むるに難く加ふるに清國政府其勞費を吝まず人工を極め堡壘を築造し同港の前面并に背面共に充分堅固強大なる防禦方法を完備せしめたるを以て也。

露國及び英國佛國の如き從來支那侵略の大望野心を懷抱する所の列國海陸將校にして東洋兵事に深く其心を用ゆるもの意見に據るに旅順の堅塞築造成功の結果を驚嘆し以爲らく之を陥れむと欲せば少なくとも數萬以上の大軍を以て其背面より之を猛烈に攻撃せざるを得ず而も攻撃軍の死傷は少なくとも若干千人

東洋第一の要塞壘

列國兵路家の批評



以上に降らざるべしと。而して此評たる、決して尋常旅行家の漫評、或は交際社會の諛言に非ずして、専門兵家の共に然りと爲す所也。然るに我第二軍は、僅々二萬餘の兵を以て、金州半島に上陸し、上陸以後廿餘日を出てずして、其大目的たる旅順口背面に達し、而かも僅々一晝夜の攻撃を以て、同港全般堡寨を舉げて之を陥落するも、其攻撃計畫の靈妙と、其力戰の猛烈とに至ては、誰れか之に感服せざるものあらんや。

山地中將  
 旅順攻撃の成績  
 旅順など  
 思ひ  
 寄らぬ

旅順攻撃の任務に當れるものは、實に我第二軍也。其將官は第一師團長山地中將及び混成旅團長谷川少將にして、兩將を統率せる第二軍司令官は即ち大山大將也。旅順陥落の夕、或人山地中將に謁し、其大捷を賀したるに、中將毫も欣悅の色無く、「咄、此の事が、戦闘などとは思ひも寄らぬ」と言はれしかば、其人慚愧し、復た言ふ能はずして、罷みしと云ふ。願ふに中將が此言は自ら謙遜するの餘に發したるものなるべし。然れども旅順攻撃の成績は、豈第十九世紀東洋戰史に於て、屈指著明なる武功と謂はざるを得んや。

旅順港は、老鐵山の東北麓に在る一港灣にして、北緯大約卅八度四十七分我陸中羽

此經緯度  
 路部の告  
 示第四百  
 八十四號  
 に據る  
 黃金山  
 饒頭山  
 東器西器  
 椅子山砲  
 松樹山砲

後の某部に同じ東經大約百廿一度十五分餘に在り。老鐵山は、金州半島の南西極に聳立せる一高峯にして、其拔海一千五百英尺。海上より遠く之を望めば海島の如し。旅順港口は南方に面し、幅二百七十港内は東西に長く、南北に短かし。港口の左角即ち東角に峙立する高さ四百五十九英尺なるもの黃金山と爲す。此山の高地に著名有力なる砲臺あり。港口の西南に在りて海に向ふ高山を饒頭山とす。其高さ三百六十一呎。上に堅固なる砲臺あり。港内分ちて、東器西器と稱す。軍艦錨泊の地と爲りたるものは即ち東器にして、乾船渠も亦東器に在り。東器の北岸は即ち旅順市街及び海軍水雷營、水雷營并に毅軍左營、毅軍前營、毅軍操場等の在る處也。旅順市港の背面を擁する一帯の山脈は自然に城郭の勢を成せり。此背面の最も堅牢なる堡寨は椅子山砲臺とす。此砲臺は椅子山の東南麓高さ八十六米突に在り。旅順の西北方面に於る最も要害は實に此砲臺なりとす。椅子山砲臺を距ると約千五百米突なる東方高さ百三米突の高峯を松樹山砲臺と

二龍山砲臺

す。松樹山の直東距離大約二百五十米突に在るものを二龍山砲臺高さ八十二米突とす。松樹山二龍山も亦共に堅固なる要害にして、金州より旅順に通ずる本街道を扼制するに最も有力なるものとす。

故に約して之を言へば、松樹山二龍山の兩砲臺を陥落する後に非れば、背面本道よりする敵は決して旅順口市街に進入すべからず、而かも先づ椅子山砲臺を陥落したる後に非れば、松樹山砲臺の險要は之を抜くと極めて難し。

然らば、則ち旅順口の背面より進入を企つる敵軍の勝敗は、椅子山砲臺を陥し得ると否とに由りて判るべし、而して此背面防禦設計主任者たる獨逸陸軍砲兵大尉

ホン、ハンチツケン氏が十餘年來の苦心を積み、力を椅子山、松樹山、二龍山、鷄冠山等各砲臺の築造に費やし、莫大の經理費金を費やしたる所也。

鷄冠山砲臺

鷄冠山砲臺は、旅順の東北端に在る最も強固なる砲臺にして、高さ約百廿六米突二龍山と相對峙し、旅順背面東北端の最要害を占むるものなり。

西北方面の砲臺は椅子山を第一とし、次に松樹山、二龍山及び東北方面の鷄冠山に至る迄の各高地に於ける砲臺は、皆専ら背面に防禦を目的としたる堅固なりと雖

黄金山砲臺  
旅順防禦の最大主腦力

常山蛇勢の効能

此外に、海岸接近にして而かも八面自在に砲撃を逞うするを得、背面前面の別無く、展望殊に開達し、其大口徑重砲は三百六十度の回轉を以て、遠距離射撃に便なる者を黄金山砲臺とす。故に黄金山砲臺は、旅順防禦の最大主腦力を有する者と謂はむも亦可也。

之を要するに、旅順口の堡塞は、大小通計廿餘ヶ所、各其要地を占めて、脈絡貫通し、頭尾相接、恰かも常山蛇勢の効能力を逞うするものにして、東洋無双の險要と稱せらるるは、決して誇言に非る也、而して其築造及び防禦の爲に費やしたる資力を量るに、三億圓以上に降らず、現在有形的の建設物及び新式銳利なる重砲等の價值を以てするも、二億圓に降らざるべしと云ふ。

第二

我軍の前進及土城子の小鬪

是れより先に、十一月七日大連灣全く我軍の占領する所と爲り、同九日には、我艦隊及び運送船共に安全に續々同灣に入港荷揚を爲すの便利を得たり。故に我第二軍

の兵站事務は、之を第一軍に比すれば非常に優れる便利を加へたるは勿論、萬般の利便を占め、兵力の休養は既に充分なるを以て、十一月十一日、第二旅團長西少將は歩兵第二聯隊騎兵半小隊砲兵二中隊衛生隊半部を率ゐる旅順進撃軍の前衛として金州を距る五里西南方なる三十里堡に其兵を進めたり。金州より旅順口に到る路程の重なる者、左の如し。

- |                  |      |
|------------------|------|
| 自金州城(距旅順十八里)     | 大約里程 |
| 至 毛家營            | 二里半  |
| 至 夏家店 (或は夏家屯)    |      |
| 至 三十里堡 (距旅順十三里餘) | 五里餘  |
| 至 後各鎮堡           | 七里餘  |
| 至 夏家河子           |      |
| 至 于家嶺            |      |
| 至 後木城驛           | 九里廿丁 |

土城子  
(距旅順  
三里廿六  
丁餘)

- |                                    |      |
|------------------------------------|------|
| 至 前木城驛                             |      |
| 至 營城子 (距旅順八里)                      | 十里   |
| 至 雙臺溝 (距旅順六里廿丁餘)                   | 十一里半 |
| 至 長嶺子                              |      |
| 至 徐家屯                              |      |
| 至 土城子 (土城子より南に向ひ營城に至る道の間は東街道西街道あり) | 十四里半 |
| 至 火石嶺                              |      |
| 至 李家屯                              |      |
| 至 左家屯                              |      |
| 至 吳家屯                              |      |

攻城砲廠

- 至 石嘴子
  - 至 賈家山
  - 至 三合店
  - 至 營房 (距旅順一里廿丁餘)
  - 至
  - 至
  - 至 水師營 (村落の地名なり、軍營には非ず)
  - 至 旅順口
- 十六里半
- 十八里

既にして混成長谷川旅團も亦來りて金州に達し而かも旅順攻撃の爲に必須不可  
 缺の兵器たる要塞砲兵第一聯隊の攻城砲廠は、十五日を以て、大連灣に廻航し、十六  
 十七兩日を以て其上陸を完了するの確報を得たるか故に、我第二軍は、彌上旅順に  
 向ひ進軍の期を決し、十六日を以て其部署并に進軍行程を命令せると左の如し。

- 搜索騎兵
    - 騎兵第一大隊(内二小隊半缺)
    - 騎兵第六大隊の第一中隊(二小隊缺)
- 司令官騎兵少佐 秋山好古

- 左翼縱隊
  - 司令官第十四聯隊長步兵中佐 益滿邦介

- 步兵第十四聯隊(一大隊缺)
- 騎兵第六大隊一小隊
- 野戰砲兵第六聯隊の山砲一中隊
- 工兵第六大隊第一中隊(一小隊缺)
- 第六師團衛生隊の半部
- 糧食半縱列

- 右翼縱隊
  - 司令官第一師團長 山路陸軍中將

- 第一師團步兵第十五聯隊本部及び第一第二大隊騎兵第一大隊本部及第  
 一中隊と三小隊、大小架橋縱列馬廠缺)
- 混成旅團
  - 司令官第十二旅團長陸軍少將 長谷川嘉道
  - (步兵第廿四聯隊、騎兵中隊本部及び三小隊半、山砲中隊、工兵中隊、本部  
 及び二小隊、衛生隊半部、糧食半縱列缺)
  - 攻城砲廠後備工兵一中隊を合す)

以上部署中に缺かれたる諸隊は、金州城の守備及び復州街道哨兵并に大連灣守備の爲に之を配付せられたるものとす。

十一月十七日を以て各隊進發、而かも其行程區分は左の如し、(豫定)

搜索騎兵	三十里堡に宿	同	十八日	同	十九日	同	廿日
右翼第一師團	三十里堡と高家窪との間に宿	双臺溝と木城驛との間	同	同	同	同	同
同混成旅團	金州附近宿	木城より夏家河子の間	同	同	同	同	同
攻城廠	柳樹屯宿	夏家屯	同	同	同	同	同
左翼縱隊	辛寨子宿	適宜	同	同	同	同	同
軍司令部	三十里堡附近	双臺溝と木城驛との間	同	同	同	同	同
		賈家山と徐家窪との間					
		賈家屯附近					
		賈家山附近に開進す					
		太子山附近に開進す					
		李家屯北方集合					
		旅順の東北方に開進す					
		賈家山附近					

(備考) 攻城廠は出發第三日以後に於て軍の直轄に復す。

我搜索騎兵及び右翼縱隊は、本街道を取りて進めるも、左翼縱隊益滿中佐の所率は毛家營金州を距る二里半餘の西南方石井村より左方に別れ、南方間道に入りて、捷路を取り、以て旅順の東北背面、鷄冠山の後麓を目的として進行せり。此捷路は今、

搜索騎兵  
敵に圍ま  
る

我騎兵三  
箇中隊

我搜索騎兵の偵察士官が、百方辛苦を経て、新たに之を偵知し得たるものなりと云ふ。

右翼縱隊の前衛西少將の一部隊は、十七日、既に進みて前各鎮堡旅順を距る十一里餘に宿し、十八日には、午下二時半を以て營城子、旅順を距る八里に達したり。時に『搜索騎兵第一大隊の一部が、土城子に於て、敵の大兵に圍まれ激闘苦戦しつつあり』との急報到達せしを以て前衛第三聯隊の本隊、第二大隊、第三大隊及び砲兵一中隊は急行して双臺溝の西に駆け附けたりしも、時既に後れたるを以て敵は勝利を收め土城子の方面に退却せり。

此日の戦闘は、午前十一時頃に始まり、我兵は最初僅かに騎兵三箇中隊を以て敵の大兵に當り、午後に至り、敵勢は三面より潮の湧く如く増加して、衆寡敵し難きか故に漸次退却せしが、午後零時廿分頃、我前衛歩兵第一大隊の一箇中隊も亦疾驅來援して、我騎兵を掩護し防戦に力めたりと云、敵の騎兵は七八百歩兵約三千人にして衆寡懸隔し、之に加ふるに敵は野砲四門を以て我兵を攻撃すると極めて急なり。我兵騎歩共に苦戦し、騎兵中隊長淺川大尉、敵騎兵負傷し、歩兵第三聯隊第三中隊中萬

必死奮闘

却敵兵の退

中尉徳二は砲彈に踏れて、之に死せり。其他我騎歩兵下士官以下死者十一名、負傷者三十餘名、騎兵大隊長秋山少佐以下皆必死奮闘し、辛うして萬死を脱せり。斯の如くにして我歩兵第三聯隊の第一大隊第三中隊は、騎兵を掩護しつつ双臺溝高地に退却し、敵の追跡すると漸く寛徐なる頃、午後二時我前衛第二大隊及び第三大隊の二箇中隊及び山砲兵二箇中隊は、戦線に到着したりと雖、敵は機を見て之を避け、土城子の方位に退却せり。時に午後二時廿分頃なりき。

此十八日土城子に於る我搜索騎兵及び前衛歩兵敗績の始末は、當時親しく此役に従事し力戦したる所の騎兵第一大隊第三中隊二等軍曹川崎榮助氏の手記せる戦闘日記に詳らかなり。其要領左の如し。

○土城子激戦の記事

十八日午前七時廿分整理して、我大隊騎兵第一大隊本部に集る。命令あり、曰く、

(一) 本隊騎兵第一大隊は本日双臺溝(旅順を距る六里廿丁半)迄前進すべし。

(二) 第三中隊は前兵たり其任務は双臺溝にある高地に於て本隊か防禦陣地を撰定する兵を掩護し、且つ土城子迄赴きて返るべき偵騎を掩護するに在

先頭騎兵  
砲火を用

午前七時四十分、我騎兵各中隊は營城子を發し、双臺溝に到り暫時小憩し、尙ほ進みて其西南方四阪兩崖の高地に達し、第一、第二、第四の三箇中隊は皆此地に留まりぬ。

第三中隊は獨り、其任務を帯ひ、進みて土城子に向ふと凡そ三千米突なる頃、敵騎兵約五十、歩兵五百人、土城子に在りとの報告あり。幾はくも無くし我尖頭騎兵は砲火を開きて敵に向ひ接近し、我中隊は皆途中に於て背囊を卸ろし、輕装して前進し、先づ第一小隊を撤開せしめ次に第二小隊を右翼とし第三小隊は又其右に撤開せり。既にして敵兵漸く増加せり、我は地物を利用して、彌上射撃を施しつつ、尙ほ前進して土城子の村落に達したり。

此時敵の騎兵約四五百、我右側面に突進し來り猛烈に襲撃す。我騎兵二箇小隊は之に當り奮闘して敵數十人を斃す。我騎兵第三中隊長淺川大尉(敏靖)衆を督して突撃縱横奮戰、敵兵を蹂躪する間に忽ち其右腕を敵彈に貫かれ劍を把る能はず。其馬も亦敵彈に中りて斃れたるは此際なりき。

退却の命令

我中隊は、土城子村落に進入して敵状を察するに、敵は赤白紅青の旗幟を樹立し、將さに潮の如く進み來らむとす。我中隊敢て屈せず、敵の重圍に對し、接戰激烈、砲聲雷の如く、硝煙は漠々として廣野を掩蔽し、彼我の別を辨する能はず。然れども衆寡敵し難く、我中隊長は殘念ながら『退却』の命令を傳へたり。乃ち且つ戰ひ且つ退く。此時我隊苦戰の状は實に筆紙に盡くすべきに非ず。

中萬中尉

首級を飲  
むるに過  
ちらず

余は分隊兵を指揮し、防戰最中、敵の一彈來りて我臀部を貫通せり。余は自から其創を包み、勇氣更に數倍し、且つ戰ひつつ七八百米突の後方なる第一小隊の退却點に到りしとき、歩兵第三聯隊第一大隊第三中隊の小隊長、中萬中尉、德二は敵の砲彈二箇に其胸を貫かれて其場に斃れたり。余は其傍らに驅け付け、其体を抱き、小隊長殿、小隊長殿と連呼したれども、中尉は既に絶命せられたり。中尉の部下上等兵某、中尉の佩劍を其遺物として持ち返りたるも、其首級を飲むるに過ちまからざりき。

此時敵彈益す亂飛し、我分隊の卒大森多吉斃れ。中島安太郎、阿久津捨吉、鈴木善二郎、田邊某等負傷す。小隊長の指揮に依り、第一、第二、第三、各小隊共に合併し、退却せ

第四中隊

しに、恰かも双臺溝より第四中隊の來援するあり。第四中隊は直ちに撒開して敵を防ぐ。余は此時創傷痛を感じ、兩脚の自由を失ひたれども、尙ほ忍みて匍匐しながらも、防戰せしに、小隊長は余に命し退却せしむ。余は決死の由を告げて其命を辭せしに、小隊長は大に怒り、『我命令に従はずんば、非常手段を加ふべし』との嚴命あり。故に余は餘儀無く、我部下栗原溝口の兩人に助けられて、歩兵大隊の防禦線迄退却せり。

我退き敵  
追ふ

時に敵兵は既に土城子の高地に砲四門を布列し、猛烈に發射せり。我兵支へ難く漸く退けは敵も亦之を追跡す。然れども、歩兵大隊の防禦線に及ぶや、我第一小隊は、一齊射撃を以て敵の追兵を遮ぎり、敵は始めて前進を停止せり。時に午後一時過なり。

我前衛第二大隊第三大隊の二箇中隊及び山砲二箇中隊は、我先哨偵騎の急を聞き、疾驅して戰線に來着し、第二大隊は敵の右翼を攻撃せむとを期せしも、時機既に後れたるか故に敵は既に土城子に退却せり。同夜は歩兵第一大隊の防禦に前哨を配布し、警戒を加へたり。云云。

此夜我前衛第三聯隊第一大隊は双台溝附近高地に露營し、第二大隊第三大隊及び砲兵等も亦其附近要處に露營し、而して右翼縱隊本隊は營城子に宿營せり。

土城子に於る我搜索騎兵及び歩兵一箇中隊の苦戦は、一方より之を見れば、事我兵の不意に出て、死者をして、非常の慘辱に罹らしめたるとは是れ寔に終天の遺恨たるや固より言ふを俟たずと雖、他の一方より之を見るときは、我が日本軍隊の爲に、最有効なる刺激の良薬と爲りたる者あるとを知らざるべからず。蓋し成歡牙山の役より以來、平壤と云ひ、鴨綠江附近と云ひ、金州城及び大連灣の陥落と云ひ、各處の戰鬪に徴するに、彼れ清軍の劣弱を極むると其連戰連敗するとは、殆んど斷して疑ひ無き者の如くなるが故に、我が日本軍隊壯年將校を始め下士卒は勿論、未だ戦はずして、氣魄己に支那兵を呑むの風あり、寧ろ單純に支那軍隊を輕蔑して、之が爲に戰陣必須の注意戒愼をも忽かせにするの傾き無きに非るもの、是れ、土城子衝突激闘苦戦以前の景況にてありしが、此一頓挫に逢ひたる爲に、全軍氣魄は層幾層の鍛鍊を加へたると共に、亦弱敵と雖決して敢て妄りに之を蔑視せず、戰陣必須の戒愼を重しするの念を起さしめたることは、實に此日土城子苦戦の結果の力多きに居れ

支那軍隊を蔑視す

氣魄鍛鍊

戰陣の戒愼

支那軍隊の野蠻的行爲

殘虐を憎むの感情

全軍の兵氣振奮を起す

り。

又此戰に於て、日清戰史を讀む者が深く注目せざるべからざる一事は他無し。支那軍隊の野蠻的行爲是れ也。支那軍隊の不紀律は固より世人の周ねく知れる所なりと雖、此日土城子役に於る我戰死者及び重傷を負て退く能はざる者に對し、其身軀肢体に加へたる所の慘酷殘忍なる行爲は實に人をして聞くに忍ひざらしめたり。況んや之を見るに忍ひんや。

彼敵兵は中萬中尉の屍体を屠り、其頭を截り、兩腕を斷ち、具さに其慘狀を極め、其他我が下士卒の死体及び重傷者も亦之を截し、或は腹部を亂刺し、或は陰部を剔抉し、尙ほ死者の軍服を剥奪し、裸跣の儘にて之を地上に委棄し、以て我軍をして、後に其屍體の誰れたる乎を識別する能はざるに至らしめたり。之を見る者誰れか憤怒せざらんや。我全軍將士か之を見之を聞きて、皆爲に毗を裂き齒を切りて、敵軍の殘忍惡虐を憎まざる莫く、報讐の念を勃興せしめたるものは實に此敵兵の野蠻的行爲に由る而かも之が爲に我全軍兵氣をして彌よ振興奮起せしめたり。

双臺溝旅順を距る六里廿丁半より旅順水師營に通する道路左右二條あり、共に砲



混成旅團  
師團本隊

車を運搬するに難からず。故に我右翼縱隊は十九日を以て其進路を左右に岐分し、  
 混成旅團は双臺溝西南高地より左に廻りて、山陵起伏の間を經趙家屯に入り、師團  
 本隊は双臺溝より本道に沿ひ、徐家屯及び土城子を経午後四時過米河子旅順を距  
 る三里餘に宿營し、軍司令部は土城子に宿せり。此日日暮より夜半に至るまで旅順  
 方面の敵壘は頻りに警砲を發せしも、我陣營に夜襲し來るもの有らざりき。  
 十一月廿日、我軍各隊は悉く攻撃地點の附近に集まりたりと雖獨り攻城砲の一隊  
 尙ほ後れて未だ到達せず。然れども翌廿一日は總攻撃を决行すべき豫定の期日な  
 るか故に、軍司令官大山大將は、各將校各團隊參謀官等を李家屯の西北に集めて總  
 攻撃の部署を定め、命令を授け、了りたる後、各自從容として、此處の丘阜に、彼處の原  
 野に馬を駐め、前面敵地の諸砲壘を遙かに望み見つある折しも、忽ち見る、大小赤  
 青の軍旗は處々の谷間に隱顯し、我陣地を指して將さに来襲せむとする者の如し、  
 我斥侯は馳せ返りて敵兵逆襲の舉に出るとを告ぐ、時已に午後二時、山地師團長は  
 久しく無事無聊に苦しむたる際なれば、直ちに我右翼縱隊の一部に警急集合を命  
 し、戰鬪序列を整ひて、徐かに敵兵の近接するを待たしむ。然るに、敵は我軍容の安閑

敵兵進軍  
し來る

敵兵狼狽  
し去る

なるを望み見て、以て是れ其備ひの未だ整はざる者と爲し、無謀に進み來りつつ、石  
 嘴子の南方高地に在る我陣地、第二聯隊長伊瀬知大佐が一隊兵を以て占據せる處に  
 向ひ三面より來りて之を包圍せむとす。我第二聯隊及び砲兵第一大隊は豫め待設  
 けたるとなれば、前後二ヶ所の高地に布列せる野砲山砲を開きて、青天霹靂の勢を  
 以て俄然猛烈に發射せしめ、又歩兵は各要地を占めて敵軍を狙撃したるか故に、敵  
 は痛く狼狽を極め、逃走する者あり、斃るる者あり、屍を擔きて走る者あり。右往左往  
 の混雜中、死する者傷つく者、其幾十百なるを知らず。蓋し彼は一昨十八日土城子の  
 小勝に誇り、日本軍の安閑なる狀況を誤認して、其戰備の未だ完からざるに由るも  
 のならむと思料し、重て之を逆撃せば、復たも勝利を獲べしと信し、此の如く無謀無  
 策の盲進來襲を爲したるものなるべきも、我が精銳なる諸隊の一撃に遭ふて、忽ち  
 潰散奔竄せり。時に日已に西に傾ひき、山路漸く濛々として、追撃に便ならざるのみ  
 ならず、我軍が全力を奮て敵の根柢を覆滅するの目的は、既に明曉に在るを以て、師  
 團長は令を下し、追撃を停止し、益す我か守備を嚴にせしめたり。此日襲來せし敵兵  
 は大約三四千人にして、其死傷は百餘に降らざるべし。我軍の負傷は、僅かに兵卒二

名のみ。

### 第三

#### 總攻撃の部署

廿日午後一時軍司令官大山大將は師團長及び旅團長を會し、自ら方略を指示し、諸隊の攻撃目標を定め、其各任務を命令せり。即ち左の如し。

#### 第一師團の攻撃目標

##### 一 松樹山砲臺

本街道の東の突角に在り、但し此砲台を陥るる前に於て、先づ椅子山砲台を略取するを要す。

椅子山と松樹山との距離は大約千五百米突にして椅子山は本道の西側に在り。

既に椅子山を取れば松樹山は大に其効力を失へはなり

#### 混成旅團の攻撃目標

諸隊攻撃  
標の任務目

##### 一 二龍山砲臺

第一師團が前項の任務を了るまでは混成旅團は陣地に據りて持續戦を爲すべし

第一師團が椅子山を陥略すると同時に混成旅團は直ちに松樹山の直東なる二龍山に向ふべし。

二龍山と松樹山との距離は大約百五十米突なり。

故に之を約言せば、椅子山を取りたる後は第一師團及び混成旅團の兩隊は同一の目標に向て全力を盡くすと謂ふを得べし

#### ○左翼縦隊の任務

一 左翼縦隊は前項事業の了る迄、旅順の東北背面に在りて敵を牽制すべし。但し該縦隊の本隊は岔溝及び鞍子山を経て混成旅團の左側に出る筈。

其枝隊は西南海岸の小路を經過する隊と共に混成旅團が大攻撃を爲すを見て、同時に混成旅團の攻撃目標に向て進むべきと

西南

岔溝

### ○攻城砲廠の任務

廿一日未明より椅子山松樹山二龍山の各砲臺及び其東方の臨時砲臺に向て砲撃すべし。

### ○搜索騎兵の任務

戦闘中は常に我右翼隊の右側即ち西方海岸一帯を搜索して警戒すべし

我第二軍が旅順總攻撃を爲すの一般方略は此の如し。此方略は旅順の形勢敵情を眼前に近く視察して、而かも其攻撃前日に定められたるものとするときは、彼平壤の役、五十里以外の遠隔地に於て二週間以前に豫め定められたる作戰計畫に比すれば、其計畫の難易精粗、彼此大に相同しからざると推して知るべし。顧ふに、平壤攻撃の困難を極めたる點は敵城の險絶強固なるに在らずして、而かも主として、我軍運送の困難、糧食の缺乏なるに在りしなり。今や旅順攻撃は之に異なり、大連灣の連絡洞通せるか故に、兵站運輸の點に於ては、彼平壤に於るか如き深憂大患ある無き也。獨り其至難とする所の者は敵の堡壘堅牢にして、其砲力の強大、銳利なると、世界

平壤攻撃  
旅順攻撃  
の差

旅順攻撃  
の所

長將の苦  
心する所

秋山騎兵  
少佐の腹  
見

に於て亦川指中の一なれば也。故に之を攻むるに急激接戦を以てせむと欲せば、我幾千の人命を犠牲にせざるを得ず。而かも此犠牲の員數は遙かに平壤役よりも多くを必要すべきの勢あるものは、實に是れ旅順攻撃の大困難たる所以なりとす。夫れ多く我軍の性命を犠牲にして以て之を力攻するとせば、旅順攻撃は強て難しとせざるべし。雖、是の如きは長將の爲すを屑しとせざる所即ち我軍犠牲を可及的少數に止めて、而かも能く此稀有の堅要堡寨を陥略せむとこそ、是れ長將の深く苦心して大に其力を無形の境に盡くす所以に非ずして何ぞや。

旅順陥略の前に於て、第二軍司令官と第一師團長とが、殊に其心慮を勞せし所は實に此點に在りたるや疑を容れず。故に我軍は能く騎兵を利用して力を偵察地理及び敵の情勢に盡くし、騎兵隊長秋山少佐は十一月十一日以来、百難を冒かして、深く旅順附近の山間を跋渉し、以て敵情を偵察し、旅順攻撃の一般方略に関する意見書を調へ、之を軍司令官に進呈せり。其要領左の如し。

### 旅順攻撃方略意見書

(十一月十六日頃に進呈せられたるものなりと云ふ)

本街道より水師營

砲彈の効力實見微弱

松樹山占領の頃

一 旅順攻撃の最も簡單なる方略は、他無し。黎明に乗じて軍の主力を以て本街道より水師營を經、旅順港市街に迅速進入するに在り。

假令ひ一舉にして其目的を達する能はざるも、水師營の北方約三千米突の高地に於て、退却兵を收容するに安全なるを得べき良好地あり。

旅順背面砲臺の諸砲聲に徴して之を推測するに、小口径砲多きに居り、其砲彈の効力は實見上極めて微弱なるを認む。且つ旅順背面の地形は波狀多きか故に、我攻撃隊の動作をして多少隠蔽せられしむるを得べし。

一 又他の一方策は、松樹山砲臺を先づ占領するに在り。之を占領せむと欲せば、我軍の主力をして土城子より石嘴子を経て水師營西方高地に進入せしめざるべからず。此攻撃に就き最大困難は五百米突ある高地まで攻撃しつて我兵を登攀せしむるとの如何に在り。

一 三十里堡附近石井村より左に入り、辛寨子及び岔溝を経て山陵間を貫き、旅順の東北背面に出るの通路は、大なる縦隊を前進せしむると困難なり。且つ此山路は車輛通し難きか故に、糧食の供給に困しむべし。此縦隊の糧食を補

糧食補給の方法

敵は單に旅順を固守するのみ

騎兵將校偵察の功

攻撃命令

給する方法は、他無し。旅順本街道上に於る前木城驛、双臺溝、西長嶺子等より臨時擔夫隊を發送し、以て糧食を送給補充せしむるを便とするに在り。

敵は單に旅順を固守するのみにして、此山間の間道に其一部乃至數部隊を出して以て我縦隊を逆撃すると無かるべし。故に山間を通過前進せしむる縦隊は、多數を要せず。若し其増加を要するときは、西長嶺子附近より鞍子山附近西方鶯哥石に達する道路よりして之を左方に分進せしむる可とす。是れ旅順本道は物資に富み、道路善良にして、糧食彈藥の補給を行ふに頗る便易なるか故也。

蓋し滿洲地方の如き、馬匹の縦横馳驅に適する邦土に在りては、地理偵察の任務は、騎兵の最も適當する所たるは勿論なるが故に、我第二軍は當初より夙に注意し、騎兵大隊の良將校を撰み、旅順攻撃前に於て、萬死を冒して虎穴に入らしめ、以て敵地の形勢を充分偵察せしめたる結果として、總攻撃の方略に於て、確實なる勝算を立つるとを得たりし也。是れ豈に偶然ならんや。

是に於て廿日夜八時、山地中將は、第一師團各部隊長を米河子の營所に集め、明日攻

撃に關する命令を下したり、即ち左の如し。

(一) (五)軍は明廿一日を以て、敵壘を攻撃す。

(ろ)混成旅團は、土城子より旅順に通する本道の東に展開し、二龍砲臺に向て

攻撃す。但椅子山砲壘攻撃中は旅團は持續戦を爲す。

(は)左翼縦隊は、旅順の東北方に展開して敵を牽制す。

(に)攻城砲廠は、明日未明より砲火を開く。

(に) (ほ)本師團の任務は、先づ椅子山砲壘を占領するに在り。

(三) (へ)西少將は歩兵第三聯隊(一中隊缺く)歩兵第二聯隊の第三大隊、騎兵半小隊、

山砲大隊、工兵第一中隊、衛生隊半部を率ひ明拂曉椅子山砲壘を攻撃すべし。

(四) (と)砲兵聯隊第三大隊を缺くは明日午前五時迄に石嘴子の西南方に於いて、椅子山砲臺を砲撃し得る如く陣地を占領すべし。

(ち)歩兵第二聯隊(一大隊を缺く)及び工兵第二中隊の二小隊及び衛生隊半部は砲兵聯隊を援助すべし。

行李

(五) (り)爾餘の諸隊は豫備隊を爲り、午前二時石嘴子の西南方に集合し、余の直轄に屬し、歩兵第二旅團長の進路を進む。

(六) (ぬ)諸隊の行李は、午前六時迄に米河子附近に集合すべし。

(七) (る)輜重の内野戰病院及びひ彈藥縦列は午前五時迄に石嘴子に、糧食縦列は五時迄に米河子土城子の間に集合すべし。

(八) (を)余は豫備隊と共に進行す。

明治廿七年十一月廿日夜八時旅順港附近米河子師團司令部に於て

第一師團長陸軍中將 山地元治

全軍寂然

敵軍の目前に  
通るを知らず

軍令肅然として、全軍將士の肺肝に徹したり。全軍の決心は益す其確定と沈静とを加へたり。故に二萬の大軍各營寂然として、唯哨兵衛兵の劍光を見るの外は、何等の響きだも聞かさず。然るに敵軍が日本軍の大決心既に決定勃然迸裂の期機が迫りて眼前に在るを夢にだも知らずして、晏然睡夢に耽りたるを、憐れなれ。獨り旅順を成る敵兵のみならず、李鴻章を始めとして、滿廷君臣誰ありてか、東洋第一の堅塞たる旅順口此金城鐵壁たる旅順が明日を以て日本軍の爲に陥落せられむと

想ふものあらんや。

此夜天晴れ氣爽かに、衆星燦爛として、北斗光りあり、正に是れ清曆光緒廿年甲午十月廿三日の夜にして、此夜の月出は午後十一時四十二分に在りき。

茲に我第一師團の先鋒たる第二旅團長西少將は、此夜固より既に決心する所あり、部下將校第三聯隊第一大隊長丸井少佐を營中に呼び、明朝進撃の先鋒たる任務の要領を指授し了り、同少佐が、明朝必死の念ある誠精を察し、副官に命じて、武蘭酒を開栓せしめ、共に一小盞を傾け、心中を示すに一首の和歌を以てせり。其歌に曰く  
今更らに浮世の望みなかりけり

あしたをまつや武士の身は

蓋し我將校の多數は皆此くの如き精神を以て、此夜を過せたりし也。獨り此精神の鬱勃として禁ずると能はざりし山地中將は、此夜八時過る頃より、牀上に横臥して、研聲雷の如く熟睡せしが、夜半月出を報するや、直ちに蹶起して、馬に跨り、號令一聲、全團肅々として旅順攻撃の途に上れり。時に朔風徐かに動き、霜露未だ凝らず、半輪の秋月將に渤海に登らむとす。

號令一聲 全團肅々 渤海に上る

西少將 攻城砲廠 山砲大隊

此日我砲兵第一聯隊の野砲二十四門(四中隊は水師營地名也)の西北方高地に陣せしむ。然るに此陣地は阪路峻峻にして而かも岩石多く、砲車を推挽するに最も困難なるが故に、更に工兵一中隊を附して之を助けしめ、且其陣地の完く獨立なるを以て第二聯隊長伊瀬知中佐は歩兵二大隊を率ゐて之を掩護せり。  
西少將は、此日椅子山砲壘攻撃の先鋒隊將たるが故に、午前一時十五分を以て、其露營地(石嘴子)を發し、椅子山の西方に迂回し、椅子山敵壘の左側背に迫り、山地師團長は其後に續きて前進せり。  
攻城砲廠は、西少將部隊の後方平野に於て工兵中隊の援助に依り肩牆を築き、其陰に布くに砲列を以てせり。(此月終は午前六時半に)  
山砲大隊(西少將の部屬たる砲兵第一聯隊)も亦椅子山の西方に砲列を布けり。  
攻城砲廠は、其陣地一望曠濶なる平原にして、一も天然の陰廠無く、敵前に在りては極めて危害多き不利の地なりと雖、之を外にしては、其占むべき位地絶へて無きか故に、此處に陣地を定めたりしが、其肩牆は、午前六時半に至りて始めて成りしを以て、同時に椅子山敵壘を目掛けて十五珊の攻城砲一發を試みたるに、彼は直ちに應

敵砲着々  
照準を誤  
らす

先頭壘下  
に迫らん  
とす

九井少佐  
衆に先ち  
て前進す

戦し、壘上より激しく射撃を始めたり。敵は從來能く此壘下に於る地勢と距離とを  
暗知せるか故に、其彈丸は着々能く照準を誤らすして、常に我砲列陣地の近傍に落  
ち來り、我砲車の前後左右悉く敵彈ならざる莫く、一方に在りては、我砲兵第一聯隊  
の野砲廿四門も亦椅子山の北方より猛烈砲火を開きて敵壘を攻撃せり。幾くも無  
くして、西少將の部隊歩兵第三聯隊の先頭は、忽然として椅子山の最西砲台の下に、  
現はれ、午前七時十五分より攻撃を始め、霧の如く飛下する敵の連發銃彈を冒かし  
て敵の壘下に迫らむとす。敵は必死と成りて之に抗し、我第三聯隊の士卒を殺傷す  
ると數十人、然れども、第三聯隊先鋒第一大隊長九井少佐(政亞)は第一中隊田原少尉  
と共に衆に先だちて椅子山の高峰を攀ちり、兵を麾きて上方に前進せり。  
此時我か大砲は攻城砲及び野戰砲廿餘門は西方よりし、野砲廿四門は北方よりし、  
交も椅子山敵壘を目的とし、狙ひを違ひず、猛烈に射撃を逞うしたるに、敵の大砲亦  
頑強に應戦して屈せず、且つ松樹山砲臺も亦其砲門を我砲隊に向けて盛んに之を  
反撃し、黄金山砲臺は殊に有力なる重砲遠距離大口徑を以て椅子山敵壘を援けて  
我軍を狙撃すると頗る激烈を極め、彼我兩軍の砲聲は轟々烈々として、山河爲に裂

此時機な  
るが突貫

椅子山砲  
臺の要害  
全く我手  
に歸す

け天地も亦震はむとするの勢あり。  
然れども、敵の砲彈は其照準の度を誤またさるにも似ず、命中すると極めて稀に、亦  
破裂すると最も少し、之に反して我砲彈は百發殆んど百中の勢なるか故に、堅固無  
双を以て誇れる椅子山砲臺も、今や漸く其力屈せむとするの色を現はせり。此時機  
なるぞと、我驍將九井(政亞)少佐は直ちに「突貫」掛れの號令を發しつゝ、身を以て衆  
に先だち敵の砲壘に突入し、縦横突撃を逞うし、第一壘を乗り取りければ、他の砲台  
(第二、第三)は此猛勢に辟易し、其守兵は皆立ち處に潰散せり。而かも、椅子山砲台の鄰  
近に在る案子山及び望台の二砲台の敵兵及び其山麓に在る殺軍左營は、同時に潰  
走し、背面防禦の咽喉たり頭頸たる椅子山砲台の要害全く我軍の手に歸したるは  
正に午前八時過る頃なりき。  
椅子山砲台の將に陥落せむとするや、山地師團長は、山砲兵第三大隊の陣地を去り、  
馬を其地と椅子山との中間なる低地に進め戰機を察しつつ在りしに、時恰かも八  
時頃、方家屯近傍椅子山の西南一村落にして李家屯に通ずる處に當り激烈なる砲  
聲の起れるを聞く、是より先に、中將は、特に乃木旅團長に命し椅子山の陥落と共に

松樹山砲

方家屯方面の砲撃

其部下の兵を率ゐて椅子山砲台の北方より出て殺軍操練場方面に向ひ進入すべき任務を授け置きたるに、今や之と反対方面なる椅子山の西南方家屯方位に起れる砲聲は、何隊の戦なる乎を解する能はず。中將は其麾下に在りたる工兵一中隊に令し砲聲の方位に赴かしむ。幾くも無く『椅子山陥落せり』の報告中將に達すると同時に、方家屯方面の戦聲彌々激烈に、其銃砲剣戟衝突の音響は手に取る如くに聞えたり。中將彌々怪しむ、急騎を馳せて之を侯視せしめたるに、何ぞ料らん、是れ乃木旅團長が其部下一聯隊を率ゐて命令の地に赴むかむとせしに、途中西方より遁走せむとする所の敵兵に遭逢し、之を逆撃しつつ有るものならむとは、此敵兵は歩騎合して千餘人に過ぎざるも、饅頭山砲台より我乃木隊に向て頻りに發砲して逃兵を應援するか故に、其争鬪大約三十分間を費やし、敵兵全く鴟子嘴方面に敗走せり。然れども、旅順海上に在る我艦隊は、此時一轉して、西海岸に移り、海上より此敗兵の退路を砲撃したるか故に、彼等は北方に逃ると能はず、旅順半島の絶端なる老鐵山の岩洞間に窟伏せるもの如くなりき。

初め椅子山砲台の陥るや、我か野砲砲兵第一聯隊の四箇中隊は更に進みて松樹山

松樹山砲

山砲中隊六門  
二龍山砲台  
二龍山砲台  
二龍山砲台  
二龍山砲台

を砲撃するの地位に陣し、第二回の砲撃を始めたるに、敵は最前椅子山其他堅寨の陥落に辟易し、遁逃心を起せしが故に、我か猛勢に抗抵するの氣力を沮喪し、我曳火彈の數發を被り其火薬庫の爆裂轟然として天地を震動するや、早くも既に潰走を始め、歩兵の突進攻撃をも待たずして、松樹山砲台も亦全く我有に歸せり。時に午前十一時過なりき。

椅子山砲台の陥落を待ちて二龍山を攻陥するは、混成旅團長谷少將の任務なりしが、同少將の部隊には野砲絶へて無く、唯山砲中隊六門あるのみ、攻城砲の射距離は遠隔障礙ありて之を用うるを得ず。故に其攻撃最も苦しみて、容易に陥らず、我士卒の死傷も亦隨て頗る多し。然れども能く堅忍力戦奮闘して、遂に二龍山砲臺の堅壘七箇處を陥略したるは、午前十一時半なりき。

之に次きて、左翼縱隊益満部隊が奮戦激闘して、鷄冠山砲臺を陥傾じたるは、五十分頃なりき。

是に於て、旅順港背面防禦の堅壘は、廿一日午前六時半より我攻撃を始め五時間を出てずして悉く陥落する所と爲れり。



作戦計畫の周密と  
將士の忠勇  
決死の志

此の如き堅固なる砲壘を僅々五時間にして陥落せしめたる所以は、敵軍將校の怯弱無能力を極めたるに由ると固より其一大原因なるべしと雖、亦我軍作戦計畫の周密其宜きを得たるを其將士の忠勇決心奮闘の力に由ると明かなり。我第一師團進撃の状況は前に記するか如し。而して混成旅團進撃猛烈の状況を左に記せむ。是れより先に混成旅團の内其第十四聯隊并に騎兵一中隊砲兵一隊工兵一中隊衛生隊半部及び糧食半縦列等益満中佐の率ゆる所は、十七日を以て、本道三十新堡附近、石井村より左方に分れて、辛寨子岔溝の山路に入り、第廿四聯隊は混成旅團本隊に屬し、廿日双台溝より左に分れて山陵起伏の間を越へ、此夜趙家屯に宿し、翌廿一日午前二時頃より前進せり。聯隊長吉田中佐は前より豫め部署を定め、第一大隊大隊長長尾尙緝は右よりし、第三大隊大隊長安田宗直は左よりし、各々夜を冒かして二龍山の北麓高地に進ましめ、明朝椅子山敵壘の陥落を待ちて左右共に齎しく進撃せむとを期し、吉田聯隊長は第一大隊と共に前頭に在り、長谷川少將は豫備隊第二大隊(隊長中村正雄)と共に後方に在り。曉天將さに白まむとする頃、第一大隊は、夙に指定の高地に達したれども、第三大隊

直に二龍山に迫るべし

吉田聯隊長

地雷火の爆裂

は尙ほ未だ到らず。故に第一大隊は暫く背面凹地に其兵を隠伏せしめて以て第三大隊の來るを待つと久しきも、杳として消息なし。時既に午前七時半ならむとす。參謀士官馬を驅りて來り、令を傳へて曰く、『第三大隊大隊の位地頗る隔つるか故に之か集合を待たば、恐らくは時機を愆らむ椅子山砲壘の陥落は今將さに眼前に在らむとす。貴官は宜しく直ちに二龍山に迫るべし』と。吉田聯隊長は之に答へて曰く、『僅かに一大隊を以て二龍山敵壘を陥れむとは、無謀の舉なり。必勝を豫期し難しと雖、命令とあれは何をか辭せむ。唯死力を盡くし之に當らむのみ』と。時に旅團副官馳せ來りて長谷川少將より別に二箇中隊を送り、第一大隊を援くるとを告ぐ。吉田聯隊長は、乃ち第一大隊と二箇中隊とを以て直ちに二龍山を攀り、前夜より豫め各隊に戒め、號令を下す迄は敵壘に向て發銃すると勿らしめたるが、敵は壘上より俯して我兵を瞰射し、大砲の破裂連發銃の亂飛すると極めて激烈なり。我兵は之に屈せず屍を踏越へ猛進し、敵壘前大約三百米突許りの處に到るや、轟然たる敵の地雷火は我先頭兵の脚底に破裂し、砂烟爆騰し、其慘狀を極めたり。我兵は之にも撓まずして、血を踏み屍を越へ奮て壘下に肉薄す。此際敵は「ガットリング」速射砲を發射すると

九州男兒の膽力を顯はすは此時なり

六門

左翼縱隊

雞冠山進軍

益す猛烈にして山谷爲に震はむとす。我士官は衆に先だち九州男兒の膽力を顯はすは此時なりと叫びて衆を勵ましければ、我兵争かてか脚闕せんや互に先を争て、敵壘に攀り躍りて壘内に入り縦横突撃を逞うせしに、敵は終に支へずして第一壘は陥落せり。時に午前十一時半頃なり。次て第三大隊も亦來會し次の砲台を陥ひれた。此第廿四聯隊には野砲無くして唯山砲中隊六門あるも、此の如き堅牢なる高山敵壘に對しては山砲の効力甚た乏し而かも第二軍に屬する攻城砲は、二龍山に對しては射程に障碍不便ありて其用を爲す能はず。故に二龍山攻撃の最も困難を極めたるは固より當然なりとす。

茲に又我左翼縱隊歩兵第十四聯隊は十七日、益溝辛寨子の間道に入りたるより道路凸凹峻険隘を經、糧食彈藥の運搬に頗る艱難を極めたりしも、幸に敵兵の逆撃を被ひらず、廿日には混成旅團本隊の左方一里餘を隔てたる鶯哥子に露營し、其前哨を龍頭山に張り、廿一日は午前二時を以て、夙に八里莊の高地(雞冠山砲台の東北方)に進み混成旅團本隊と、豫め聯絡を通し、椅子山砲壘の陥ると同時に、雞冠山敵壘に向て進撃せり。此縱隊にも亦野砲無く、唯山砲六門ありと雖、地勢之を用うるに便

花岡少佐

大山大將の命令

ならず。益滿聯隊長は、其歩兵第一大隊(隊長花岡少佐)第三大隊(隊長島野少佐)を従ひて左右より齊しく猛進せしめたるに、敵は頑強にも抗戦し、殊に黄金山砲台より廿四珊十五珊等の長距離重砲を此線に集射し、我側面を攻撃すると頗る激烈なりしは、第一大隊長花岡少佐は、率先衆を督して奮闘する際敵彈の爲に重傷を腰部に被ひりて斃れたり。聯隊長は副官渡邊大尉をして之に代り、第一大隊を指揮せしめ、進みて敵壘に突入し、終に其第一壘を陥る。第二壘より第五壘に至る迄も亦皆相次ぎ潰散す。時に午前十一時五十分(一説には十二時廿分頃とも云ふ)なりき。

此敵は海岸に沿つて遁逃せしか故に、益滿中佐は豫備二中隊をして之を追撃せしめたり。

是に至り、旅順口の背面防禦は悉皆我有に歸せしか故に、軍司令官大山大將は直ちに左の命令を下せり、曰く、

(一) 第一師團は前進して旅順口を占領すべし。

(二) 混成旅團は前進を援助し、且つ敵若し旅順より東北方に走るの形勢あらは之を拒絶すべし。

黄金山砲臺

(三) 左翼縱隊は混成旅團長の配下に復すべし。  
 旅順口の占領に對して最も有力なる抵抗障礙を爲したる者は黄金山砲台也。他無し。此砲台は他に勝れて、展望自在なるが故に、其備ふる所の大口徑遠距離重砲は、孰れも三百六十度の回轉を以て、八面射撃其意の如く攻撃力を逞うするの便あるを以て、今曉來、椅子山、松樹山、二龍山、雞冠山の各砲台に應援し、我兵に向て其力を逞うしたるのみならず、我野砲山砲の陣地に至る迄も、終始逆撃したるものは、此砲台也。故に旅順口占領は必ず先づ此砲台を第一とせざるを得ず。故を以て山地師團長は歩兵第二聯隊隊長伊瀬知中佐(此隊は今朝石嘴子附近椅子山西北方に陣し、我が野砲兵らざるも)に命ずるに黄金山砲台其他占領の任務を以てす。同隊は直ちに進みて旅順市街に入り、各處に潜伏せる敵兵を屠殺し、黄金山砲台より猛烈射撃する敵彈を冒かし、峻崖絶壁を攀りて呐喊一番砲台内に突入したるに、敵兵は抵抗すべき氣力も無く、先を争て潰散せり。時に午後五時なりき。  
 混成旅團も亦旅順口の東端海岸なる老蠟嘴砲台を占領し、以て敵兵の東北に走るべき路を截斷せり。是に於て黄金山以東の砲台及び北西海岸各砲台も亦戰はずし。

敵兵の退走  
老蠟嘴砲臺の占領

旅順半島  
各砲臺皆  
我手に落  
つ

各隊旅順  
口に集ま  
る

て。皆。我。手。に。落。ち。旅。順。半。島。二。十。有。餘。の。大。小。砲。台。兵。營。船。渠。造。船。廠。水。雷。營。及。び。各。種。の。兵。器。各。般。の。軍。用。機。器。等。は。舉。げ。て。我。軍。の。占。有。す。る。所。と。爲。れ。り。其。價。値。を。問。へ。ば。蓋。し。三。億。萬。圓。に。降。ら。ず。と。云。ふ。  
 是に於て、諸隊一同其列を正うして、殺軍操練場、旅順市の北西に在る練兵場に集まる洋々たる軍樂の聲は、場の中央に起る。至軍一齊之に和して、天皇陛下萬歲、我軍萬歲を連唱せり。此夜師團は旅順口内に、混成旅團は、其右方砲壘内に露營す。夜來朔風頻りに寒雨を吹きて、冷氣骨に徹せり。

### 第四

#### 攻城砲廠の効力

此。戰。に。於。て。特。に。注。目。を。要。す。る。は。我。軍。砲。隊。の。戰。闘。力。が。著。る。し。く。敵。を。制。し。た。る。に。在。り。是。れ。攻。城。戰。に。於。て。固。より。當。然。な。り。と。雖。も。是。れ。よ。り。先。に。平。壤。攻。撃。の。如。き。は。我。軍。唯。山。砲。あ。る。の。み。に。し。て。野。砲。は。一。門。だ。も。無。き。が。故。に。大。に。攻。撃。の。勞。と。時。間。と。を。費。や。し。た。り。き。鴨。綠。江。虎。山。の。役。に。は。第。三。師。團。及。び。第。一。軍。の。直。轄。砲。廠。に。於。て。若。干。の。野。砲。

砲廠の戦  
闘力

攻城砲の  
最必要

ありしと雖、是れ其攻撃點敵壘の堅固に對したるものには非ず、獨り旅順に至は、則ち然らず、敵壘の堅牢此の如し、山砲と歩兵とのみを以て之を陥れむと極めて難きものあり、攻城砲及び野砲の必要なると言ふを俟たず、是我第一軍が攻城砲廠の備を設け以て此役進撃の用に充てたる所以なりし也。

此臨時攻城砲廠は、砲兵四箇中隊野砲廿四門攻城砲四門より成立し、第一大隊は永嶺少佐(源吉)第二大隊は松本少佐(鼎之)に長たり。

敵の將校  
其無く  
能く其  
利用す  
るに能  
はず

流石の  
椅子山  
砲廠  
力も其  
折

より、敵壘應戰の激烈なる、若し彼敵將にして堅忍沈毅の能力ありて、其彈丸を濫發すると無く、機を見て能く射撃せしめたらむには、我陣地は元來極めて平衍曠濶にして十分敵壘の瞰視線内に在るが故に、攻城砲廠四箇中隊の將卒は、過半死傷を免かれざるべきの虞ありしも、幸にして其虞無かりしは、是れ敵壘將校の絶へて其人無かりしを證するに足れり、我軍の爲には無上の幸福なりしと謂はざるを得ず、我砲彈は、着々其照準を誤らず、皆敵壘上に破裂して猛烈畏るべき偉功を奏したるが故に、流石の椅子山敵壘も、終に其強抗力を漸減し、我歩兵第三聯隊をして其機に

乗じ第一壘内に突進するとを得せしめたるなり。

椅子山第一壘の陥るや、第二第三の敵壘も亦相繼ぎて陥れり、是に於て我攻城砲廠は、更に其陣地を進め、第一第二中隊(永嶺少佐指揮)は前面高地に砲列を布きて、松樹山及び二龍山砲台に向ひ、二龍山には我砲門を向けたりと雖、中間に掩蔽點あり砲彈達せず、第三第四中隊(松本少佐指揮)は右方に出て椅子山西南麓に陣地を設け、敗走の敵兵を砲撃せり、此時黄金山饅頭山等各海岸砲台より、我松本砲隊に對し巨砲を亂射すると太甚だしく、其響きは轟々たれども、我兵之が爲に死傷する者は極めて稀れなりし所以は他無し、海岸諸砲台より射る所の敵の大口徑砲彈は、大半其彈中に填つるに大豆或は土砂を以てしたる者なるを以て也。

### 第五

#### 我艦隊の効力

徒らに陸軍の功烈に眩して、海軍間接の効力を忘るべきに非るは、固より今に始まりたるに非ず、旅順港陥落は其直接偉功の我第二軍に在るとは勿論なりと雖も

苟くも戦史を讀むものは、亦須らく我艦隊の効力を記憶せざるべからず。是れより先き、我聯合艦隊司令長官伊東中將は、十一月七日以來毎日我遊撃艦隊三隻及び水雷艇數隻をして旅順港口を警視せしめ敵の艦船若し此に出入するものあらば直ちに之を撃破或は捕拿するの備へを實行し、夜間は殊とに其警戒を嚴にせり。

十九日に至り中將は、大連灣假根據地に於て左の命令を發したり。

(一) 八重山艦は十一月十九日午後本灣を發し、廿日午前威海衛沖に至り、敵情を偵察し、同日午後三時頃同沖を發し、廿一日午前五時より六時の間に於て本隊に合し、之を報すべし

但し本隊は廿一日午前六時頃旅順沖に在るべし

(二) 十一月廿一日午前一時本隊第一遊撃及び筑紫、大島、鳥海、赤城は順次本地を發し左の隊列を以て旅順沖に至り陸軍に應援すべし

(イ)本隊(ロ)第一遊撃隊(ハ)第二遊撃隊(ニ)第四遊撃隊

(三) 筑紫、大島、鳥海、赤城は、小濱島沖に至れば、本隊を離れ、陸岸に向て進み、午前五

時頃適宜の距離に至れば東方海岸砲臺即ち老蠟北山及び老蠟嘴砲臺を砲撃すべし。

但し砲撃の目的は該砲が旋回砲臺なるが故に其背面北方に向て我陸兵を砲撃するの恐れあるを以て、之を牽制せむが爲に海面よりして射撃を加ふるに在り。

砲撃の時刻には我陸兵は椅子山の北西水師營(地名)附近に散在すべきか故に、海上我艦よりの砲撃は西方に向て發射するを要す

(四) 我陸軍が砲臺を占領したるときは直ちに旭章旗を該砲臺に、建る筈なる故之を認めたるときは、我艦は即時砲撃を止め、而して、筑紫は小瀛船を陸岸に遣はし、陸軍に連絡を通すべし

(五) 第一水雷艇隊第三水雷艇隊及び山城丸は廿日本地を發し、小濱島附近に至り、廿一日午前六時本隊に合すると

(六) 第三遊撃隊及び摩耶、天城、近江、及び第二水雷艇隊は本地に留まると

廿一日午前一時我艦隊は十餘隻の水雷艇を率ゐて大連灣を出て旅順口の前面沖

に至り、午前六時頃第四遊撃隊赤城筑紫大島鳥海等は旅順最東岸砲臺に向て砲撃を始めたるに敵も亦直ちに應砲し、其一弾は大島の艦頭を飛越して次艦との間に落ち、續きて又一弾大島の前に落つ敵の砲彈此くの如く艦傍に落ると數回既にして、敵壘は砲門を回轉して背面を撃つもの如し。是れ蓋し我が陸軍が背面敵壘と戦を開きたるか故に海岸砲臺回轉砲も亦之に應援したるものなるべし。

本艦隊は旅順口の此景狀を遙かに望みつつ、旅順沖を一直線に航過し、老鐵山高角を過ぎて渤海灣に到りしも、午後一時舵を回して再び老鐵山高角を經廻し旅順沖に向ふ。

第四遊撃隊は朝來專はら東部砲臺老蠣嘴を砲撃し居たるが、午後に及びて、我陸兵は既に此砲臺を占領し、其砲を用ゐて鄒方砲臺(黄金山)を攻撃し居るの狀を見る。歩兵第十四聯隊第三大隊は此日午後三時過ぎ老蠣嘴砲臺を占領し、嶋野大隊長親から其副官と共に、同壘の大砲を以て敵の逃兵を砲撃せるか故に、海上軍艦より遠望して之を本文の如く評せるものなるべし。

此時饒頭山砲臺は未だ屈せず、清兵據守して海上我艦隊に向て盛んに砲撃を行へ

り。我艦隊の先頭隊其砲臺の前を通過し、恰かも嚴島艦が其前を過る時饒頭山敵壘より射撃せる砲彈嚴島の艦尾に近く墜落し數丈の水烟昂騰して轟然たる震雷の響きを發せり。次て嚴島橋立は各三發の狙撃に逢ひしも幸に中らず。扶桑も亦二三發を狙はれたれども或は前に或は後に落ち、或は達せずして止めり。

午後三時半過る頃、敵の水雷敷設艇二隻、港口より出て潜に航岸に沿て西し午後四時老鐵山高角に近つかむとす。我旗艦は直ちに水雷艇七隻及び高雄、金剛二艦をして之を急追せしむ。時に怪雲老鐵山高角に横はり、暮色溼涼、海上將さに激浪を起さむとするものゝ如し。然れども、我高雄、金剛は他の水雷七隻と共に敵の水雷敷設艇を究追し、其一隻を轟沈せしめ、他の一隻は之を淺洲に乗り上げしめ、直ちに之を破壊せり。

既にして日暮れ、北風凜冽、海濤激揚し、大艦巨船も港外に安居するを得ず。我艦隊は第四遊撃隊の四砲艦及び八重山艦并に一隊水雷艇をして終夜旅順港口を警備せしめ、其他は沿岸を巡邏したりしが、翌廿二日に及びて風濤益す太甚たしきが故に各艦列を解きて大連灣に歸泊せり。

廿三日艦隊各艦より小蒸汽船を出たし旅順港内水雷を掃除する爲に掃海法を施行せり。

以上旅順攻撃に關する我海軍の効力如何を見れば單に十一月七日より廿日迄、毎夜水雷艇を以て、旅順港口を嚴密警封し之を監するに、數隻の軍艦を以てしたるの一事と廿一日海上より東岸砲台を砲撃したる一事とに過ぎざるもの如し。然れども、是れ直接の小働作のみ。我陸軍をして、旅順占領の大偉勳を成就せしめたる所以の者は、寔に我艦隊の最初北洋艦隊を痛挫し、清國海上の能力を大半殲滅したるが故に、黄海々上安全航行自在にして以て我第二軍をして上陸を完ふせしめたるに原因せり。是れ此旅順陥落に於る海軍の大効力の存する所たるを忘るべからず。

### 第六

#### 犒勞勅語及び令旨

旅順占略成功の捷報が大本營に達するや、天皇陛下は陸軍に向て左の勅語を賜はり、皇后陛下は左の令旨を達せしめられたり。

勅語

勅語

(第二軍ニ賜ハリタル者)

旅順ハ、渤海ノ關門、敵國ノ恃ミテ鎖鑰ト爲ス所。今卿等一舉之ヲ拔ク、朕深ク其功勞ヲ嘉賞ス。漸次天寒ク前途尙遠シ。卿等其レ各自愛奮勵セヨ。

令旨

(第二軍ニ賜ハリタル者)

我第二軍ニ於テ、旅順港占領ノ趣、皇后陛下聞シ召サレ、頗ル御滿悅特ニ將校下士卒ノ忠勇ナルヲ深ク御感賞ノ旨御沙汰アラセラレタリ。  
右令旨なる者は、皇后陛下の御旨を承けて皇后宮太夫香川子爵より之を大本營を経て第二軍に傳達せられたる演達也。

### 第七

#### 彼我の死傷及戦利品

旅順の役に於る我軍の死傷は大約左の如し

我軍の死傷

所屬隊名	戰地名	將校	死	負	傷
		下士卒			
		將校			
		下士卒			

前衛步兵及	土城子	一	一	二	一	二
獨立騎兵隊	橋子山	一	一	一	一	一
第三聯隊	金子山	一	一	一	一	一
第二聯隊	黃龍山	一	一	一	一	一
第廿四聯隊	二龍山	一	一	一	一	一
第十四聯隊	鷄冠山	一	一	一	一	一
合計		三	六	二	七	二

二九八

右死傷中將校の官氏名左の如し

戦死(歩兵中尉) 藤村滿平  
 重傷(歩兵少佐) 松花下岡綱業  
 入院後死亡(歩兵大尉) 藤村平三

騎兵大尉 別役川敏  
 同 肥後正奇  
 同 中野能介  
 同 沼田尚吉  
 同 佐原祐庸  
 同 松浦友武  
 同 高島八郎  
 同 平岡太郎  
 同 早川新太郎

敵の死傷

敵軍の死傷

旅順に據守せる敵軍の兵數は、未だ詳ならずと雖、之を捕虜中信すべき白狀に徴

旅順殺戮の事情

し、又戦闘の際旅順に在りたる歐洲人の言に照すに、其大約一萬三千人内外なるが如し、而して其内此戦に死せるもの大凡そ二千五百人に降らなるべしと云ふ。顧ふに、此役我軍の死者は、僅かに三十六人、其負傷僅かに二百三十二人に過ぎず。然るに、敵の死者二千五百人以上の夥多なるは、極めて不倫の殺死なるを以て、聞く者之を怪む無きに非ず。外國人等が此點に關して怪訝を狭み、旅順の虐殺と云へる誣謗を喋々するに至れるは、他無し。是れ當時の事情を深く究めざるか故のみ。請ふ其事情を記せむに、初め我軍は、土城子の小戦に於る清兵の野蠻的虐行を見て、痛く之を憤怒したるか故に、旅順口の敵兵に對するや、最も追撃を猛烈にし、苟くも我に抗するものは之を斬りて赦すこと無かりき。而かも、廿一日午後我軍の旅順市街に進入するや、敵の敗兵は早くも、皆其軍服を脱し、通常人民の衣服を装して所在人家の樓上或は床壁に潜伏し、而かも、我兵に對して、發砲する者亦多し。故に我兵は、民家を捜査し、其潜伏せる支那男子の丁壯にして其兵丁ならむと推料せらるべきものは、容赦無く之を拘出して殺戮するとの止むを得ざるに至りしなり。



又旅順市街に住する支那丁男の多數は、元來同處造船廠水雷營水師營等に平常從事する所の諸工匠なるか故に、彼輩は兵卒に非すと雖、亦各其劍刀或は棍棒を揮て我兵に抵抗したる者亦尠からず。故に其市街は到る處死傷者を出さざる無く、頗る慘然たる景狀を呈したる所以なりし也。

蓋し此の如き事情の爲に、旅順市街に於て、夥多潛匿せる敵兵及び、我に抵抗せる支那人の殺戮せられたるは、是れ文明邦國に在りても亦免かれざる所たり。況んや彼支那の如き國に在りてをや。我事虐殺の風聞の如きは、蓋し、我取功を猜忌し、之を嫉む所の歐米人が、之を誣謗したる者なるとも知るべし。

戦利品

戦利品

旅順戦捷の戦利品は、黄金山砲台を始めとし、有名なる各砲臺に備へ付けある所の廿四珊海岸砲、其他新式精良銳利なる重大砲、各種合せて百餘門は勿論、并に港内に碇泊せる六隻の小漏船、其他小銃若干、及び軍旗若干



第八

金州城に於る清軍の來襲

我第二軍が旅順口を攻陥せるの日に當りて、敵軍は其優勢を以て金州に向て來襲し、我か虛に乗して金州城を回復せむとを企てたりしも、我留守隊は之を逆へ撃ちて大に敵軍を破り走らせたり。

初め我第二軍の旅順に向て進發するや、十一月十七日旅順敵兵の抗戰必ず頑硬なるべく、隨て我攻撃隊死傷も亦尠からざるべきとを豫期せしが故に、殆ど全力を旅順に向け、而かも金州留守の兵數は、僅に歩兵第十五聯隊第三大隊を缺く、及び騎兵一小隊を以て之に充てられたり。是れ普通對等の敵に對しては、極めて薄弱、危険の留守なるも、清軍に對しては、留守を完うするに足るべしと思料せられたる也。

然れども、復州方面に在る清軍か此虛に乗して來襲すへきとは當初より我留守隊の察知したる所なるか故に、留守隊長河野大佐通好は夙に各方面要地に配備するに左の各小隊を以てせり。(十一月十六日)

留守配備の兵數

- (一) 金州城南門外銘軍軍械處。警備歩兵一小隊
- (二) 但し附近に在る騎兵營及砲兵營に向て監視兵を派出せしむ
- (三) 徐家山下の五ヶ兵營警備 歩兵一小隊
- (三) 徐家山砲台に 歩兵一小隊
- (四) 蘇家屯及ひ毛家營に 歩兵一小隊
- (五) 十三里台子(復州街道屯)成 騎兵一小隊
- (六) 但復州街道方面を監視せしむ 歩兵一小隊
- (六) 金州街道魏子窩街道及ひ兵站交通を監視する爲に石門子屯成 歩兵一中隊
- (七) 金州城内守衛 歩兵一中隊
- 計兵數歩兵二中隊と六小隊即歩兵十二小隊此人員大約九百人及ひ騎兵一小隊
- (八) 守備隊本部即ち聯隊本部河野大佐の司令部 歩兵四中隊内一小隊欠く

敵兵集

河野大佐

敵隊猛進

騎卒一名逃る

河野大佐は、十三里台子監視の歩兵第五中隊長奥田大尉(正忠)に命じ、騎兵斥候をして復州方面五十里堡(金州城を距ると七里十五丁)に進入し、其附近に於て敵情を捜索せしむるに得る所無し、十一月十八日我斥候騎兵一小隊進みて復州街道普蘭店(金州城より十三里五丁、復州城を距ると十二里卅一丁)に向ひ、陳家屯附近に至るや、始めて多數の敵兵か旗を建てて屯集するを見る。敵は一部の歩騎兵を發し我斥候騎兵を追蹴せしむ、我騎兵は漸次退却して三十里堡(金州城を距る四里十五丁)に止まり、其由を河野大佐に報告し、同十九日午後、我が騎兵下士一名、及ひ卒四名、十三里台子より進み行くと三里、五十里堡附近の一村龍口村名に至るや、敵の歩兵一聯隊及び騎兵五十騎内外の來るに會し、敵騎は猛進來り迫る。我騎兵圍を衝きて退却せしむ、途中深沼に陥り、下士一名、卒二名は馬倒れ行く能はず、乃ち自及して之に死す。他の上等騎兵一名及ひ騎卒一名は辛うして深泥を飛越へ、復州東方山間に馳驅し魏子窩街道劉家店附近に出て、此夜零時廿分を以て金州城西方なる聯隊本部に達し、具に此狀を報す。既にして魏子窩街道よりも亦敵の歩騎出沒するとの報あり。是に於て、河野大佐は、敵の主力は復州街道に在らむとを推料し、直ちに令を各大隊

に傳へて、各豫定の防禦陣地に防禦工事を急施し、廿日未明より始め、午前十一時、四十分に至りて完成を告ぐ。

河野大佐は豫め金州防禦の要地を審料し置き、城北の赤山高地は最も要害たるか故に、歩兵第一大隊(第三中隊を欠く)をして其一中隊を此高地に備へしめ別に歩兵一小隊を以て西海岸街道を監視せしむ。而して一面は歩兵第二大隊(第二中隊を欠く)を城北門外に露營せしめ、前哨を石門子三里莊に備へ以て魏子窩街道及び復州街道を監視せしむ。時に廿日午後五時頃也。

此夜十一時四十分、是より先に、十三里台子に屯成せし第五中隊及騎兵一小隊は歸り來りて、敵の歩騎兵大舉して將に來り追らむとするの狀を報し、其一部は已に十三里台子の西方山間に進入し、金州城と十三里台子との交通を遮斷するに至ると告ぐ。河野大佐は即時各大隊に警戒し、明廿一日早朝を以て各隊各豫定の防禦陣地に就かしむ。

廿一日各大隊は、各其防禦陣地に就き、以て敵情を搜察し、其來襲を待つ。午前十一時廿分敵の歩騎兵簇々として三十里臺子の南方高地(金州と十三里臺子との間は概

敵の歩騎兵大舉して來り追らむとする

其來襲を待つ

敵の縱隊前進す

我守備隊の配列

して丘陵起伏し凸地連続せり。現はれ、漸次に進み來る。十一時卅分我前哨兵の三里莊前方高地に在るもの敵の前頭に向て一齊射撃を施す。數回敵の縱隊は、是より分れて左右二部と爲り、其右なる者は海岸、即ち復州街道の西方より、其左なる者は街道の東方高地より、互に相應して前進し來れり。

### 第九

### 我防禦の配置及敵軍の攻撃力

我守備隊の配列は、左の如し。

(一) 金州城北方高地。

第一大隊の第一、第四、第三、第二、各中隊を以て順次に山上に配列し、其左側は金州灣海岸に依托す。

(二) 金州城東北高地より復州街道に至る間。

第二大隊の第五、第八、第七、各中隊の順次を以て之を高地に配布す。

(三) 金州城内留防。

稀薄危殆なる守線

第二大隊の第六中隊一箇  
此の如き寡少の兵を以て、四千米突以上の防禦面を守るは實に稀薄危殆なる守線と謂ふべし。然れども他に應援を取るべきの兵力無く唯死守するの決心を以て河野大佐は從容として敵軍の迫るを待てり。

是より先き十一月六日金州始めて我手に陥りたるとき敵が遺棄せし所の八珊ルツプ野砲二門ありしを以て我防禦用に供せむか爲に城内守備中隊の一部をして砲煩使用術を傳習せしめ之を演習すると兩三日にして略ほ其使用に慣るゝとを得たり。此日正午十二時過ぎ敵兵益す進み魏子窩街道より來れる敵軍は將に城門に向ひとす。城内留守防中隊第六中隊は野砲を連發して之に命中すると數回敵兵は之に辟易し敵は大砲を有せざりし。敢て城門に近迫せざりき。

敵の兵力  
此日敵軍の兵力如何と看れば大約歩兵七千人騎兵三百騎以上にして其一半四千人は我右翼第二大隊に向ひ他の歩兵三千人は我左翼に向へり。

敵軍の形  
敵の行進は縦隊或は横隊と云ふか如き歐洲現時の陣列法を見ず唯一種錯雜なる散兵と側面縱隊とを以て其正而は六千米突其後方は四五千米突間に連亘し山と

無く野と無く白馬の騎兵五十若くは百騎群を爲し東西に奔走するの狀は頗る壯觀にして我兵をして快と呼ばしめたり。

既にして敵は猛進して我が陣地たる高地を奪はむと欲し猛烈なる攻撃を始めた。是より先き石門子屯成前哨たりし我第二大隊第七中隊の一小隊長平野少尉。其次は石門子より返り我右翼第五中隊に合して防戦せり。敵兵は我彈丸を顧みず悍然として冒進し漸次我右側面なる高地に攀登し來るを以て平野少尉防戦大に力め敵彈に斃る第五中隊も亦力戦之を防くと雖敵勢頗る猖獗なるか故に第八中隊より一小隊を分派し右翼の高地に登り第五中隊を援けて防戦せしむ。城中の野砲も亦此敵を標目として劇しく之を射撃したりしかは頗る敵勢を挫くことを得たり。我右翼の戦最も劇烈なりしは此時にして正に午後一時廿分なりき。

敵兵猖獗  
敵の一部隊は此方面より更に徐家山方向に突出せむも亦測り難きの虞あるを以て河野大佐は城内留守隊たる第六中隊に命し四門の衛兵を僅かに留置し其他の二小隊を以て此方面即ち右側高地の敵に向て前進射撃せしめたり。

士氣大に振ふ

右翼の戦最も劇烈

午後二時半頃旅順陥りたるどの風評を傳ふる者あり我守備隊全体士氣之か爲に

敵兵退却  
大に振起し、第五中隊及び第七中隊の一小隊は共に勇を鼓して奮闘し、而かも此際城中より新に來り加はりたる第六中隊と共に力を協せ終に右側高地の敵を撃退するを得たり。敵兵が一度其高地を失ふや、其氣勢大に頓挫し、復た支ゆるに能はずして退却を始む。是に於て河野大佐は第八中隊及び他の一小隊を發し敵の側背より烈しく之を追撃せしむ。時に午後三時十五分也。

全線射撃  
是より先き、我左翼第一大隊の當面に向ひたる敵軍は、其行進快敏ならず、旌旗堂々として徐かに我線に迫り來る。我各中隊は山上防禦陣地の内斜面に列し、務めて之を隠蔽し以て敵の近接するを待たしめ、其近接する毎に、或は一齊射撃を行ひ、或は撰抜射手をして狙撃を施さしむ。而かも敵既に四百米突の距離に近進し來るに及

敵兵退却  
ひ、俄かに全線を以て烈しく射撃を開始せしむ。敵兵驚きて、忽ち其前進を止め、各兵各地物に依りて應射す。然れども、山上より瞰射する我射撃の効力は著しく、敵の隊伍、忽ち動搖を始めた。此時我右翼に於る敵兵も亦退却を始むるに際し、ければ、我左翼隊は、之を見て勇氣十倍し、猛烈射撃を行ふ。敵兵は終に支ふる能はずして退却す、乃ち更に總射撃を以て之を追撃せり。時に午後三時半頃也。

### 第十

#### 彼我の死傷

我守備隊の死傷は、左の如し

死傷	士官	下士卒	計
一	一	八	九
負傷	一	四六	四六

此の如く、復州街道東方より金州に進來せる敵軍四千八百人なる者は、我僅かに二大隊にたも満たざる守備隊の爲に反撃せられ、散々に敗れて十三里台子の方面に退却せり。河野大佐は五個小隊をして之を追撃せしむ。午後四時過ぎ日没に近きを以て我兵を收む。

然れども、海岸より來れる敵軍三千人は日没に至るも、尙ほ敢て退却せず、我兵寡少なるを以て之を烈しく撃退するを得ず。夜半に及びて彼れ自ら退却せり。

敵軍死傷の夥多

敵軍の死傷は頗る夥多にして、其戰場に遺棄せる屍体我守備隊が後に之を埋葬せ

る者たけにても、五百餘人に降らず。其他敵軍の收め去らたるものも亦多かるべしと雖、員數は未だ詳かならず

### 第十一

### 金州守備隊の任務の完成

此日の敵軍をして、若し我日本軍隊と匹敵すべき訓練あるものならしめむには、金州の守りは蓋し殆んど危かりしなるべし。

當時我守備兵は僅かに第十五聯隊第三大隊を欠くの第一第二兩個大隊と騎兵一小隊とあるのみ。此少數兵の中より又徐家山砲臺の守備及び城内留守。其他軍用建造物の衛兵等の爲に分派したるもの四小隊餘。即ち歩兵凡そ一中隊半を欠けり。其殘餘の歩騎兵僅かに千三百人未滿の兵を以て、七千人以上の敵軍に抗し、苦戦力闘以て之を撃退するを得たるは能く其任務を完うしたるものと謂ふべし。

若し其午後三時以後に至り、敵軍大敗退却の機は眼前に在り、我兵勝に乗りて之を究追せは、更に大勝利を獲べきは必然なるも、當時他に豫備隊無きか爲に、此追撃を

能く其任務を完うしたるものと謂ふべし

追撃を逼り得ず

逼り得ずと雖、是れ大退うするを得ざりしと、河野大佐の遺憾も亦推して知るべき也。然れども、是れ大佐其人の過ちに非ずして、第三軍全体配兵の不足に因由するものなるが故に、之を奈何とすべからず。故を以て河野大佐は、此際慎重なる處分を施し、廿一日日没に際し左の命令を下したる

命令

十一月廿一日午後四時於金州城北門外

第十五聯隊長 河野大佐

- (一) 前面の敵は敗走せり。聯隊は追撃を止む。
  - (二) 第一大隊は借地に露営し。其方面の敵を監視せよ。
  - (三) 第二大隊(第六中隊を欠く)は其一個中隊を三里莊に一他個中隊を東門外に、他一個中隊を北門外に置き各中隊各其前方を監視せよ。
  - (四) 第六中隊は城内に復歸し、其事務に復從せよ。
  - (五) 騎兵小隊は徐家山方向搜索の後東門外に宿營せよ。
  - (六) 本官は北門外聯隊本部に在り。午後九時命令受領者を出せ。
- 以上

之に次て下したる命令、左の如し、

命令

- (一) 本日撃退せし敵兵は、尙ほ前方に留まる者あり。
- (二) 聯隊は明日尙ほ信地に在りて守備せむとす。
- (三) 騎兵小隊は、明早朝十三里蓋子方向に進み、敵の退路を搜索せよ。
- (四) 歩兵第一及第二大隊は、本日の位置を固守し、斥候を以て敵情の搜索を力めよ。
- (五) 金州城守備隊たる第六中隊の一部は、今夜西海岸に至り、第一大隊の左翼に赴援せよ。
- (六) 本官は明朝北門外に在り。

十一月廿一日午後九時金州城北門外

守備隊長歩兵大佐河野通好

翌廿二日未明より、各大隊は右命令の如く各任務に従事す。午前九時半旅順街道上に敵の敗兵旅順の敗走兵騎兵七百あり將に三十里堡金州城を距る南方四里十丁の北を廻り東に向て走らむとするの狀ありと云ふ。在三十里堡守備兵第十四聯隊の第六中隊長より金州河野大佐に電報

河野大佐は、直ちに騎兵斥候を徐家山砲臺附近に出し敵情を偵察し、各大隊に命し、前方并に後方の警戒を嚴にせしむ。午前十一時頃果して旅順敗兵五六百騎金州城

旅順敗兵  
復州に向

軍夫の義

守備を嚴  
にす

の西方海岸に沿て復州に向ふ。我一部隊之を要撃す。敵兵窮蹙再び其馬首を返して旅順街道に向ひ、金州城を距る二三丁の處より俄かに其勢を起して城門に迫る。門外の我歩兵二小隊防戦頗る力むと雖衆寡敵し難し、故に我歩兵は退きて南門内に據り、城壁上より一齊に射撃し以て之を防くと頗る力む。時に城内の我軍夫八十名、我軍の危急なるを見て、義憤に堪へず、各棍棒を手にし、南門を開き一齊吶喊して敵兵に向ふ。敵は其軍夫なるを知らず、以て短兵接戦隊なりと思惟したりけむ。又其馬頭を轉し、復州街道に向て逃走せむとし、城の西門前を過ぐ。我守備隊は、悉く西門壁上に集まり激しく敵兵を追射し之を斃すと三百人。敵の殘兵は復州に向て逃走せり

此日我十五聯隊は、専ら復州方面昨日の敵軍を重ねて襲ひ來らむとを慮かり、拂曉より其守備を嚴にしたるか故に午前には旅順方面敗兵の來るを拒止するに遑あらず。正午に及び、北方の敵再來の患無きか如きを思料し、茲に後方即ち南西旅順の敗兵に備へむと欲するに當り、敗兵は既に城外に接近したるを以て、之に當るべき兵隊は極めて少し。故に三個中隊を以て之を要撃し第一大隊の前哨の一部之

に協力し以て敵兵を要撃せりと雖、衆多散亂展開して走る敵兵なるか故に盡く之を射撃する能はず。遂に日没に至り、暗黒咫尺を辨せざるを以て我兵を收む。此日、金州城附近を經過せる所の敵は、大約歩兵三千騎兵五百に下らざるべし。其我兵の爲に射殺せられたるもの亦數百人なりしも、屍体は多く海波の漂はす所と爲りたるか故に之を計算すると難し。其逃脱せる者の大部分海岸より北方普蘭店方向に、其一分は大赫山方向に走れり。而して此日我隊の死傷は左の如し

我傷死

士官

下士卒

死

なし

五名

負傷

なし

一名

乃木少將

初め第二軍の金州を發して旅順に向ふや、大山大將は深く金州留守の事を審慮し、山地師團長に命じ、其人を撰ひ之に任せしむ。而して河野大佐は實に其撰に當られたり。山地中將以爲らく『河野にして在らは、金州後顧の憂無かるべし』と。既にして金州城危迫の急報が、廿一日午後五時を以て旅順に達するや、山路中將は直ちに令を乃木旅團長に傳へて曰く『貴官の一舉手を煩はさむ』乃木少將は謹承の一語と

諸部隊を土城子に集む

乃木少將金州留守隊司令官に任せらる

共に、第十五聯隊の第三大隊及び騎兵半小隊砲兵第六中隊を率ゐて急行金州に赴援せむとす。然るに、前夜以來第二軍の諸隊は、皆一睡だもせず。此日曉來の進撃激戦の爲に疲勞したると、且つ彈藥の補充及び背囊の受取渡方等に關し、諸事の準備は意の如く運はざるか故に、止むとを得ず。此夜の出發を延はし、僅かに兵を休め馬に秣ひ、翌廿二日の天明を俟ちて、諸部隊を土城子に集め、土城子は旅順を距る三里、乃木少將自から之を率ゐて北に向ひ、廿三日三十里堡附近に至りしに、金州城より電報あり、曰く『敵軍は悉く我守備隊の撃退する所と爲り、狼狽して復州方面に退却せり』と。乃木少將の失望想ふべし。是に於て、少將は其夜三十里堡金州を距る四里十丁に宿營し、兵を休む。翌廿四日を以て徐かに金州に向ひ、午後城に入る。此日は大軍司令官より命令あり、乃木少將は金州守備隊司令官に任せられたり。



# 日本陸戰史卷七

## 海城戰鬪

### 第一

#### 海城戰鬪

我第二軍が既に金州城を陥れ大連灣を占領したる以上は、第一軍と第二軍との連絡を互に相通するの必要なるは勿論、北京に向て進軍の作戰計畫を運らすが爲に、第一第二兩軍の氣脈其聲勢互に相貫通せしむるの必要は一日も之を緩うすべからず。若し此聲勢氣脈にして互に相貫通するに非れば、假へ旅順は陥りて我手に歸するとも、之より更に北に進みて遼河を渡るとを得ず。何となれば、遼東半島の中樞たる最要害の地は實に海城縣に在り。而かも海城にして敵の控守する所たる間は、我第二軍は決して深く北方に進むとを得へからざるを以て也。

第二軍の必要氣脈

遼東半島の遠中樞に在り

海城占領の必要

是に於て乎、海城を占領するとの大必要あり。而かも我第一軍第三師團は此必要を遂行すべきの任務に當れり。故を以て、我一軍の一半たる第五師團は九連城に留まり其一部は鳳凰城に據守せしめ、而かも第三師團は獨り進みて海城を占領するか爲めに、北方に向ふべき方略の決定せられたるは、實に十一月中旬にてありき。

海城を占領するが爲に、先づ我兵の經由すべき道路は、二線あり、其一線は鳳凰城よりするもの、他の一線は大孤山よりする者、是れ也。鳳凰城より柞木城を経て海城に達するもの路程四十里、日本里以下皆之に倣ふ、其大孤山港より岫巖州を経て柞木城に出て海城に達する者、里程二十餘里、而かも其過路は比較的に稍や坦夷にして峻少し、故に此線を取りて進攻せらるべきとに決し、首として岫巖城を攻めて之を陥れたるは、十一月十八日なりき。

此岫巖城攻撃は、南北兩方より之を挾撃したるものにして、即ち我本軍たる大迫旅團は、大孤山方面よりし、而かも其應援隊たる第五師團三原枝隊は、鳳凰城方面、即ち北方より來り敵の側面を攻撃し、終に占領の功を奏したるなり。

大孤山より海城に約廿七里弱なりと云

岫巖攻撃

### 第二

### 岫巖の地理

請ふ先づ岫巖州地理の概要を記し次に大迫部隊の大孤山に於る經略の要況を述べ、而して後に、此岫巖占領の戦況に及ぼさむ。

岫巖の地勢

岫巖一名秀巖は、盛京省の南方最も樞要なる城市の一つにして、西は海城及び蓋平に通し、北は遼陽に連なり、東は鳳凰城に通すべく、南は太孤山の港津に達す。所謂四通の地たり。故に滿清創業の初より、此地に八旗の各軍より各壯兵を出し、以て此地を守らしめたりき。今日に在りては常備守兵無しと雖、清廷の宗室嘉善人の名なる者之か城守尉たり。

大洋河の上流は西北より來り岫巖城の北東二方を繞り、河岸と城との間大約十丁餘あり、城の南方には大孤山港に通する道路あり。

是より先に、十月廿六日、九連城の陥るや、大迫少將は其所部隊を率ゐ敵を追撃して大東溝九連城を距る十八里十五丁に至り、十一月五日、更に進みて大孤山港大東溝

大洋河

大迫少將  
は福島中  
佐と道を  
分ちて大  
孤山に向

を距る十九里五丁)に入る。而して、第五師團參謀福島中佐は、第三師團の一部隊を率ゐ、大迫少將と道を分ち太孤山に向ひ、十一月三日を以て龍王廟に至りしとき、報する者あり。曰く、九連城の敗兵、太孤山港に來り、放火掠奪暴行至らざる所無し。故に同港の人民は老幼婦女を携へて四方に逃散せりと。其翌四日、中佐修家堡子に至る初め、中佐の營中に養へ置きたる平壤役の捕虜孫某なる者あり、太孤山の市民也。中佐乃ち孫を召し之に語りて曰く、我大日本帝國軍隊の規律嚴正にして秋毫も犯かす無きは、汝等の實見する所也。聞く太孤山の人民、清兵の暴行に苦しみ四方に逃散すと。誠に憐むべきの至り也。今や我兵太孤山に入らむとす。其市民誤りて我兵を見ること、清兵の如くならむを恐る。故に我是より汝を赦して其家に還らしむべし。汝我軍の恩徳を蒙むると多し。故に宜しく家に還りて我軍の毫も惡意無くして而かも徳多きとを語り、以て汝の卿黨鄰里を安んせしむべしと。感泣俯伏、恩に感して去る。同五日、中佐進みて太孤山に入るや、市民の猶ほ残りて其家に留まれる者、彼孫姓と共に迎へて門閭に拜跪して曰く、大王來る。愚民等焉くんぞ歸順せさらんやと。此日大迫枝隊も亦來り太孤山に入り、其市中を巡視するに、巨屋大家多くは敵兵の

敗兵の暴動

焚掠に罹り、餘燼未だ滅せず。黃海北岸の一要港をして此塗炭に陥らしめたるは實に惜むべし。土民は敗兵の狀を説くものあり。曰く、清國政府は、戰亂前より、此港守備の爲に、八旗の一たる鎮藍旗歩隊及び鎮紅旗歩隊の二營を派して此地に駐屯せしめたるが故に、十月廿八九日頃、九連城の敗兵、或は廿人或は三十人つゝ、群を爲し、幾回も逃れ來り、多少の不法を働らきしも、亦過甚の事無くして濟みしが、十一月一日敗兵六百人の一團、一時に來襲し、或は小銃を發射し、或は民家に放火し、或は貨物を掠め、或は婦女を犯す等亂暴至らざる所無し。此に至り、駐屯せる二營の守備八旗兵なるもの當に之を制する能はざるのみならず、已れ亦敗兵の群に混加して共に亂暴を働らき而かも皆秀巖の方向に奔りたりと。蓋し此敗兵は、金州に逃れ返るの意なりしも、此地に來りて、我二軍の已に華園河口に上陸したるとを聞き知りたるが爲に怖れて之を避け、翻て岫巖方向に走りたるものなるべし。

土人の聲

清兵が此の如き亂暴を逞うするは珍らしからざるが故に、土人は九連城大敗の報を聞くや、豫め敗兵の害を避くる準備を急にし、或は山東に走り、或は山間僻陬に隠

れる等の擧に出てたる者多かりしが、果して前記の如き暴行に罹れるなり。幾くも無くして、日本軍隊が進撃して、此に至らむとするを聞くや、土民は以爲らく自國の軍隊すらも其亂暴なると此くの如し。況んや他國の軍隊其乘勝の勢を以て此に入り来るならば、何様なる暴威を逞ふせられむも亦測り難しと。唯慄然として恐怖に沈み居たる際、今や大迫少將の一隊此地に入り其市民に對するや、甯に秋毫も犯かす無きのみならず、而かも之を愛撫して、之を水火の中に救ひたるが故に、土民の其徳を慕ふと兒童の其慈母に於る如く、前日四方に離散せし者も此風を聞き、日を逐て復歸するもの、漸々増加し、而かも近村農民等も亦其果物野菜類等を齎らし、來りて太孤山に販ぐに至れり。

土人應に懐く

### 第三

#### 岫巖攻撃の一般方略

大迫枝隊が發せし所の偵察騎兵の報告によれば、九連城の敗兵一千餘人大砲數門岫巖城に據守するものの如し。我第二軍司令部は之を掃蕩するの目的を以て大迫

岫巖掃蕩

枝隊及び立見枝隊の一部に向て命令を下せると左の如し。

- (一) 大迫枝隊は、正面より岫巖を攻撃し之を占領すべし。  
但立見旅團の一部三原少佐の枝隊と互に相協力すべし
- (二) 三原枝隊は、其所部歩兵一大隊及び搜索騎兵一分隊(八騎)を率ゐ、十一月十四日を以て鳳凰城を發し、岫巖城の北方より進み敵の側面に出て之を攻撃すべし。

但正面攻撃の任務は、大迫枝隊に在るを以て双方互に協力して占領目的を完遂すべし。

三原少佐

三原少佐(重雄)は命令を受け、即日(十四日)鳳凰城を發し、四臺子(鳳凰城を距る二里五丁)より西に向ひ沙子崗に至り、搜索騎兵及び援護歩兵撰抜小隊(四十二人)をして前方約三里の村落に露營せしむ。翌十五日搜索騎兵(甘露寺中尉)之を率ゆは援護歩兵小隊と共に黃花甸(鳳凰城を距る十八里五丁)に達し、歩兵第廿二聯隊第三大隊は新開嶺の險を越へ、老爺廟に達す。同十六日騎兵及び前哨歩兵一小隊(即ち撰抜歩兵は書子勾)に歩兵は領勾附近に達す。

騎兵の衝突

此日、我偵察騎兵は始めて敵の偵騎と衝突せり。初め甘露寺中尉は、前方黄嶺子の嶮阪を偵察せむと欲し、阪麓の民舎に入りて訪問する所あらむとするも、土民等は傲然不遜不快の状にして頗る我に抗するの色あり。且つ其一人急に趕走し去りて敵兵に通報する者の如し。此際敵の哨兵は已に民舎の後方高地に潜み居たるを以て山上より射撃する銃弾霰の如し。時に日既に西に傾ひき、我騎兵は高地を仰き視れども、夕陽反射して敵の所在を詳らかにする能はず。唯硝煙濛々として山腹を掩ふあるを見るのみ。幾も無くして、山上三面より現はれたる敵兵は、俯瞰して、我を射撃すると頗る急なり。中尉は部下を率ゐて退却しつつ敵の兵力を察して、町田中尉の步兵撰抜隊(一小隊)と合し、水を隔てて敵と相對峙し、以て後方本隊の來るを待ちしに、敵も亦敢て究追せず。此夜は、町田中尉甘露寺中尉と共に終夜警戒を嚴にし、以て翌日の攻撃時期を待てり。

### 第四 黄嶺子の戦

敵兵我行進路を包圍す

嶮然たる嶮制地

敵軍は此日其騎兵の衝突に由りて我三原技隊の側面に出て來れるとを知り、急に其兵力を分ち、一は土門子嶺太孤山方面大迫技隊の進取地に備へ。一は三原技隊を扼せむか爲に岫巖を距る一里餘なる黄嶺子の險要に據守せしむ。其兵數は、大約歩兵千五百人、馬兵二百五十人、野砲二門なり。

同十七日早曉、三原技隊は、進みて黄嶺子の麓に達し、遙かに敵兵を望めば、敵は悉く左右の山頭及び前面山上岩石の間に據り、以て我行進路を抱圍せるか故に我兵仰て之を攻むること不利なり。雖我勇悍なる將士は之に屈せず、二個中隊は道路の左右に展開して斜面を攀ち、枝隊の本部二個中隊及び騎兵は其後に在て之か援隊たり。然るに敵兵か恃みて以て無双の天險と爲す所の要地は獨り此阪路のみに在るに非ずして、更に其西方に屹立せる嶮然たる嶮制地に在り。其山皆岩石にして絶嶮遙かに雲に接す。頂上は兵を置くべきの地には非ず。雖其高處より俯して我軍を瞰射する彈丸は紛々我兵の頭上に注下して爲に我兵の行進を妨碍するか故に先づ此最高峻峰頂を奪はざるべからず。町田中尉は此困難なる任務を受け、其部下(選抜步兵小隊四十餘人を率ゐて、我右翼より進み岩角を攀り、彈雨を冒かし、辛うし

最高峯頂を占領

彼我の負傷

て突進せしに、敵は峰頂に在れども、險岩崛起せるか爲に、死。角。隨。て。多。き。か。故。に、町田中尉の一隊選抜兵は此死角内を潜りて前進攀登し殆ど峰頭に達するとを得たり。最初の一峰は、我歩兵の銃剣突撃其効を奏し、之を奪ふとを得たりと雖峯又峯は彌上高く敵地に攀へ、一峰を奪へは又他の一峰再ひ敵の據守するありて我兵は殆んど呼吸を繼くに遑あらず、幸に秋月少尉も亦其一小隊を率ゐ、撰抜隊の援護として攀登し來れるに會す。町田中尉は之か爲に力を得、乃援護射撃を秋月小隊に託し、自ら勇氣を鼓し選抜隊を指揮して高地に突進し、茲に全く最高峰嶺を占領するを得たり。枝隊本部も亦進みて黃嶺子の嶮要を攻奪し敵軍を撃退し、其野砲一門を奪ひたり。

此日の戦は、十七日午前八時三十分に始まり午後八時に終る。我負傷は將校一名下士卒二名のみ、敵の死者は未だ詳かならず。

第五

岫巖占領

敵兵橋木城に向て走る

岫巖城を陥る

翌十八日拂曉より、三原枝隊は重ねて前進攻撃を始め、町田中尉の選抜隊は先頭に進み、行く行く敵の騎兵を撃退して、敵の據守せる河岸の高地を占領し、以て枝隊本隊の前進をして容易ならしめむとを力めたり。

此日岫巖の敵兵は、續々橋木城方向に向て退却を始め、而かも其止まり戦ふものは皆敵の退却を掩護するか爲めなる殿後隊あるのみ、然れども、此殿後隊は數百の騎兵と四門の野砲とを以て、殊死して其陣地を固守したるが故に、三原枝隊の前進は容易なるを得ず、敵の退却を傍觀せざるを得ざるの姿と爲れり。町田中尉は之を見て、其部下廿餘名を率ゐて敵の砲兵陣地の左翼に突進し、甘露寺中尉は騎兵一名と共に其右翼に突進し、終に敵の野砲四門を奪取したり。町田中尉は陸軍大學卒業生にして、殊に野砲の使用に達す。故に部兵を指揮し、敵砲を利用して敵の退却路を砲撃し、且つ之を追撃せりと雖、僅々廿餘の歩兵と二三の騎兵とを以て數千の敵兵を奈何ともする能はず。故に切齒して、本隊の繼到を待つのみなりしが、既にして、三原枝隊も亦來り會し、茲に一舉して岫巖城を陥れ、傳令騎兵を發して、之を大迫枝隊に報したるは、午前第八時過也。

### 第六

#### 岫巖城の正面攻撃

岫巖正面  
攻撃の任  
務

岫巖城の正面攻撃の任務を受けたる大迫少將の枝隊兵數は左の如し。

- (一) 第五旅團司令部
- (二) 歩兵第六聯隊 (第二中隊と第二大隊を欠く)
- (三) 歩兵第十八聯隊の第二大隊
- (四) 騎兵第三大隊本部及第一中隊
- (五) 砲兵第三聯隊第三大隊本部及第五中隊

計 歩兵二大隊と四中隊

騎兵一中隊

砲兵一中隊

砲 六門

大迫少將  
岫巖に向

十一月十六日大迫少將は太孤山を發して岫巖に向ふ。是れより先き、少將は騎兵一

敵騎北に  
走る

中隊及び歩兵一小隊を發し岫巖方面に前進し、其敵狀を偵察せしめ(十三日)十四日騎兵は更に進みて賈家店に至り、敵の哨騎と相衝突し、敵の後續部隊の在るとを確知せり。此日軍司令部より岫巖進撃占領の命令あり。十五日朝少尉は歩兵一大隊を以て先發せしめ、而して翌十六日自から之に繼げるなり。

此日第五師團第十旅團に屬する騎兵軍曹川崎某騎卒一名と共に鳳凰城より間道を経て大迫枝隊に來り三原技隊の連絡を通し、其復命を受けて去る。

十六日朝、敵の前哨騎兵十名は來りて我哨兵線内を偵察するものあり、我前哨歩兵一分隊直ちに之を射撃し一名を斃す。他は皆逸走せり。午前八時、我先頭騎兵の報あり、曰く敵の騎兵百人歩兵三四百人北方より土門子に向て行進す。我前哨歩兵は北方山上に據りて之を待つ。機はくも無くして敵の騎兵約六十名來り迫る。我歩兵一齊射撃を爲す敵は馬を下り應戰すると數分間に於て北に走る。此夜我兵は土門子嶺及び桂花嶺附近に露營せり。

同十七日、岫巖南方高地より我に向て發砲す。我兵は進みて紅家堡子の高地を占領す。時に敵兵約千五百岫巖より南進し、我正面及び左右翼に向ふ、而かも岫巖の南方

村落には敵の砲兵野砲數門あり、頗る侮るべからず。故に我歩兵大隊は敢て輕進せずして以て枝隊本隊の到るを待てり。

大迫少將の本隊が紅家堡子に到達せしは、午後四時半頃なり、敵は我兵數の増加せるを見て、俄かに恐怖の色を現はし、漸く退却せんとするの狀あり。我隊中壯年なる將校は、此機に乗じて敵を追撃し、以て岫巖を急陥せむとを少將に請ふ者あり。少將許さず、曰く敵は敗兵退心あり、何ぞ強て急くを要せんや。明日徐かに之を占領せむのみと。乃ち紅家堡子に露營せり。

同十八日拂曉を以て攻撃を始めむとを豫期せしが、曉霧の深きか爲に妨げられ、敏なる前進を爲す能はず。各中隊は濃霧中を冒かし、七時頃より敵の防禦線に迫まりしに、抗抵するもの極めて稀れにして殆ど無人の境を行くが如し。進て巴家堡子を占領せしに、敵は續々退却せり。

時に、北方に砲銃の聲彌よ近づくを聞く、蓋し三原枝隊が黃嶺子より進入せるものにして、三原枝隊は大迫枝隊に先たち岫巖城を占領したるか故に、大迫枝隊は一人の負傷も無くして岫巖に入るとを得たり。

大迫枝隊  
岫巖に入る

戦利品

戦利品は大砲新式野砲(千八百九十年式)「グループ」七(半)九門砲彈三百發小銃彈一萬餘發雜穀數千石。

### 第七

### 敵の兵力

は未だ詳かならずと雖も、大約左の如し。

- 一 奉軍
  - 靖邊中營
  - 全 左營
  - 全 前營
  - 全 後營
  - 全 中營馬隊
- 一 奉軍
  - 老右營
  - 全 新右營
  - 全 後營



岫巖は險要の地

全 砲隊營

右總兵聶桂林 之を率ゆ

一 盛字營 左翼二起 馬隊

同 右翼二起 馬隊

正藍旗 中 哨

右總兵豐陞阿之を率ゆ

通計兵數大約 三千人

大砲 十門

右總兵部下の將校には守備周鼎甲參將金得鳳張占魁の三人此戰に従事せりと云ふ。

抑も岫巖の地勢は、日本に於て之を譬ふれば會津に似たる險要の地にして、苟くも之を守るに三千の兵と、新式銳利の大砲九門とを以てせば、我兵の爲に攻撃せらるることも、僅々一二日を以て忽ち陥るべき處に非ず。然れども、海上權力全く日本軍の占有する所と爲り、彈藥糧食の運送全く絶へ、岫巖天險と雖亦之を維持する能はざ

兵站運送の困難

ると怪むに足らず。故に岫巖の地たる遼東南方樞要不可失の地たるに清國上將も亦之を知らざるに非ずと雖其力以て之を守るに足らざるを奈何んせん。是れ其守將聶桂林豐陞阿の徒が倉皇として之を棄て退却せる所以なりとす。

### 第八

### 柵木城進軍

我日本軍が征清事業を始めたるより、既に百餘日を経過したるも、遼東地方の進軍は、豫期の如く迅速なるを得ず、他無し兵站運送の困難なるを以て也。故に敵軍と觸接する戰爭上に於ては、我軍は毎戰連勝を奏すと雖獨り此兵站運送の困難なる一事に於ては、我名將良帥と雖亦爲に困苦を極めたり。

然れども、何日何時迄も因循遷延すべきに非るを以て、我第一軍の第三師團は、進みて遼東の中樞たる海城占領の任務を遂行せむと決心し、第三師團長桂中將は、十二月八日を以て岫巖城に進み、其翌九日を以て柵木城攻撃の命令を下たせると左の如し。

- (一) 敵の大部は栃木に在りて、其一部は潘家堡子及び二道河子附近に在るもの如し其兵力は四五千ならむ
- (二) 師團は栃木城の敵を攻撃するの目的を以て同地に向て前進せむとす。
- (三) 大迫技隊は九日岫巖を發し大偏嶺牛心山を経て栃木城に向て前進し、本隊の攻撃を援くべし。
- (四) 左側隊は九日岫巖を發し石炭窟子、胡兒溝を経て、干馬河附近に至り本隊の左側を掩護し、蓋平方向を搜索すべし。
- (五) 岫巖守備隊は、岫巖を守備し、黃花界の方向を警戒すべし、大小架橋縦列の職員は一時、本來行務外に使用するとを得。
- (六) 大孤山岫巖の守備隊は、兩地間兵站線の守備に任し運搬隊長及び兵站司令官より要求あらは、之に應ずべし。
- (七) 運搬隊は、兵站司令官押上大佐の令下に在りて、其行務を執るべし。
- (八) 前衛は、明十日午前七時岫巖の東北興隆勾に至る路上小川の處を出發し五道河頭上河を経て大偏嶺に向て前進すべし。

- (九) 本隊は、午前八時卅分其先頭を以て岫崑の北端三叉點を發すべし。
  - (十) 大行李は、午前九時卅分三叉點を發し本隊に續行すべし、但本隊出發迄道路内に入るべからず。  
大行李長は、西尾中尉とす。  
大行李の行軍序列は、戰鬪序列に據る。
  - (十一) 輜重第一聯隊は、午前十時卅分出發大行李に續行すへし。
  - (十二) 輜重第二聯隊は、正午出發第一聯隊に續行すべし。
  - (十三) 野戰電信隊は、岫崑と溝連河との間、電信架設に従事すべし、兵站電信隊に接するに至れば、直ちに報告すべし。
  - (十四) 定規外に、人は二日分、馬は一日分の糧秣を特別に携帶すべし。
  - (十五) 余は本隊の先頭に在りて進行す
- 十二月九日正午岫崑師團司令部に於て

桂 師 團 長

### 第九

#### 攻撃軍隊の部署及前衛の小闘

我軍隊の部署

我軍隊の部署は左の如し

一 右側枝隊

司令官 大道少將

歩兵第六聯隊の第二大隊第七中隊欠

騎兵 一中隊

砲兵 なし

工兵 一小隊

第一糧食縦列

一 左側枝隊

司令官 佐藤大佐

歩兵第十八聯隊の第二大隊

騎兵 二小隊

第一糧食縦列

此六島少將は久直君なり非

一本縦隊

前衛 歩兵○騎兵○工兵○衛生隊  
本隊 師團司令部 歩兵○騎兵○砲兵○衛生隊

司令官 大島少將

司令官 桂中將

司令官 岡田少佐

一 輜重第一梯隊

第二第三糧食縦列○第一第二兵站糧食縦列○第二野戰病院

司令官 木村少佐

一 輜重第二梯隊

歩兵彈藥第一縦列○砲兵彈藥第二縦列

通計 歩兵四大隊と三中隊

騎兵二中隊

砲兵二大隊と二小隊 砲三十門

工兵一中隊と一小隊

我軍は柵木城に進入すべき道路は左右二線あり。即ち一は鳳凰城街道、黃花甸より三家子牛心山を経て潘家堡子に出て、柵木城の東方よりするもの、他の一は岫嵐より王家堡子小孤山を経て二道河子龍鳳王に出て、柵木城の南方よりするもの、是れ

前衛の衝突

也。  
 我右側枝隊(大道少將)は、牛心山方面に出て、其本隊は王家堡より二道河子に出て、互に氣脈を通して進行せしが、牛心山に於ては敵の哨騎百人(大約)十二月十日を以て、我第六聯隊の一小隊(右側枝隊の尖兵)騎兵一中隊と衝突し、其翌日又我右側枝隊第六聯隊第二大隊(第七中隊)欠く騎兵一中隊(一小隊)は潘家堡子に於て、敵の前哨五百人と觸接し、銃戰三十分間に於て敵兵は退却せり。十一日午後二時半(此日本縦隊の斥候騎兵も亦二道河子附近を偵察したるに、敵兵を見ず、進て龍鳳王に至りしに敵兵あり、其一部は我に向て射撃を試みたるか故に我斥候騎兵も亦應射すると少時にして退却せり。時に午前十時頃本隊前衛が茶棚店に達したる際なりき。是に於て前衛の二箇中隊は直ちに前進を命せられ(午前十時)急行して之に赴きたるに二道河子を距ると六七百米突の地に、敵の歩騎大約二三百屯集し、而かも其後續部隊と覺ほしきものは、前方約千五百米突の高地及び其西方櫻樹溝に在りて、各五六名の歩兵を擁し、敵の右翼は其兵數漸次に増加し我に向て發射を始めた。十一日午後十二時〇五分我前衛大島旅團大島久直は其歩兵四中隊を展開し、一齊射撃を

二道河子を占領せり

我軍の右側を攻撃す

施すと凡そ六七回なるに、敵は其鋒を飲め退却したるか故に、我第七聯隊第三大隊(欠く)は直ちに進みて、二道河子を占領せり。時に午後三時十五分なりき。我傷者士官一、下士卒七、馬匹二のみ、戰死無し。敵の屍體、二道河子戰場に遺棄せられたるもの大約七十。

此日敵の兵力は確知すへからざるも、騎兵三四百歩兵二千五六百にして、敵將は聶桂林、豐陞阿及び馬金叙等なるか如し。

第十

柞木城占領

十一日の夜、前衛大島部隊は、二道河子に宿營し、本隊は蟒甸に宿舍せり。此夜夕刻迄の偵察によれば、敵兵は柞木城の南方高地と櫻樹溝西南高地とに占據し、以我軍を要撃せんと謀るもの如し。故に桂師團長は、作戰計畫を定め、明拂曉に於て一部隊を以本道を控制し、而かも我軍主力を以て櫻樹溝に向ひ、敵の右側を攻撃せむとを豫期したり。然るに、十二日拂曉に至り、櫻樹溝方面の敵は漸次柞木城に

前衛柵木城に達す

積雪堅氷の爲に運動困難

退きたりとの偵報を獲たるか故に、師團は前夜の計畫を變し、歩兵一大隊を櫻樹溝に向はしめ、而かも本隊は直ちに本道より柵木城に突進すべき方略に決せり。是に於て、前衛は、本道より柵木城に前進し、諸隊之に繼ぎ、別に第十九聯隊長粟飯原大佐(常世)をして一隊を率ゐて、榛勾より左して櫻樹溝を經由し、敵の退路に進ましめたるに、此一部隊は、途中白艸凹溝の東に於て、敵兵に遭遇し、之を驅逐して、大砲二門を捕獲したり。前衛は午前九時を以て柵木城に達したるに、敵の殘兵既に悉く退却して、隻兵を見ず。

是より先に、大迫枝隊は、潘家堡子附近に於て、小部なる敵兵を驅逐し、此日、師團本隊と大約其時を同うして柵木城に向ひたるか故に、午前九時過ぎ十時の間に來りて柵木城に入り、粟飯原大佐の一隊も亦同時に來合し、柵木城占領此に於て全く了れり。

此日の戦闘は、別に觀るべき角逐無しと雖、道路積雪堅氷の爲に運動の困難なると頗る太甚だし、特に粟飯原大佐部隊は山間峻路堅氷積雪一層の困難に遭逢せり。然れども、我兵は能く此の如き障礙を凌ぎ、就中、前衛は、曉來十時間に近き行軍を爲し

たるも敢て倦勞を覺えず、活潑に運動したると實に其堅忍不屈なるを見る。左側枝隊も亦當初命令の如く任務を完うしたり。

### 第十一

### 海城占領

是に於て、桂師團長は此機に乗じ、海城を占領するの必要なるを察し、更に前進の目的を繼續し、敵兵を追撃しつつ、海城方面に進みたり。十二日午後、我前衛は敵の後衛と戦闘數回にして、營城子を占領し、師團は楊家店に宿營し、此夜桂中將は命令を下せると左の如し。

(一) 敵は海城及び其北方に退却するもの如し。

前衛は追撃して營城子に達す。

(二) 師團は、明十三日海城を攻撃占領する目的を以て同地に向て前進せむとす

(三) 前衛は、明日午前八時三十分出發海城に向て前進し、特に左側を警戒し、遠く營口の方向を搜索すべし、營城子附近より、河の右岸を経て海城の東南高地

海城方面に向て進む營城子

に至る道路を偵察すべし。

(四) 本隊は明日午前七時其先頭を以て楊家店西北端小川の處に出發すべし。柘木城及紅花店附近に宿舎の諸隊は、同時刻迄に行軍序列に入る如く宿營地を出發すべし。

十二日午後九時於楊花店師團司令部 桂 師團長

柘木城より海城に至る間の距離は五里廿五丁にして、道路稍坦夷多し。河流三線ありと雖冬季は水無く、且つ氷結するを以て、之を渡るに便なり。

楊家店より以西は地勢稍や開敞にして展望に宜し。營城子より北西は渺々たる廣野なり。

沿道左右に唐王山、瞭甲山及び蕎麥山等の孤立的小山あり。唐王山は海城の西南二千五百米突に當れり。瞭甲山は城西千五百米突に當る。

唐王山と城南門との間に一川あり。楊柳河と曰ふ。幅五百米突水流幅四五十米突水流一尺。川名を又護城河とも曰ふ。城の外濠たるを以てなり。

敵兵は、城外蕎麥山高地を以て防禦の根據とし、之に備ふるに大砲(速射)三門を以て

海城附近の地理

敵兵防禦及び其兵力

し、歩兵六七百人、之を援護せり。瞭甲山上にも亦一隊六七百人を配置し、城内と互に相應援するの勢を爲せり。其兵數總計は詳らかならずと雖大約三千人に降らざるべし。

海城初度の戦の戦

十三日午前七時我騎兵一大隊は、牛莊及び營口方面を偵察せむか爲且つ師團大隊の左側を掩護するの任務を帯ひ、營城子を發し海城に向ひ、雪を蹴て前進せり。

海城を占領せしむ

前衛先頭は海城の南方約一里なる羅家堡子に到るや、午前九時半蕎麥山上の敵砲は、我前衛に向て第一發を射撃し來れるが、其彈道距離の測定、頗る精確にして、侮るべからず。前衛司令官大島少將(久直)は急に號令を下たし砲兵大隊をして砲列を羅

家堡子の北端に布かしめ、歩兵第七聯隊第一大隊は、羅家堡子に開進せしめ、歩兵第十九聯隊第二大隊をして蕎麥山を占領せしむ。既にして、我大砲十二門を以て、動作整々として射撃を開始したるに其効力著るしく顯はれ、蕎麥山の敵は恐怖動搖の色を露はせしかば、大島少將は之に乗じて歩兵十九聯隊をして前進攻撃せしむ。此時山上の敵兵は漸次に退却して、忽ち其迹を見ざるに至れり。

我軍乃ち進みて海城に迫りしに、敵兵歩騎凡そ百名尙ほ留まりて城門を守らむと

大迫少將  
海城に進  
入す

彼我の死  
傷

す。我第七聯隊の第一第二個中隊は聯隊長の號令に應じ、吶喊凜然として突進するや敵は之に辟易して退却し、二個中隊は之を追撃して海城の北端までを占領せり。第三第四の二箇中隊も亦之を援けて三城子の北約二千米突に在る高地を占領す。是に至り師團本隊は南門よりし、大迫旅團は東門よりし、共に海城に進入せり。時に十三日正午なり。

師團長は直ちに騎兵及び歩兵三個中隊をして敵を追撃せしめたるに敵は左右二道に分れ、一は遼陽方向に退却せるもの大約二千人他の一は牛莊城方に向て退却せるもの約千餘人なりとす。乃ち嚴に前哨を張り、師團は海城に留營せり。

此日の戦我傷者下士卒僅かに四名のみ。死無し。敵の死屍遺棄せるもの三十餘。戦利品は砲三門小銃彈七千餘發等のみ。

### 第十二

#### 海城の位置及海城占領後に於る我軍の勢力

海城の地たる遼東半島の中樞に位し、四通八達の衝路に當り、加ふるに其城市の規

北京進軍  
の策線

摸。頗。る。廣。く。し。て。我。軍。の。策。線。た。る。に。足。れ。り。故。に。我。が。征。清。軍。が。半。島。よ。り。北。西。に。向。ひ。北。京。に。進。軍。せ。む。と。欲。す。れ。は。此。地。を。以。て。策。線。と。し。以。て。第。一。第。二。兩。軍。を。連。絡。せ。し。め。さ。る。べ。か。ら。さ。る。と。は。既。に。前。章。に。も。述。ぶ。る。如。し。

今其地理の要を記すれば左の如し。

海城より各地に至る距離

- (一) 遼陽に至る 十七里五丁
- (二) 牛莊に至る 十二里廿五丁
- (三) 營口に至る 十四里十五丁
- (四) 缸瓦寨に至る 四里卅一丁
- 蓋家屯に至る 三 里
- (五) 乾線堡 四里十丁
- (六) 鞍山站 七里三十丁半
- (七) 沙河鎮 十二里十五丁
- (八) 遼陽城 十五里五丁

海城の地理

海城の四方平坦開豁渺々たる平原廣野なりと雖、城の西方千五百米突に瞭甲山あり、瞭甲山の南方千五百米突に唐王山あり、海城の西南二千五百米突、此兩山は相對して峙立し、海城城中の高地と互に相鼎足の勢を保てり、即ち左の如し。

- (九) 奉天府
- (十) 田莊臺

廿二里十丁  
廿一里十丁

- (一) 瞭甲山(城の西方)

三十五米突

- (二) 唐王山(城の東南)

五十米突

- (三) 蒿麥山(城の東南に峙立す)

- (四) 歡喜山(城の北方)

- (五) 雙龍山(城の東北)

- (六) 二台子岡(一名雙台山)城の北方

故に遼東半島清軍防守の點よりして之を見れば、海城の極めて緊切樞要なるとは、旅順よりも太甚だしきの事實あり、然るに、清軍が十二月十三日に於て、輕々之を棄て、日本軍の占領する所と爲りたるものは、是れ日本の爲に非常の大利益たると同

海城は旅順よりも樞要なる事實あり

清將の無算無略

時に清軍の爲には極大不利益、極大損害たるとは、固より言ふを俟たずして明かなり。然れども、清軍の將帥は元來單に古流の兵法に拘泥して、近世歐洲日新の戰術戰略に暗きか、故に當初海城防守の方略を確定するを知らず、僅々三千の寡兵三門の大砲を以て、我精銳なる三千餘の兵十二門の大砲に抗せむとし、而かも無算無略なる抗戰を試みたるも、其力足らずして、忽ち支へ難きに至れるは、怪むに足らず、是れ十三日に於て、清軍が容易に此城を棄てて、退却したる所以也。

### 第十三

#### 清軍海城回復の計畫

宋慶海城回復の方略

清將宋慶は海城を回復せむと欲し、一萬餘の兵を以て營口街道缸瓦寨一名威王寨と曰ふ附近に陣し、同寨村落の農家土壁を利用し、假設胸壁を堅固に造作せり。又缸瓦寨の東南に一松隣あり、其下に墓地ある處を卜して、清軍は一の掩堡を設け、以て防禦線と爲せり。蓋し宋慶の方略は大約左の如し。



(一) 總兵章高元、總兵張光前の所部隊四千餘人大砲十門を以て、蓋平城を固守せしめ、以て日本軍の第二軍と第一軍との連絡を斷つと。

(二) 缸瓦寨の守備を固めたる後、海城に迫り之を回復すると。

(三) 總兵聶士成、及呂本元の部隊は連山關方面より鳳凰城に迫ると。

(四) 黒龍江將軍依克唐阿の部隊は、寨馬集方面より鳳凰城東北を衝くと。

(五) 此の如く各方面聲勢互に相應して、冬期嚴寒に乘し、日本第一軍を驅逐する

と。

十二月十八日早朝、清兵約二百騎營口街道我前哨線に接進せり、桂中將は、此報を獲るや直ちに參謀兒玉大尉(八二郎)を、原甲山に遣はして敵情を搜索せしめ、又歩兵一中隊(第六聯隊の第一中隊騎兵一小隊)を、蓋家屯、海城を距る三里方向に出し、敵情を搜索せしめたり。該中隊長遠藤大尉(孝太郎)は午後一時十分頃皮廠(皮廠河の側に在り。海城を距る二里十丁蓋家屯を距る一里弱)西方の畑地に於て敵の騎兵約百名歩兵二百人と衝突し、互に射撃を交えんと凡そ三十分にして、敵は其射撃を止む、大尉は既に敵の後續部隊が蓋家屯に在ると、及び其員數如何をも察知し得たるを以て

衝突

(前) 公屯は八里屯子と蓋家屯との間に在り、海城を距る約二里。

攻撃計畫

其隊兵を收めて直ちに前哨線内に還れり、此小戦に我下士卒輕傷七名、死者無し、敵の死傷は詳かならず。

原甲山に赴ひきたる兒玉參謀は報して曰く、午後二時頃上加河附近より敵の大縱隊北に向て前進し來るものあり、三時半頃柳公屯に至りて停歩せり、其兵數は一千人に下らざるべし、外に騎兵約百騎あり、且つ缸瓦寨附近には更に多數の敵兵ありと。

桂中將は敵情を偵知し得たるか故に、直ちに之を攻撃するとに決し、其夜九時、大迫大島(久直)兩旅團長に命し、各若干部隊を整ひ、明朝六時に行進準備を終り、海城の西門北門外に整列して、以て第二次の命令を待たしむ。他無し、敵の位地は夜中に變更するとあるも測り難きか故に、最近の敵情に隨て我軍の攻撃地點行進の方向を定めざるべからざるを以て也。

十二月十九日未明より、大迫大島(久直)兩旅團長は、各其部下を率ゐて、夙に戰鬪行進準備を整ひ、海城門外に整列して、次の命令を待てり、其兵數は左の如し。

第六聯隊第七中隊と第三大隊欠く

第五旅團

第十八聯隊の第一大隊(第二中隊欠)

第六旅團

第七聯隊本部及び第二大隊

第十九聯隊本部及第二大隊(第五中隊欠)

騎兵第三大隊

砲兵第三聯隊(第二中隊欠)

工兵第三大隊本部及び第一中隊と第二中隊の一小隊

衛生隊

計

歩兵

四大隊と二中隊

騎兵

二中隊

砲

三十門

工兵一中隊と一小隊

桂中將原  
甲山に登  
る

桂中將は師團司令部參謀官を率ゐて、徒歩積雪を踏み、原甲山に登る。山高く野濶く、  
して、半輪の殘月舊曆十一月廿三日の曉は雪に映し、頗る遠望に便なり。中將は遙か

柳公屯は  
海城を距  
る僅かに  
一里餘

大迫大島  
兩少將南  
北より進  
む

に、双眸を凝らし、柳公屯の方位を望めども、敵兵の北進し來るべき景狀を見ず。

我騎兵の偵察によれば前夜十一時迄は、敵は確かに柳公屯に居りたるものとなれ  
は、此曉に乗じて、中將は之を攻撃せむとを期せしも、今や其迹を遠さけたるは、是れ  
蓋家屯に引き揚げたる也との報告あり。是に於て、中將は、兩旅團長に命令し、大迫少  
將は原甲山の南方より、大島少將は其北より進行して一は敵の正面を、他は其左翼  
を攻撃せしむ。此時天明け、兩隊人馬の整々として進みて雪中を行くもの、原甲山頭  
より歷々として觀るべし。午前十一時大島少將の部隊原甲山の北方より進めるも  
のは、蓋家屯に達したりしが、此地にも亦敵兵を見ざるか故に、少將は其任務茲に終  
れりと思惟し、乃ち全隊に午餐を傳へ、尋て歸途に就き、其先頭は、八里河子海城を距  
る一里五丁を經過して、原甲山附近に來らむとする頃、忽ち師團の命令あり。直ちに  
急行して、大迫部隊の援助に赴きたり。是より先に、大迫少將の正面部隊は正面より  
蓋家屯に向ひしに、途中前方よりの報告を獲て、同地に敵兵の居らざるとを知りた  
るか故に、午前八時半、師團命令に依り、缸瓦寨に向ひたりしが、大島部隊と途中に於  
て齟齬して互に相遭逢せず。故に大迫隊の前衛は、午前十一時五十分頃下加河村の

敵兵缸瓦  
前進す

敵は缸瓦  
塞を以て  
其中心と  
爲す

大敵缸瓦  
塞に在り

南端に達し、同本隊は其北端に達せり。初め前衛が、此村下加河に入りたる時、僅かに  
 遅留せる敵兵ありしが、我兵直ちに之を驅逐したり。然るに、我兵出でて村端より望  
 めは、敵の一大縦隊は南方より缸瓦寨を経て西進するもの如く、又其西北約一千  
 二百米突の一村落馬圈子に、敵の一縦隊進み来るものあり。且つ敵は缸瓦寨を以て  
 其中心とし、缸瓦寨の北なる香水泡子を占領し、其東南下加河の西南方部落にも亦  
 若干の騎兵を配置せり。大迫少將は此缸瓦寨の敵を撃たむと欲すれども、距離遠く  
 して砲兵を要するか故に、乃ち師團長に向ひて此敵狀を報し、且つ後方蓋家屯まで  
 進み居る所の砲兵に向て尙ほ前進せむとを求め、而かも、少將率ゐる所の部兵歩兵  
 第六聯隊第一第二大隊(第七中隊欠く)及び第十八聯隊の第一大隊(第一中隊を欠く)  
 を以て下加河村の隠蔽部點に開進して、其要處を守衛せり。  
 然るに、桂師團長は、此日九時過ぎ八里河子に至りしも、前方に敵兵無きの報を獲た  
 るか故に、此村に待つと數時なるも尙ほ快報を獲ざるを以て、同村に於て午餐を傳  
 へ、終に一偵察隊を其地に留め、他の二中隊と共に將に海城に還らむとす。時に忽ち  
 飛來れる大迫部隊の急報あり。曰く『大敵缸瓦寨に在り。大迫旅團は將さに之を攻撃

戦已に解  
なり  
偵察勤務  
不敏活不  
完全

馬圈子

せむとす」と。

是に於て、桂中將は其時八里河子村を出て去らむとする所の大島部隊を呼び留め  
 再び缸瓦寨の方向に回進せしむ、而かも中將自から亦師團司令部將校を率ゐて直  
 に馬を驅て缸瓦寨に赴む、到れば則ち戦既に酣なり。  
 此の如く、此日の戦は、我軍騎兵の偵察搜索勤務頗る不敏活不完全なりしが故に、桂  
 中將は敵軍主力の所在如何を偵知する能はず。隨て敵軍の防備要領如何を前知す  
 ると能はざりしなり。故を以て、此日の作戰命令は、皆攻撃偵察の結果より出てたる  
 ものなりき。

### 第十四

### 馬圈子の攻撃

缸瓦寨の東北約千二百米突の處に、一村落あり。馬圈子と曰ふ。敵は早くも此村を占  
 領し、我右側を窺視するが故に、先づ此敵を攘ふに非れば、我砲兵を以て缸瓦寨を撃  
 つと頗る難しと爲す。

石田少佐

第六聯隊の二ヶ大隊は、此時午後一時三十分早く已に左翼に展開せり。第十八聯隊の第一大隊は、此日豫備隊として左方に留まりしが、大迫少將は、此大隊長石田少佐（正珍）に命じて馬圈子を占奪せしむ。少佐は馬圈子の敵を小數と視認したれども、注意を加へ、第一中隊長清水大尉、第三中隊長河内大尉、禮藏をして之に向はしむ。前面森林より約一小隊の敵兵之に對して射撃す。我兩中隊乃ち方向を迂回して之に向ふ。其敵忽ち逃竄す。此時我砲十八門を布列して、馬圈子の村内を射撃するや、是迄村内に巧みに隠伏せる所の多數の敵兵は、此猛烈なる砲撃に驚怖したるけん。一度に現はれ出て、烈しく我歩兵を射撃せり。石田大隊長は方向を轉換し、馬圈子に向ひ、六百米突の處に達せしが、我兵は依るべきの地物絶へて之れ無く、彈丸雨注して之を掩蔽するもの無きか故に、進行して四百米突に達する迄の間に於て、將校下士卒の死傷せるもの頗る多し。蓋し道路に沿て一條の凹溝あり、馬圈子の敵火に對しては斜線狀を爲せるを以て、兵卒は此凹溝内に入りて敵彈を避くるもの多く、該大隊は敵に對して殆んど途上縱隊の形狀を呈せむとし、其不利甚たしきか故に、將校下士は兵卒を叱咤して横隊狀に復せしめむか爲に、身を以て率先し、溝外

多數の敵兵一度に現はれ出

我將校士卒の死傷頗る多し

鮮血淋漓を染む

進撃喇叭

又一横溝あり

敵兵逃走

に奔走指揮せしが、爲に此際多くの死傷者を生したるなり。時に死傷者の鮮血淋漓として、滿地積雪を染むるを以て、石田大隊長は、徒らに途中に遷延せは、爲に士氣を沮喪せしめむとを恐れ、寧ろ萬死を冒かし一氣呵成に前進突貫するに如かじと思認したりければ、大喝一聲、號令の下に、進撃喇叭（普通斑前二百米突位の所に於て始めて吹くべきもの）を吹かしめたり。時に敵を距る四百米突なるも、石田大隊長以下將校の勇猛叱咤に勵まされ、兵は有名なる十八聯隊なれば、藪地に突進して馬圈子の村端に迫りたり。然るに、此村端又一横溝あり。我兵の進行を妨碍す。大隊長は、左方を顧みれば其溝の西方二百米突の處に小敵あり。若し其敵より斜めに此溝を越ゆる我兵を射撃せられむには、我兵忽陷穽に陥らむと必然なりしを以て、大隊長は痛く苦心したるに、彼敵兵は漠然として此機を知らず、我兵をして僥倖にも此前溝を越へしめたり。

我二箇中隊は砲兵の掩護の下に此溝を越へて村端に入れば敵は村の北端より退却を始めたり。堀西軍曹は早くも之を認め敵は退却すと大呼したれば、一隊の士氣一段作振せられ、唳成一躍して村内に突入すれば敵は悉く逃げ去りたり。